辺境令嬢輿入物語

ムク文鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
辺境令嬢輿入物語

【Ｎコード】
Ｎ８５１６Ｖ

【作者名】
ムク文鳥

【あらすじ】
辺境の小貴族の令嬢として生まれたミフィシーリア・アマロー。
彼女が１６歳の時、とある縁談が持ち上がる。
しかし、この縁談がきっかけで、それまで静かだったミフィシーリアの人生は急激に動き出す。

※この小説は、作者のもう一つの小説『魔獣使い』と同じ背景設定、同じ時代設定を用いています。時々ちょっぴりクロスオーバーします。

※２０１１／１０／６　あらすじ修正

序章（前書き）

もう一つの新連載。
こちらも気長におつきあいください。

序章

その国は病んでいた。

それも末期の死病に。

大陸の最北端に存在するその国は、他国から見ればさほど魅力のない国だった。

雪の多い土地柄ゆえに水は豊富なものの冬が長く、作物を育てるには不向き。

平地よりも山地が多く、森林資源や鉱物資源はあるものの、莫大な軍事費を注ぎ込んでまで手に入れようとする程のものでもない。

それゆえに大陸に存在するどの国も、征服よりは交易でそれらの資源を求めることを選んだ。

逆にその国は、それらの資源を提供することで、長い冬のための食糧を買い込むことができた。

そんな持ちつ持たれつの関係が、その国を争いとは無縁の時間を永く過ごさせることになる。

永い永い平穏がその国をゆっくりと、だが確実に腐らせていったのだ。

王侯貴族は民を守ることよりも、自身の欲望を叶えることばかりを考えるようになり、当然その皺寄せは民たちへと向けられる。

ただでさえ少ない作物は、その殆どが支配者階級に占められて。

貧しい民たちは、作物の育たない長い冬の間に農作業以外の仕事をすることで何とか生き長らえている状態。

それを知ってなお、支配者たちは民に手を差し伸べることはせず、それどころか自分たちの懐を暖めるため、より厳しい税を課していくまさに悪循環。

贈収賄がまかり通り、国内の治安も荒れに荒れ、街や村の外側では野党や追い剥ぎが、そして内側では盗賊が好き勝手に暴れ回る。

そんな膿み爛れ、腐れ落ちる寸前の状態に、支配者たちは気付いていない。いや、気付いていたとしても気付かない振りを続けていた。

そんな末期の死病に取り憑かれた国。その国の名はカノルドス王国といった。

カノルドス王国の屋台骨たる支配者たちは、自分の利益ばかりを追求し、民を救うどころか支配者同士で互いの足を引っ張り合う。

より一層の財を求め、自分よりも財を持つ者を陥れようと。より高い地位を得ようと、自分よりも高い地位の者を亡き者にせんと。

当然見向きもされぬ被支配者たちは、ますます貧困に喘ぐことになる。

だが、そんな朽ち果てるのを待つばかりのカノルドスに、一筋の光が射し込んだ。

腐り果てた支配者たちを打倒しようと、一人の少年が立ち上がる。

その少年は幾つかの心ある辺境の小貴族の協力を得て、『カノルドス解放軍』を立ち上げた。

しかも、その少年は自身が遠く王の血を引くと主張し、自身こそが王位に相応しいと告げて。

その王の証こそが、その少年が身に宿す異能であった。

異能。

それはまさに通常では考えられぬような異常を引き起こす力。

異能には様々な種類がある。手を触れずに物を動かす物、他者の心を読む者、動物や植物と心を通じ合わせる者など。

かつては、異能を持つことこそが王の証とされた時代があった。

これはカノルドスの建国王が異能者であったからだとされ、事実カノルドス王家には多くの異能者が生まれた。

元々異能者は千人に一人、万人に一人とも言われるほど、異能を持つ者は極めて少ない。
そんな異能を持つことこそ、王として選ばれる条件とされていたのだ。
だが長い年月の中で、王の血筋に異能が現われることが徐々に減っていった。
事実ここ数代の王の中で、異能を宿した者は一人もいない。
だが少年は、そんな異能を実に二つも宿していた。
一つは如何なる敵をもなぎ倒す『雷』の異能。
もう一つは味方のどんな傷でも癒す『治癒』の異能。
とりわけ『雷』の異能は、長いカノルドス王国の歴史の中でも、王族にしか現れたことがないとされ、まさに王の証ともいうべき異能であった。
この『雷』の異能こそが自身が王たる証であるとして、少年は腐り果てた支配者たちへと戦いを挑んだ。
これが後の世に『解放戦争』と呼ばれる戦いの始まりであった。

『解放戦争』は一年に渡り続き、少年はその戦いに勝利する。
『カノルドス解放軍』は少数ながらも高い士気と練度を誇り、数の上では圧倒的に不利でありながら、王国軍に一歩も劣らず戦い続けた。
これはもちろん少年が持つ異能のなせる業。そしてそれだけではなく、少年は人々を惹き付ける何かを持っていた。
数多くの優秀な人材が少年の元に集まり、寡兵ながら『カノルドス解放軍』は戦った。
もちろん時に敗走もしたが、『カノルドス解放軍』は最後まで戦い続けた。
更に加えて、類が友を呼んだのか、それとも天の采配か。少年の元には少年以外にも異能者が集ったのだ。

優秀な人材、複数の異能者、そしてなにより民衆の支持。
数では勝りながらも、腐れ爛れ切った王国軍が『カノルドス解放軍』に敵うはずがなく、一年という僅かな月日で少年は玉座へと辿り付いた。
共に戦った『カノルドス解放軍』の仲間たちを国の中枢に据え、少年は新生カノルドス王国の誕生を宣言した。
沸き返る民衆は口々に少年の名を口にし、新しい王国と新しい国王の誕生を祝った。
ユイシーク・アーザミルド・カノルドス1世。それが新しい国王の名前であった。
この時少年は僅か16歳。実に年若い国王の誕生であった。

新王国と新国王の誕生から2年。
とある辺境の小貴族の少女が巻き込まれた事件から、この物語は始まる。

序章（後書き）

序章は『魔獣使い』と共用の仕様。最後の一文だけ違います。

０１ 一辺境令嬢の縁談（前書き）

こちらもここから本格始動。

『魔獣使い』同様、よろしくお願いします。

０１ー辺境令嬢の縁談

「すまない……」

と告げると、壮年の男性が力なく項垂れた。

「そんな……お父様が謝るような事ではありません」

対して、壮年の男性の前に腰を下ろした黒髪の少女は、毅然とした態度でそう告げた。

「向こうの要求通り、私はアルマン子爵に嫁ぎます。元々アマロー家は弟のシガルが継ぐ予定でしたから、後継ぎの心配はありません」

「ミフィ……」

きっぱりと言い切った愛娘に、アマロー男爵は再び申し訳なさそうに視線をそらす。

「すまない。まだ１６歳のお前に迷惑をかける……だが、これも領民のためだ」

再び頭を下げた父に、ミフィシーリアは苦笑を浮かべる。

「安心してくださいお父様。アルマン子爵家は我がアマロー家と違って裕福な家です。きっとなに不自由ない暮らしができるでしょう」

そう言ってミフィシーリアは微笑んだ。

アマロー男爵家は、貴族ではあるものの貧しい家柄だった。
領地は大陸の北端に位置するカノルドス王国の中でも最北端。最も雪深い地方に存在した。
そこに住む領民も少なく、領地には村が一つ存在する限り。その村の人口も百人に満たない小さな村だ。
そして特に目立った特産品もなく、稀少な鉱物が採れるわけでもなく。
近くにある大きめの町の、羽振りの良い商人の方がよほど裕福であるという、極めつけの貧乏貴族だった。
更に加えて今年は凶作。村で栽培している麦は例年の半分ちょっとという大凶作であった。
このままでは、アマロー男爵家はともかく領地内の村は冬を越せない。そう考えた男爵は、隣接する領地を持つアルマン子爵に援助を申し込んだ。具体的には子爵領に蓄えられた食糧を、相場よりも格安譲ってもらおうとしたのだ。
アルマン子爵領とて豊作とは言い難い収穫だったが、それでも男爵領よりはましだし、何より子爵領は男爵領よりも遥かに広く、農業以外にも産業がある。国に納める税の分を差し引いても十分な余裕があるらしかった。
それにどうやら、税収以外にも何らかの方法で金を得ているらしい。
というのも、アルマン子爵はアマロー男爵同様、先に起きた『解放戦争』では旧王国、解放軍どちらにも組せず中立の立場にあった。
彼ら以外にも中立の立場を取った貴族はいたが、そんな貴族たちは新王国の体制の中で、要職からは当然ことごとく外された。
だからアルマン子爵もアマロー男爵も、役職による給金はなく税収だけが収入の全てのはずである。
それなのに、アルマン子爵の羽振りの良さはアマロディク男爵の耳にもよく入ってくる。
だから子爵は何らかの事業に手を出していて、それが上手くいっ

ているのだろうと男爵は考えていた。
だからこそ、アマロー男爵はアルマン子爵に援助を申し込んだのだ。
その申し出に対し、子爵は援助する代わりに一つの交換条件を出した。
それはアマロー家の長女であるミフィシーリアを、子爵の妻にしたいという申し出だった。
アルマン子爵は既に４０歳を越えている。対してミフィシーリアは１６歳。年齢的に離れているが、貴族社会では珍しいわけでもない。
アマロー男爵は、アルマン男爵の奥方が数年前に病死したと聞いていた。
だが、子爵は女癖が悪いことでも有名であり、それはカノルドス王国の貴族なら誰もが知っているほどであった。
現在も数人の愛人がいるらしく、中には領民の中から租税代わりに無理矢理妾にした女性もいるという噂もある。
アマロー男爵にとって、ミフィシーリアは自慢の娘であった。
同世代の娘たちに比べてやや小柄であるものの、決して痩せ過ぎているわけではない。
一見では控え目な印象の大人しそうな少女だが、雪のような白い肌とそれを際立たせる腰まで長く伸ばされた黒髪。
その黒髪と同じ色の瞳は黒曜石のように輝いていて、十分美しいと表現できる容姿を持っている。子爵に望まれるのも納得できる娘であった。
貴族の家に生まれながらも、決して贅沢を求めるわけでもなく、貧しい生活に文句の一つも言ったことはない。
誰にでも優しく接する性格は、領民からも人気があり慕われている。
できることなら男爵とてこんな話は断りたかった。
だが、断わるわけにはいかない。領民を守ることは領主の務め。

その思いが男爵に我が子を差し出す決心をさせた。

「三日後にアルマン子爵本人が当家を訪れる事になっている。まずは顔見せの挨拶のためだが、できればそのまま子爵領へお前を連れて行きたいとの要望だ」

「はい。三日後ですね。それまでに準備をしておきます」

娘の返事を確認すると、男爵は決して娘の顔を見ようとしないまま、静かにその部屋を後にした。

「三日後に結婚……ですか……」

ミフィシーリアはぽつりと呟きながら一人外に出て屋敷を見上げた。

屋敷といっても領民たちの家よりは少し大きいといっただけで、屋敷と呼ぶにはおこがましいほどのものであったが、それでもミフィシーリアにとっては生まれ育った家である。当然愛着だってある。その家を三日後には後にしなければならないなんて。

確かに急に決まった話とはいえ、いくらなんでも急過ぎやしないだろうか。ミフィシーリアは小さく溜め息を吐く。

屋敷を一通り見つめた後、ミフィシーリアは黙って村へと続く道を歩く。

しばらく歩けば、領地内唯一の村が見えてくる。

そのまま村に入るミフィシーリア。そんな彼女を見かけた領民たちが、親しげに声をかけてくる。

「おや、お嬢様。何か買物かい？」

「いえ、買物ではなく、ちょっとした散歩です」

「なんだ、そうかい。あ、そうだ。お嬢様に知らせなきゃいけない

事があったんだよ」

なんだろう？　と軽く首を傾げるミフィシーリアに、畑仕事の合間に声をかけてきた中年の女性が、声を小さくして彼女に告げる。

「あのね、今日、村の中で見慣れない連中を見かけたんだよ」

「見慣れない連中？」

「ああそうさ。あたしが見かけたのは得体の知れない三人組……男が二人と女が一人。三人とも武具を身につけていたんだ。まあ、単なる旅の傭兵か魔獣狩り（ハンター）もしれないけれど、一応領主様にも伝えておいてくれないかい？」

女性の頼みを笑顔で引き受けて、ミフィシーリアはその場を後にする。

だが、本当は先程の女性の言葉がミフィシーリアの心のどこかに引っかかっていた。

旅の傭兵か魔獣狩り？　それはまず有り得ない。

近隣の森や山地には少数ながら魔獣が棲息しており、その魔獣が村に姿を見せる事がある。

そんな時は領主であるミフィシーリアの父が、傭兵や魔獣狩りを雇って駆除を行う。

だが、父から最近魔獣狩りや傭兵を雇ったという話は聞いていない。

その他に傭兵や魔獣狩りが村を訪れるとすれば、それは行商人の護衛としてだろう。

その行商人にしても、普通は領地内で商いを行うための商業税を支払うため一度は領主の館を訪れるはず。

だけど、そんな行商人も最近は訪れていない。

では、その三人はなんのためにこの村に？　それがミフィシーリアの疑問だった。

先程の女性の話では、その三人はこの村にある唯一の宿屋兼酒場である「紅雀の巣箱」亭に泊まっているらしい。
いつしかミフィシーリアの足は、自分でも自覚しないまま「紅雀の巣箱」亭へと向かっていた。

「うわぁぁぁぁんっ！！」
「あん、もうっ！！　泣かないでよっ！！」
「だって……だって……うわぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！！」
「にゃあああああっ！！　さっきより泣き声が大きくなってるっ！？」
「だ、だって……い、い、痛いんだもんっ！！」
「痛いっていったって、転んで膝小僧を擦りむいただけでしょっ！？」

場所は「紅雀の巣箱」亭のすぐ前の道端。
地面に座り込み、膝から血を流して泣きわめく五、六歳の幼女。
そしてその傍らで、腕を腰にあてたまま仁王立ちでその幼女を見下ろす一人の少女。
その少女は自分と同じぐらいの年頃で、魔獣の革製と思しき防具を身体の各所に身につけ、腰には小振りな鋼製の剣を装備しいた。
陽光の元でまるで透き通るように輝く長い銀の髪。その髪が動き易さを重視したのか所謂ツインテールに纏められて、彼女の頭の左右できらきらと揺れている。
そしてその瞳の色は、銀の髪に負けない黄金の煌めき。
瞳に宿る輝き同様、全身から躍動感が溢れ、この少女が活発な性格であることは、誰の眼から見ても明らかだろう。
そして情況を察するに、幼女が転んで怪我をして泣いているようだ。
ミフィシーリアはその幼女に見覚えがあった。いや、この村に住

んでいる住民は全員顔見知りなのだが。
確か「紅雀の巣箱」亭の主人夫婦の娘で名前はリーネ。今年で六歳になるはずだ。
だが、その傍らの少女は見覚えがない。
とりあえず、今はその見知らぬ少女よりも、泣いているリーネの方だ。
そう思ってミフィシーリアがハンカチを取り出しつつ、彼女たちの方へと一歩足を踏み出した時。目の前に展開された光景にミフィシーリアは我が目を疑った。

「……もうっ！　仕方ないわねっ！」

乱暴に言い方捨てる少女。だが、その微笑みは慈愛に溢れ。
そして少女は、出血しているリーアの傷口へとその掌をかざした。
傷口近くにかざされた少女の掌。その掌が翡翠色に淡く輝いたかと思うと、リーアの傷口がみるみるうちに小さくなり、ついには傷そのものが消滅してしまった。

「……治癒の……異能……？」

呆然と呟くミフィシーリア。そんな彼女に気づかずに、異能を用いて傷を癒した少女は、いまだに地面に座り込んだまま、ぼけっと自分の膝小僧を見つめているリーアに優しく諭す。

「いい？　この事は誰にも言っちゃだめよ？　あんたとコトリだけの秘密だからね？」

ぱちんと器用に片目を瞑った少女。その少女が振り向き――ミフィシーリアと目が合う。
途端、少女の口元がひくひくと引きつり、顔色が見るまに青く変

わる。

「にゃあああああああっ！！　み、見られたっ！？　まっずぅぅぅぅいっ！！　こんな事がバレたらパパにお仕置きされるぅぅぅぅぅっ！！」

真っ青になって喚く少女は、ばばばばっとミフィシーリアに駆け寄ると、がしっと彼女の両肩を掴んだ。

「きゃっ！？」

「あ、あんたっ！！　い、いいいいい今の見てたっ！？」

「今のって……治癒の異能のことですか？」

「にゃあああああっ！！　やっぱり見られてるぅぅぅぅぅっ！！」

頭を抱えて喚きながら、その場にうずくまる少女。

えっと……一体どういう情況なのでしょう？

ミフィシーリアも怒濤の如く流れる情況に置いてきぼりにされ、きょとんとするばかり。

そしてようやく立ち上がったリーアがミフィシーリアに気づいて、彼女の方へと駆け寄ろうとした時。

その場に若い男性の声二種類が響いた。

「コトリぃ、何外で喚いてんだよ？」

「そんなに大声で喚いたら、近所迷惑ですよ？」

その声は「紅雀の巣箱」亭の中から。

そして「紅雀の巣箱」亭の玄関のドアが開けられ、そこから二人の男性が姿を見せた。

一人は重厚な魔獣の素材を用いた防具と、やはり魔獣素材の両手用の大剣を身につけた金髪に碧眼の男性。

もう一人は武具といえば腰に差した長剣ぐらいで、あとは有りふれた旅人の旅装姿の薄茶の髪に青い眼の男性。

どちらもミフィシーリアより少し年上、多く見積もっても二十歳を幾つも超えていないだろう。

彼女に見覚えのない二人組。いや、いまだにうずくまって喚いている少女を加えれば三人組か。

（この人たちが……）

目の前にいる見知らぬ三人組。彼らこそが村に現れた得体の知れぬ三人組に違いないと、ミフィシーリアは悟った。

０１ 辺境令嬢の縁談（後書き）

こちらも『魔獣使い』同様のんびりと更新していく予定。

今後ともよろしくお願いします。

02 ― 三人の旅人たち

「そうですか。ここのご領主のお嬢様でしたか」

例の三人組の一人、長剣を下げたどこか冷めた印象の薄茶の髪の男性が答えた。

「はい。当地の領主、アマロー男爵の長女で、ミフィシーリアと申します」

そう名乗ったミフィシーリアに、これはこれはご丁寧に、と先程の男が改めて頭を下げた。

あれから呆然としたままのミフィシーリアの前で、三人は言い争いを始めた。

もっとも言い争いといっても、「治癒」の異能を使った少女が喚くのを、残る二人が苦笑しながらなだめていただけなのだが。

その後三人は、ぼーっと見つめたままだったミフィシーリアにようやく気づき、自分たちのことを説明すると言って場所を「紅雀の巣箱」亭の中へと移した。

そして客のいない酒場のテーブルに一つを占め、互いのことを説明し始めたのだ。

「私は市井で学者を営んでおります、ケイルと申します。この二人は今回の旅のために雇った護衛でして」

そう言ってケイルと名乗った男が、彼の両隣に腰を下ろしている二人に視線を向けた。

その視線に促され、二人はそれぞれ自分の名を名乗る。

「俺は、ジェイクってんだ。ま、見てのとおり魔獣狩り(ハンター)だな。ちなみに、こいつとは幼馴染の腐れ縁だ。よろしくな、貴族のお姫様」

と、先程大剣を持っていたジェイクという名の金髪の男は、にへらっと笑って隣のケイルを親指で指す。

指されたケイルが小声で「余計な事は言うな」と言ったのが、ミフィシーリアの耳に届いた。

「……コトリ……」

対してもう一人。先程「治癒」の異能を使ってみせた少女は、ケイルの影に隠れるようにしながら小さく告げた。

「コトリ……？」

「ええ、この娘(こ)の名前はコトリです。それがどうかしましたか？」

「あ、いえ、珍しい響きの名前だなと思いまして……」

「そうですね。何でも古い言葉から取ったと、彼女の保護者は言っていましたね」

そう答えたのはケイル。そのケイルは口調こそ軽いものの、その視線はじっとミフィシーリアに注がれて離れない。

「それともこの娘の名前がもっと別の……皆が知るような名前だとでも思ったのですかな？」

「えっ！？　い、いえ、そのような事は……」

図星だった。

それこそまさにミフィシーリアがずっと考えていた事なのだった。

ミフィシーリアと同じ年頃で「治癒」の異能の使い手といえば、誰でも思い浮かべる名前が二つある。

一つはユイシーク・アーザミルド・カノルドス。

「雷」と「治癒」の二つの異能をその身に合わせ持つ、この国の若き国王。

そしてもう一つがアーシア・ミセナル。

現ミセナル公爵――「解放戦争」前は男爵――の一人娘にして、現国王の従兄妹にあたる姫君。

そして目下、将来の王妃候補第一位と噂される女性である。

彼女はユイシークが「解放戦争」に立ち上がった際、従兄妹であるユイシークに協力する形で「カノルドス解放軍」に参加。

直接戦場には立つ事はなかったが、その身に宿した従兄妹と同じ「治癒」の異能は、数多くの「カノルドス解放軍」の兵士の命を救ったという。

また、誰にでも分け隔てなく接する優しい性格から、いつしか「癒し姫」の異名で呼ばれるようになった女性である。

事実、現王国の騎士や兵士の中には、「我が忠誠は王でも国でもなく、「癒し姫」にある」と公言して憚らない者もいるとか。

ミフィシーリアもコトリと名乗った少女の異能を目撃した時、真っ先に思い浮かんだのが彼女の名前であった。

もしかして目の前の少女はアーシア姫では、と考えたミフィシーリア。いや、彼女に限らず、誰もがそう考えるだろう。

しかし、よくよく考えてみれば。

今頃王都にいるはずのアーシア姫が、このような何もない辺境にいるはずがないではないか。

その考えがミフィシーリアの頭を過った時、彼女がこの「紅雀の巣箱」亭を訪れた目的を遅まきながら思い出した。

「と、ところで――」

「なんでしょう、ミフィシーリア様？」

「先程市井の学者様だと仰しゃられておりましたが、何用でこんな何もない辺境に？」
「ああ、その事ですか。実を申しますと、この村にはただ立ち寄っただけなんですよ」
「そうなんですか？」
「ええ。私の本当の目的地は別の場所なんです。ここは単なる通り道でした。あれ？　ひょっとして、入領税とか通行税が必要でしたか？　それなら直ちにお支払い致します」
「いえ、その必要はありません。商人の方が領地内で商いをされる場合は商業税が必要ですが、ただの旅人の方から税金はいただいておりません」
「そうですか。それを聞いて安心致しました」

そう言って笑顔を浮かべるケイル。そして彼は更に続けた。

「ご心配なさらずとも、領地内で問題は起こしません。もちろん、この二人にも厳重に言い含めてあります」
「いえ、そのような心配は……」
「いえいえ、領内に見知らぬ人間が現れれば、領主として警戒するのは当たり前です。当然の態度ですよ」
「申し訳ありません……」

お気になさらず、と応じるケイル。そのケイルの横で、ふと思い出したようにジェイクがミフィシーリアに告げた。

「なあ、お姫様。一つ頼みがあるんだけどな」
「なんでしょうか」
「さっき見た、コトリの異能の事だよ」
「……コトリさんの異能……」
「そう。コトリの異能はそんなに強くない。だからこいつが「治癒」

を持つことは内密にして欲しいんだ」

と、ジェイクは座ったままミフィシーリアに頭を下げた。

「治癒」の異能。その価値は計り知れない。

怪我や病気を癒す「治癒」の力は、誰もが縋りつく対象となる。

誰もが怪我や病気を我が身に負った時、それを癒したいと願う。

それが重大なものならば特に。

そしてそんな怪我や病をたちどころに癒す異能。それが「治癒」である。

どんな医師や薬師にも見放された病人。戦争や事故で身体の一部を失った者。そんな彼らが最後に頼るのが「治癒」の異能を持つ者である。

だが「治癒」の異能を持つ者の数は少ない。

そもそも異能を持つ者が少ないのだ。そのなかから「治癒」限定となれば当然その数は更に少なくなる。

そしてこれが最も誤解されがちな事実なのだが、「治癒」の異能といえども万能ではない。

「治癒」に限らず異能の力には個人差がある。力の強い「治癒」なら癒せる疾病も、力の弱い「治癒」なら癒せない事がある。そしてそれを理解している者は以外に少ない。

医者や薬師に見放された病人。そんな病人が最後に縋り付いた「治癒」の異能者。だが、そんな「治癒」の異能者でも癒せるとは限らない。

そしてその事実を突き付けられた者。一度は見出した希望を奪われた者。そのような時、行き場を失った感情は容易に逆恨みに変貌する。

そんな理由から、「治癒」の異能を持つ者――数は極めて少ないが――はそれを公にするのを避ける傾向がある。その異能が弱けれ

ば特に。
　そのような話をジェイクから告げられたミフィシーリアは、彼の頼みを快く引き受けた。

「恩にきるよ、お姫様」
「あ、あの……」
「ん？　なんだいお姫様？」
「その「お姫様」というのはやめていただけませんか？　アマロー家は貴族とはいっても名ばかりの貧乏貴族です。私は「お姫様」と呼ばれるような身分ではありません」

　きっぱりとそう告げたミフィシーリアに、最初は驚いたような表情を浮かべるジェイク。その隣りに座る残る二人もまた、彼と同じような表情を浮かべていた。
　やがてジェイクの表情が変わる。驚愕から興味へ。彼の表情は確かにそう変化した。

「了解したよ、お嬢さん。これならいいかい？」
「ええ、それでお願いします。ところで、みなさんはいつまでこの村に？」
「そうですねえ。ここまでちょっと急ぎ足で旅してきたもので……暫く逗留してゆっくりしようと思っていたのですが……構いませんか？」
「それはもちろん構いませんが……ここ、本当に何もありませんよ？」
「それがいいのですよ。私のように普段から忙しく働いている者にとって、何もせずのんびりするというのは一番の娯楽なのです」

　ケイルのその言葉に、ミフィシーリアも違いないと同意してくすりと笑った。

「どう見る？」
「どう見るって……あのお嬢さんの事か？」

ミフィシーリアが「紅雀の巣箱」亭から去った後、取った部屋に引き上げたケイルは、部屋の扉を閉めたのを確認するとジェイクにそう問い質す。

その視線と言葉は、先程までミフィシーリアと会話していた時のような柔らかさがまるでなく、冷たく鋭い。

「正直驚いたな。あそこまではっきりと「自分はお姫様と呼ばれるような身分ではありません」と言い切る貴族の令嬢は初めて見た」
「同感だ。これまで見てきた貴族どもは、多かれ少なかれこちらを見下したところがあったからな」
「まあ、俺たちは平民だったし？　貴族にしてみれば当然じゃねえの？」
「確かにそうだ。だが……」
「ああ。あのお嬢さんみたいな貴族がもっとたくさんいたら、あいつや俺たちが苦労する事もなかったんだろうな」
「同感だな。ところでコトリはどこへ行った？」
「ん？　なんかあのお嬢さんの事、追いかけて行ったみたいだぜ？」
「なに？　あの人見知りの激しいコトリがか？」
「どうやら、あのお嬢さんの事が気になるのは俺たちだけじゃないようだ」

ジェイクは窓辺に歩み寄ると、そこから見えるこの村の領主の館に、何とも楽しそうな視線を向けた。

追けられている。
「紅雀の巣箱」亭からの帰り道、ミフィシーリアは自分が追けられている事に気づいた。

（一体誰が……）

敢えて振り返る事はせず、意識して前だけ見て歩く。気づいている事を悟られないように。
いくらアマロー家が貧乏貴族とはいえ、貴族であることには変わりない。
貴族の令嬢である自分を、野盗か盗賊の類が狙う可能性は否定しきれない。

（ですが、最近では野盗や盗賊の類はすっかり出なくなった筈……）

王国の支配者が変わる前、世間には野盗、山賊、盗賊などが蔓延っていた。
当時の支配者であった王侯貴族たちは、自分たちの事しか頭になく、自分たちに害が及ばない限り、盗賊たちのことなど完全に放置していたかのだから。
それが新王国になり、新しい国王の勅命により徹底的に盗賊狩りが行われた。その結果、盗賊たちは殆どその姿を見なくなった。
だが、盗賊たちがこの世から完全に消えるはずもなく。どこかに隠れ潜んでいた連中が、たまたまアマロー男爵領の界隈にいたのかもしれない。
いくら辺鄙な辺境とはいえ、いや、辺境だからこそ若い娘の独り歩きは危険である。
こんなことなら誰かに同行を願えば良かった、とミフィシーリアは胸中で後悔する。
アマロー家がいくら貧乏貴族とはいえ、使用人が一人もいないと

いうわけではなく、数人の使用人を雇っている。

（今度からは、シリアかメリアに一緒に来てもらいましょうか……）

シリアとは古くからアマロー家に仕える使用人で、ミフィシーリアの乳母も務めた中年の女性である。そしてメリアはそのシリアの娘であり、ミフィシーリアとは同い年で当の姉妹のように仲が良い。ちなみに、彼女たちの父親もアマロー家の使用人として働いている。

そんな事を考えているうちに、アマロー家の屋敷が見えてくる。ここまで来ればもう大丈夫、とミフィシーリアがこっそり安堵の溜め息を吐いた時。不意に背後の気配が動いた。

「うみゃっ！！」

「えっ！？」

悲鳴のような少女の声。あまりに想定外の背後の動きに、思わずミフィシーリアが振り返ったその先に。

先程「紅雀の巣箱」亭で出会った、あの魔獣狩りの少女の姿があった。

なぜか顔面から地面にダイブしたような、地面に突っ伏した姿であったが。

０２ 三人の旅人たち（後書き）

チェックが済んだので投稿。

投稿初日にしてＰＶが１３００以上、ユニークが約３００という快挙。どうなってんの？　と思わず我が目を疑ったり。

プロローグと第一話しか投稿してないのに、ですよ。ホント、びっくりしました。

で、調子に乗って急いで次話を投稿した次第です（笑）。

あ、全くの余談ですが、コトリのアクセントは日本語の小鳥のようにコ『ト』りではなく、『コ』トリです。

では、今後もよろしくお願いします。

０３ー魔獣狩りの少女（前書き）

な、なんかアクセス数が凄い事になってる……

考えられないようなアクセス数に、焦った気分になって急いで執筆。ただ、この執筆ペースがいつまで続くかは判りません。

０３ー魔獣狩りの少女

じっと見つめる視線の先、地面には突っ伏したまま動かない銀髪ツインテールの少女。

しばらくして少女は地面から顔を上げた。その少女の視線と、ぽかんと少女を見つめていたミフィシーリアの視線が再び重なる。

「――――うみっ！！」

何やら奇妙な声と共に、がばっと起き上がった少女は、そのまま後ろを振り返って脱兎の如く駆け出す。

「あ、待って下さい！」

「みゃっ！？」

思わず呼び止めるミフィシーリア。そんな彼女の言葉に反応して、魔獣狩り（ハンター）の少女は急停止をかけた。

ミフィシーリアの方へ振り返り、不思議そうにこくんと首を傾げる少女。

どこか小動物じみたその仕草に、思わず微笑みを浮かべながらミフィシーリアは少女へと歩み寄った。

「怪我してますよ……おでこのところ」

「え、本当っ！？」

両手を額に当てる少女。ミフィシーリアに言われてようやく傷みを覚えたのか、じわじわとその金の瞳に涙が浮かぶ。

「はい、どうぞ。えっと――コトリ……さん……でしたね？」

そう言ってミフィシーリアが少女――コトリに差し出したのはハンカチ。
コトリはそのハンカチとミフィシーリアを何度も交互に見比べ、おずおずとハンカチに手を伸ばす。

「あ……ありがと」
「いいえ、たいした事はしていません」
「でも……」
「はい？」
「コトリ、「治癒」の異能が使えるもん。これは要らない」

と、コトリはハンカチをミフィシーリアへと返そうとする。

「確かに傷は自分で癒せるかもしれません……でも、こちらには必要だと思いますよ？」

ミフィシーリアは改めて、ハンカチをそっとコトリの瞳の下に優しく押し当てて涙を拭う。
しばらくミフィシーリアにされるがままだったコトリは、自分が何をされているのかようやく理解し、顔を真っ赤に染めてばばっとミフィシーリアから離れる。

「どうかしましたか？」
「だって……パパやママ、アーシィたち以外にコトリにこんな事する人なんていないもの……」

おろおろとするコトリに、改めて微笑みかけるミフィシーリア。
彼女には、目のまでおろおろするコトリが、なぜか幼い子供のように見えた。

だからだろうか。深く考えもせず次の言葉が滑り出たのは。

「コトリさんさえ良かったら、わたしの家でお茶でも飲んでいきませんか？」

と、傍らに見える自分の屋敷を指差しながら。

「お帰りなさい、お嬢様……あら、お客様ですか？」

コトリを連れたミフィシーリアが屋敷に入ると、屋敷を掃除していたメリアがその手を止めて出迎えた。

そしてコトリはメリアの姿を目にした途端、さっとミフィシーリアの背中に隠れてしまう。

「どうしたんですか？　コトリさん」

「……にゃぁ……」

ミフィシーリアの背後から顔だけ出して、恐る恐るメリアの方を見るコトリ。そんなコトリの様子に、メリアの方が対処に困ってしまう。

「私の部屋に行きましょうか、コトリさん。メリア、二人分のお茶の用意をお願いします」

「はい。承知しました、お嬢様」

ミフィシーリアはコトリが人見知りが激しいのだろうと判断し、自分の部屋へ連れて行く事にする。

さして広くもないアマロー家の屋敷の事、ミフィシーリアの部屋にはすぐに到着した。

「ここなら誰も来ませんよ？」
「……本当？」

半信半疑のコトリの様子に、ミフィシーリアは笑みを浮かべて自室のドアを開ける。

「知らない人が怖いのですか？」
「……うん……」

部屋に入って、その中を珍しそうにきょろきょろと眺める答えるコトリ。
どうやら本当に人見知りが激しいようだ。
だが、ミフィシーリアには一つ疑問がある。

「それでは、どうして私の後を追けて来たのです？」

コトリからすれば、ミフィシーリアとて十分「知らない人」のはず。それなのに、なぜ彼女は自分の後を追けてきたのだろう。

「……んー、自分でもよく判らない……けど……」

部屋のソファに腰を下ろし、腕を組んで考え込むコトリ。
ミフィシーリアもコトリの対面のソファに座り、じっとコトリの言葉を待つ。

「なんか、あんた……えっと、ミフィシーリア……さん？　って、アーシィやサリィみたいな感じがして……その……どうしてだろ？」

自分で口にしながら、自分でもよく判っていない様子のコトリ。

「あ、思い出したっ！！」
「何を思い出したんですか？」
「うん！　パパが言っての！　コトリがこういう気持ちになった時、どうすればいいのかを！」

魔獣狩りというにはあまりにもらしくないコトリ。
外見年齢は自分と同じくらいだが、その精神年齢はもっとずっと幼い少女のような彼女。そのコトリの父親が彼女にどんな事を言ったのだろう。
と、改めて彼女の言葉を待つミフィシーリアに、コトリは思いもかけなかった一言を言い放った。

「コトリと友達になってください！」
「は……はい？」

ずいっとその華奢な右手をミフィシーリアに向かって伸ばすコトリ。その表情は至って真剣そのもの。

「あなたのお父様は、一体どのように仰しゃったのです？」
「えっとね？　もし、コトリがアーシィやサリィと一緒にいる時と同じような気持ちになった人がいたら、その人はきっといい人だから友達になっておけって。それがコトリにとってともて良い事だから……って、パパが言ったの」

どうやら自分はコトリに「いい人」認定を受けたらしい。
なぜそんな認定を受けたのかよく判らない。だが、ミフィシーリアも初めて会った時からどこか目が離せないこの少女の事が好きになりつつある自分に気づいていた。
だからミフィシーリアは、いまだに伸ばされたままのコトリの右

手をそっと包み込むように両手で握り締める。

「ええ。私で良ければ喜んで。私をあなたのお友達の一人に加えてくださいい」

そう言ってミフィシーリアが微笑むと、ことりは弾けたような笑顔を浮かべた。

「えっ！？　ミフィ結婚するのっ！？」

「ええ……」

友達になったんだから、わたしの事はコトリって呼んでね、という少女の願いに、ならば自分の事はミフィと呼んで欲しいとミフィシーリアは伝えた。

互いにそれらの事を了承し合い、いつの間にか自然とそう呼び合う二人。端から見れば、まるで長年の友人同士のような光景がそこにあった。

メリアが持って来てくれた紅茶を飲みつつ、互いの事を話し合った。そして三日後にミフィシーリアが、アルマン子爵家に嫁ぐ事に話は及んだ。

「おめでとう！　ミフィ！」

「あ……ありがとうございます……」

我が事のように嬉しそうなコトリと、気落ちしたような表情のミフィシーリア。いくらコトリが対人感情に疎いと言っても、これはさすがに気になった。

「どうしたの？　なんか、嬉しそうじゃないよ？」

「ええ……正直言って、戸惑っています」
「どうして？　ママはいつもパパと結婚したいって言っているよ？　アーシィやサリィだって、パパと結婚したいって言ってる。結婚するって嬉しい事じゃないの？」
「コトリのお母様がお父様と結婚したい……？」

ここでミフィシーリアは気づく。
おそらくコトリの母親はどこかの貴族か裕福な商人の愛人であり、コトリの母親以外にも複数の愛人が存在するのだろう。
なんて複雑な家庭環境。そんな環境の中で、コトリはよくもこんなに素直な少女に育ったものだ、とミフィシーリアは感心する。
そして同時に、彼女の複雑な家庭環境に関しては、いくら友人になったからといって、おいそれと言及するものじゃない、と心の中で決心した。

「なんせ、年の離れた、顔も合わせた事がない男性との結婚なので……」
「えっ！？　会った事もない人と結婚するのっ！？」
「ええ。まあ、貴族の間ではままある事です」

驚いて自分をじっと見つめるコトリに、ミフィシーリアは意識して笑顔を浮かべながら紅茶を口にする。

「ねえ……ミフィが結婚しちゃったら……もう……会えない……？」
「そうですね……アルマン子爵次第ですが、ひょっとしたら会えないかもしれません」
「そんなぁ……折角友達になったのに……」
「ごめんなさい。でも手紙なら大丈夫だと思います。コトリは普段どこに住んでいるのですか？」
「コトリの家は王都にあるの！　王都の真ん中！　とっても大きい

んだからっ！！」

ぴょんぴょんと銀のツインテールを揺らし、ややオーバーアクションで説明するコトリ。

彼女の父親はかなり裕福なのだろう。でなければ王都の中心部近くに大きな屋敷など持てる筈がない。

それにコトリの指先には荒れた様子がない。それはすなわち、普段から彼女が生活雑事に手を出していない事を現わしている。

常に使用人を雇い、生活の雑事全てを彼らに任せている。そうでなければ彼女のような綺麗な指先でいられる筈がない。

貴族ではありながら身のまわりの生活雑事を、全部ではないものの自分で行うミフィシーリアの指先より、コトリの指先はよほど綺麗だった。

きっとコトリは父親と一緒に暮らしているのだろう。

ひょっとすると、コトリは上級貴族の令嬢の可能性さえある。

上級貴族の令嬢。それもよほど父親に大切にされ、外界との交流も殆どないような状態で育った、言わば深窓の令嬢。

そう考えれば、彼女の外見と精神年齢の差の説明もつく。同時に、彼女が真っ直ぐで素直な性格なのも。

ケイルと名乗った男性は自分が学者であり、残る二人は護衛だと言っていた。

だが、本当は男性二人の方が彼女の護衛なのではないか。コトリの身分を誤魔化すため、敢えて彼女の方を護衛だという事にしているのではないだろうか。ミフィシーリアにはそう思えてならなかった。

なぜ貴族の令嬢がこんな田舎にいるのか判らない。だけど、コトリが王都の中心部に屋敷を構えるほどの家柄の令嬢だとするならば。

コトリと初めて出会った時の疑問が再びミフィシーリアの脳裏を掠めていく。

――即ち、やはり彼女が「癒し姫」アーシア・ミセナル姫ではないか、という疑問が。

０３ー魔獣狩りの少女（後書き）

前書きでも触れましたが、アクセス数が凄いです。
連載開始わずか二日で総合ＰＶが３０００を超え、総合ユニークが６００人を超えました。しかもお気に入り登録が６件も！
きっと有名な人のところでは、もっとアクセス数が伸びるのでしょうが、私のような無名の人間のところに、これだけの数の方々が来ていただけるのは快挙としかいいようがありません。
ありがとうございます。感謝いたします。今後もよろしくお願いします。

しかし、皆さんどこからこの『辺境令嬢』にやってくるんだろう？　誰か教えてください。いや、ホント。

０４ー婚約者

「奴が動いた？」
「ああ。奴の屋敷を張らせていた部下から早馬が届いた。一行は奴本人と数人の使用人、そして護衛の子飼いの兵たちが十数人といったところだ。昨日の昼前に領地の屋敷を出発したらしい」

とある一室。その部屋の中にいた男は、先程来客を告げられて部屋を出て行き、すぐに戻って来たもう一人の男からそう聞かされた。

「奴が出発する前日、数人の別の子飼いの連中が屋敷を出たらしい。途中まで尾行したところ、東に伸びている街道を使って領地を出たそうだ」
「なるほど。奴の領地から東って事は……目的地は間違いなくここだな」

この村に逗留して今日で二日目。それとなく村を見て回ったが、実にのんびりとした平和な村だった。
領民の数こそ少ないものの、大人たちは笑顔で畑を耕し、子供たちは元気に遊び回る活気のある良い村。それが男のこの村に対する感想だ。

「確かにここなら獲物にも事欠かないだろうしな。ん？　待てよ？　って事は今、奴の屋敷は手薄って事か？」
「ああ。既に踏み込むように指示済みだ。一応見つかった場合の偽装工作で、盗賊を装って踏み込むように指示を出しているが、その心配はあるまい」
「これではっきりとした証拠が出れば、あとはこっちで奴を取り押さえるのみ、か」

「そうすれば、私たちの役目も終わりだ」
「全く、どうして俺たちがこんな田舎まで出しゃばらなきゃならないんだ？　あいつも人使いが荒いったらないぜ」
「そう言うな。俺たちが動かなければ、あいつが直接動きかねん。さすがに今のあいつにそんな事はさせられんよ」
「確かにな」
「それに私にとっては、いい骨休みも兼ねていたしな」

そう言ってその男は苦笑を零す。普段から上役にこき使われ馬車馬のように働かされている彼にとって、役目とはいえここでのんびりと過ごした数日はまさに貴重な休暇であった。

「王都に帰ったら、またあの日々が始まるのか……」

普段の仕事を思い出したのか、男はげんなりとした表情を浮かべる。

「仕方ねえだろ？　あいつの尻馬に乗っちまったのは俺たちだぜ？」
「判っているし、後悔もしていない。しかし、こうまで忙しくなるとは思わなかったのも事実だ」
「ま、奴がこっちに到着するのは明日だ。残り少ないのんびりできる時間をそれまで満喫しておくんだな」
「言われるまでもない……と、言いたいところだが、そうはいかないようだ」

男は視線を不意に壁際へと向けた。
それが何を意味するのか、もう一人の男にも判っている。向けた視線の先、即ち隣の部屋から伝わってくる幾つかの気配。
それは数人の人間が、隣の部屋に入って来た事を意味していた。

コトリという少女と出会った日が一昨日。つまり今日で三日目。
つまりはミフィシーリアがこの村を去る当日。
先触れによるとアルマン子爵がアマロー男爵領に到着するのは午後過ぎらしい。
そんな残り僅かな時間を、ミフィシーリアは自室でコトリと共に過ごしていた。
あれ以来、コトリは毎日ミフィシーリアを尋ねて屋敷に遊びに来る。
アルマン子爵の元へと嫁ぐ準備の傍ら、どうしても気分が沈みがちになるミフィシーリアにとって、コトリの存在は清涼剤のようなものだった。
婚姻の儀式そのものはまだまだ先の事なので、ウェディングドレスなどの準備は必要なく、今回は身のまわりの物だけを持って行くつもりのミフィシーリア。
身のまわりの物といっても、そもそもあまり私物の多くないミフィシーリアの事、その準備は一日も必要ない程だった。
そして、ミフィシーリアがアルマン子爵家へ嫁ぐ際、彼女付きの侍女としてメリアの同行も決っていた。
姉妹のようなメリアが同行してくれると知った時、ミフィシーリアは大きな安堵感に包まれ、メリアに縋り付いて何度も礼を言うほどだった。

「今日……行っちゃうんだよね……」
「ええ……短い間でしたけど、コトリと一緒にいると楽しかったです」
「うん！　コトリもミフィと一緒だととっても楽しい！」

そう言ってにっこりと笑うコトリ。
一時はコトリがアーシア・ミセナル姫ではないか、と疑いを持っ

たミフィシーリアだったが、今ではその可能性はないだろうと思っている。

父であるグゥドン・アマロー男爵に聞いたところによると、アーシア姫の容姿は栗色の髪に黒い瞳。銀髪金瞳のコトリとはまるで違う容姿をしているらしい。

なお、アーシア姫の栗色の髪と黒い瞳は、従兄妹であるユイシーク・アーザミルド・カノルドス1世国王陛下と同じ色合いで、二人並んで立つと兄妹のようによく似ているという追加情報まで父は教えてくれた。

余談であるが、ミフィシーリアが父であるグゥドンにコトリを紹介した際、なぜかコトリは頭部のツインテールを押さえて震え出した。

どうしたのかとミフィシーリアが尋ねると、「グドンはツインテールの天敵なのっ！　頭からばりばりと食べられちゃうのよぉっ！」とコトリは震えながら答えた。

誰にそんな事を聞いたのかと疑問に思えば、どうやら彼女の父親からしい。

どうしてコトリの父親がそんな意味不明の事をを彼女に教え込んだのかは知らないが、以来、コトリは絶対にグゥドンの前に出ようとはしなかった。

そうこうしているうちに午後も近くなり、コトリは絶対にまた会おうねっ、と何度も言いながらアマロー家の屋敷を後にした。

残されたミフィシーリは、改めて残された時間で父や母、そしてたった一人の二歳年下の弟に別れを告げた。

この期に至って、行くなと言い出す弟や最後まで謝り通しの父、そして静かに泣くばかりの母を、逆にミフィシーリアが宥めていると。とうとうその時ややって来た。

アマロー家の数少ない使用人であるシリアが、アルマン子爵一行の到着を告げたのだ。

アグール・アルマン子爵。
初めて対面する自分の夫となる人物。
その人物に対するミフィシーリアの感想は、あまり良いものではなかった。いや、はっきり言って悪かった。
同年代の女性と比して小柄なミフィシーリア。そのミフィシーリアよりも低い身長。だが、体重は彼女の二倍以上は軽くあるだろう。
頭髪は本来は金髪なのだろうが、額の後退が激しく頭髪の色よりも広くなった額のてかりの方が目立つ。
顔だちはといえば、べちゃりと潰れた鼻がとても印象的。もちろん悪い方向で。
汗と油でてかりきった顔の中で、ミフィシーリアをじろじろと見つめる好色そうな眼は、顔中のてかりよりも更にぎらぎらと輝いている。
はっきり言って良いものではない。ぶっちゃけ、気持ち悪い。
目の前の人物を端的かつ的確に現わすとしたら「上等の衣服で着飾った豚」。これ以外にあるまい。
こんな中年男が自分の夫になるのかと思うと、いやもっと正確に言えば、この男に自分の純潔を捧げるのかと思うと、ミフィシーリアは身体が震えそうになる。
それを鉄の意志で何とか押え込み、ミフィシーリアは努めて表情を変えないようにしてアルマン子爵と対面する。
だけど。
――アルマン子爵って豚人族（イベリコ）だったんですか？　そんな話は聞いていません！
もし許されるのなら、きっとミフィシーリアはそう叫んでいただろう。

獣人族と呼ばれる者たちがいる。
文字通り直立歩行する獣といった外観の種族で、様々な亜種が存在する。
代表的なところでは犬人族（コボルト）、猫人族（カラカル）、豚人族（イベリコ）、兎人族（イヤロップ）など。
どの亜種も身長は人間の大人の腰ほど。全ての獣人族に共通する特徴として、力は人間よりも弱いが手先が器用で臆病な性格などがあげられる。
中には例外的に傭兵や魔獣狩り（ハンター）の従者として、戦場に立つ剛の者もいるようだ。
彼らは彼らだけの集落を築く事もあるが、殆どは人間の街や村で暮らしている。
人間の営む商店や食堂などで下働きをする事が多いが、中には自身で商店や宿屋を営む者もいる。
貴族などの上流社会の間では忌避される傾向なものの、一般市民の間では人間と同格の存在として扱われる。
ちなみに、獣人族は全て男女で外観が変わらない。なので人間からすれば一目で獣人族の男女の見分けはまず不可能である。
つまり、『獣耳』や『獣尻尾』を持った少女や女性というものは存在しないのである。
そんな獣人族の一種である豚人族。その豚人族にアルマン子爵はそりゃあもう、そっくりだったのだ。

父であるアマロー男爵とアルマン子爵との会話で、子爵が人間である事に間違いないと知ったミフィシーリアは、こっそりと安堵の溜め息を洩らした。
いくら人間と同格に扱われている獣人族とはいえ、爵位を賜った獣人族がいるという話はさすがに聞いた事がない。

冷静に考えてみればアルマン子爵が豚人族なわけがないのだが、思わずミフィシーリアが慌てるほど、子爵は豚人族にそっくりだったのだ。

「おまえがミフィシーリアだな」

子爵と対面しているのはアマロー家の居間。

ミフィシーリアの両隣には父と母が腰を下ろし、その対面のソファにアルマン子爵が座っている。

そしてアマロー男爵との会話が一区切りついたところで、アルマン子爵はじろりとミフィシーリアへと視線を向けた。

子爵はじろじろとミフィシーリアを検分するかのように見つめると、彼女が何かを口にするよりも更に言葉を続けた。

「随分と地味な格好だな。それでは村娘と変わらんではないか。せっかくこの儂に対面するというのに、どうしてもっと着飾らないのだ？　ん？」

確かに今のミフィシーリアは、いや、普段からミフィシーリアは上等は衣服など身につけない。

彼女も貴族の令嬢である以上、それなりの格好をしていてもおかしくはない。アマロー家がいくら貧乏貴族だからといっても、娘にドレスの一着や二着作ってやるぐらいの事はできる。

だが、ミフィシーリアは普段から村娘たちと同じような衣服を好んだ。

彼女は元々華美なものを嫌う性格であったし、なにより、彼女は自分も村人の一人として扱われる事を臨んだのだ。

領主の令嬢という特別な存在ではなく、一緒に苦楽を共にして生活する村人の一人。

そんな思いから、ミフィシーリアは普段から着飾るという事をし

ない。

それでも今日はミフィシーリアにとって特別な日。

好むと好まざるとに関らず、夫のなる人との初対面なのだ。彼女なりに自分が持つ衣服の中で一番上等なものを着ていた。

それでも、アルマン子爵にはそうとは見えなかったようだ。

「今後、そのようなみすぼらしい格好をする事は許さん。おまえは儂の妻になるのだからな。安心せい。我が領地に帰ったら、すぐに針子どもを手配してドレスを数着作らせてやろう。

そう言うと子爵はにやりと笑った。

きっと本人は懐が大きい事を示したつもりなのだろうが、聞いている方からすればあまり気持ちのいいものではない。

そんな気持ちをぐっと抑えつつ、アマロー男爵はアルマン子爵に尋ねる。

「それで約束した食糧の買い込みの件ですが……」

「それなら安心せい。相場の八割で譲ってやるわ」

「し、子爵！それでは話が違うではありませんか！　最初の約束では相場の半額という話だった筈！　八割では冬を越すだけの食糧を買い込めない！　半額で食糧を買い込んでも冬を越せるかどうかぎりぎりなのですぞ！」

当初の約束とは違う事を言い出すアルマン子爵に、思わず立ち上がったアマロー男爵が詰め寄る。

だがそんな男爵の様子を面白そうに眺めつつ、子爵は更に続けた。

「そんな事は儂の知った事ではないし、それが嫌ならこの話はなかった事にするだけだしな。まあ……」

子爵は再び好色そうな視線を男爵の隣に座るミフィシーリアへと向けた。

「儂も鬼ではない。条件によっては半額で売ってやる」

「ほ、本当ですかっ!?　そ、それでその条件とは……」

子爵のただでさえ細い眼が、さらにいやらしく、そして禍々しく細く歪められてミフィシーリアを見つめる。

「ミフィシーリア。おまえがこの場で裸になって平伏し、儂の奴隷となる事を誓うならば、食糧を半額で売ってやろう」

「――――っ!!」

「そ、そんな事――――っ!!」

ミフィシーリアは声にならない悲鳴を上げる。隣の男爵夫妻も二の句が継げない。

今この場にいるのはミフィシーリアと彼女の両親、そしてアルマン子爵だけではない。子爵の使用人や護衛の兵たちが数人、ソファに座る子爵の背後に控えているのだ。

そんな者たちがいる前で裸になるなど、たとえ貴族の令嬢でなくとも若い娘には耐えがたい屈辱である。

それに加えて、本来なら正妻として迎える筈が、奴隷として子爵のものになれという。

当然アマロー家側に飲める条件ではない。

だが。

だが、ミフィシーリアは決意する。

この場で自分が恥辱にまみれようとも、そうすれば家族を始め領民たちを救う事ができるのなら。

「それは本当でございますね？　アルマン子爵様」
「おう。おまえが儂の奴隷となると誓えば、食糧は相場の半額で譲ってやる」

ミフィシーリは静かにその場で立ち上がった。
子爵の出した条件を飲むため。領民を守る領主の娘としての義務を果たすため。
その決意は両親にも、そして、いまだににやにやと笑いを浮かべる子爵にも届いた。

「さあ、早く裸になれ。もちろん、身につけているものは全部脱ぐんだぞ？　そして跪いて頭を床に擦り付け、儂の奴隷になると誓え」

アルマン子爵どころか、背後に控える使用人たちまでが無遠慮ににやにやとした好色な笑みを浮かべる中、ミフィシーリアは身に纏っている服のボタンに震えながらも手をかける。
今彼女が身につけているのは、飾り気の少ない前開きのワンピース。
そのワンピースを留めるボタンを解放さえすれば、それは重力に引かれて床に落ち、下着に包まれた彼女の肢体を容易く晒してしまうだろう。
振るえる手先で一つ、また一つとボタンを外すミフィシーリア。
そんな彼女の両横で、父は無言で俯き、母は涙を隠すことなくむせび泣く。
そして全てのボタンが外され、ミフィシーリアがワンピースを床に落とそうとした時だった。

それがミフィシーリアたちがいる、アマロー家の居間に飛び込んで来たのは。

０４ー婚約者（後書き）

なんとか今日も更新できました。

とりあえず、序章ともいうべき「アマロー男爵領編」もあと数話で区切りとなる予定。その後は本編ともいえる「王都編」へと移行します。

ところで、そろそろ更新速度が遅くなりそうです……。

05 ― 露呈

「た、大変なのよぉっ！！」

アマロー家の居間に飛び込んで来たもの。
それは銀のツインテールを振り乱したコトリだった。
そして飛び込んで来たコトリは、今まさにワンピースを床に落とそうとしているミフィシーリアを見て、きょとんとした表情を浮かべる。

「何してるの、ミフィ？　あ、もしかして着替えてる途中だった？」

自分でそう言いながら、着替えるにしては変だなとコトリは思う。
コトリは周囲の者たちから、人前で、特に男性の前で服を脱いではいけないと教わった。
コトリの外見と同じくらいの年頃の娘たちにとって、それは常識であるらしい。
だからコトリも着替える時は、男性――父親を除く――のいない所で一人で着替えるか、侍女に手伝ってもらいながら着替えるように心がけている。
だが、ここにはミフィシーリアの父親を始め、見慣れない男性がたくさんいた。そんな場所でミフィシーリアが服を着替えるのは不自然ではないだろうか。
そう思ったコトリは、改めて周囲を見回しある事に気づいた。

「あれ？　どうしてここに豚人族（イベリコ）がいるの？　ひょっとしてミフィの家の新しい使用人？」

そう言ってコトリがご丁寧に指まで差したのは、いうまでもなく

アルマン子爵である。
そして指差されたアルマン子爵は、ミフィシーリアを辱めるという歪んだ楽しみの最中に飛び込んで来た、庶民らしき銀髪の少女に侮辱された事で顔を真っ赤に染めた。

「ぶ、ぶぶぶ無礼な娘めっ！！　儂が誰だか判っておらんのかっ！？」
「そんな事言ったって、コトリ、豚人族に知り合いなんていないよ？」
「誰が豚人族だっ！！　儂はれっきとした人間だっ！！　貴族だっ！！　無礼者っ！！」
「えっ！？　嘘っ！！」

あんぐりと口を開けて驚くコトリ。
彼女のその態度に、アルマン子爵は少女が貴族に対して無礼を働いた事を後悔していると判断し、改めて突然飛び込んで来た銀髪の少女を観察する。

「ほう……庶民にしては中々の上玉だな。銀の髪も珍しい。よし、いいだろう。庶民が貴族に対して、先程のような無礼な態度を取れば本来なら死罪だが、儂は心が広い。特別に許してやろう。ただし、アマローの小娘同様素っ裸になって謝罪し、儂の奴隷となるなら、だがな」

再びにやりと好色な笑いを浮かべるアルマン子爵。予想外の獲物に、込み上げてくる笑いが押さえ切れない、といった様子だ。

「ほれ、二人ともさっさと裸になれ」

子爵の言葉に、背後の使用人や兵たちが笑い声を上げる。中には

ミフィシーリアたちに下品な言葉をかけたり、口笛を吹いてからかう者までいる。
コトリはアルマン子爵の言っている事の意味が判っていないのか、きょとんとして子爵を見つめるばかり。
そしてミフィシーリアは、ボタンの外れたワンピースの前を合わせるようにかき抱きながら、どうしたものかと必死に考える。
自分が奴隷に落ちるのはいい。既に決心した事だ。だが、コトリまでも奴隷に落とすわけにはいかない。
必死に考えるミフィシーリアをよそに、コトリはまじまじと子爵を見て再び口を開いた。

「あのねぇ、豚人族のおじさん！　貴族ごっこもいい加減にしてよね！　コトリ、これでも忙しいんだからっ！！　それに貴族じゃない人が貴族を名乗るのはそれこそ死罪だって聞いたから、貴族ごっこはあまりしない方がいいと思うよ？」

あくまでもアルマン子爵を豚人族扱いするコトリ。
どうやら先ほど彼女が「嘘」と言ったのは、貴族に無礼な態度を取って驚いたのではなく、豚人族が人間だと言い張った事に驚いたようだった。
居合わせた者は当の子爵を含め、そんな天然なコトリにあっけに取られて口もきけない。
そんな中、コトリはばたばたとミフィシーリアに近づくと、改めて彼女に向き直った。

「あのね、ミフィ！　コトリ聞いちゃったの！　ミフィが結婚するって言ってた、アルマンって貴族なんだけど、そいつ奴隷の密売をしているんだって！　だからそんな奴のところにお嫁に行かない方がいいよ！　ううん、絶対お嫁になんか行っちゃだめよぉっ！！」

このコトリの爆弾発言に、再びその場に静けさが訪れる。そして、そんな静寂を破ったのは、驚きに目を見開いたアマロー男爵だった。

「し、子爵……あ、あなたは本当に奴隷の密売を……？　そ、それでは娘を奴隷にしようとしたのも、売ることが目的で……？」

わなわなと振るえる男爵。その顔色は最初こそ青かったがやがて怒りのために真っ赤に染まる。

「ふざけるなっ！！　いくら領民のためとはいえ、可愛い我が子を奴隷になどできるかっ！！　今回の話はこちらから断らせてもらうっ！！　そして子爵！　この件は国に報告させてもらうぞ！」

「し、知らぬっ！！　奴隷の密売など儂は知らぬっ！！　男爵よ、貴公はそんなどこの馬の骨か知れぬ小娘の言う事を信じるのかっ！？」

「この娘は娘の友人だ！　ならばその言葉を疑う理由は私にはない！　そもそも、そのような事は陛下に直々に調べていただけばはっきりする事だ！　申し開きは私ではなく陛下にしたまえっ！！」

激昂にかられ、テーブルに自らの拳を打ち付けるアマロー男爵。そしてその音を合図とするかの如く、この場に更に一人の男が現れた。

魔獣の革製の武具を纏ったその男。特に目を引くのは背後に背負われた巨大な大剣。

「陛下に調べてもらう必要はねぇよ。今し方、子爵（そいつ）の領地の屋敷の地下牢から、数人の奴隷が見つかったって知らせが来たぜ？　その奴隷はどいつも所持印を持たない奴隷だってよ」

奴隷には、その身に所有者の名前を刻む事が義務付けられている。

所有者の名前は所持印と呼ばれ、入れ墨で身体に直接刻み込む場合もあれば、首輪に名前を刻んだだけの場合もある。
普通は奴隷を転売する事も考え、首輪に名前を刻むのが主流だ。
そして誤解しやすいが、奴隷の売買は国の許可を得ているれっきとした商売である。
所持印を持たない奴隷とは、奴隷商人が所有する『商品』としての奴隷であり、奴隷商人以外が所持印を持たない奴隷を有するのは明確な犯罪であり処罰の対象となる。
もちろん、国から許可を得ていない者が奴隷を売る事も同様である。
この場に突然現れた男――ジェイクは、にやりと笑うと器用に片目を閉じつつミフィシーリアに告げた。

「というわけだ、お嬢さん。もうこれ以上こいつの言う事に耳を貸す必要はないぜ？　だからさっさと身繕いを整えな」

言われたミフィシーリアは、未だに自分が服の前をはだけた状態でいる事に気づき、慌ててボタンを嵌める。

「ジェイク！」
「あのなぁ、コトリ。あいつにももっと落ちついて行動しろって言われているだろ？　いくらこのお嬢さんが心配でも、いきなり飛び出して行くんじゃねぇよ。ま、今回に限っちゃ、それがいい方向に出たようだがな」

ジェイクは居間の中央にいるミフィシーリアとコトリに、つかつかと無造作に歩いて近づく。
その際、彼の背負う大剣が、子爵一行に無言の圧力となってのしかかる。

「な……何者だ、貴様っ！！」

わなわなと震えながら、アルマン子爵は突然乱入し、己の秘密を曝露した男を憎悪に燃える眼でねめつけて叫ぶ。

「き、貴様……どうやって奴隷の密売を嗅ぎつけたのかは知らんが……儂の秘密を知られた以上、生きて帰れるとは思うな！」

いくら大きな剣を携えているとはいえ、相手はたった一人。こちらは護衛の兵――その実はならず者と大差ないが――が五人いる。更に、使用人として連れて来た者も、多少の荒事に耐えられる者ばかりだ。

人数的には多勢に無勢。この場で男爵一家や使用人を含めた全員の息の根を止めてしまえば、己の悪事が露呈することもない。

短絡的にそう思い至ったアルマン子爵は、背後に控える者たちへ視線を向ける。

「使用人を含め男は殺しても構わん。だが、男爵の女房を含め、女はできるだけ傷付けるなよ？　奴隷として売りさばく時の値が下がるからな。まあ、後で味見ぐらいさせてやる。儂の後で良ければだがな？」

子爵の言葉に嬉しそうな声を上げながら、配下たちは腰に帯びていた剣を抜き放つ。

煌めく複数の刃。それを見たアマロー男爵は、娘と妻を背後に庇いながら数歩後ずさる。

そんな男爵の前に進み出たのはジェイク――とコトリだった。

「心配すんなよ、アマロー男爵。この程度の人数に遅れを取る俺じゃねぇさ」

背負った大剣の柄に手をかける事もせず、自然体で立つジェイク。
そしてコトリも腰に手をあて無意味に胸を張って言い放つ。

「そう、ジェイクの言う通り！　心配ないからね、ミフィ」
「コトリ！　危険です！　下がってくださいっ！！」
「大丈夫！　コトリは強いのよぉっ！！」

そのコトリの台詞が合図だった。子爵の兵たちが一斉に男爵一家の前に立つジェイクとコトリに襲いかかる。
その内訳はジェイクに三人、コトリに二人。
狭い室内ではジェイクの持つ大剣を振り回すのは難しい。そしてコトリは武器さえ帯びていない、どう見てもただの小娘。だがしかし、外見から単純に二人を判断した兵たちは、直後に後悔することになる。
同時に襲いかかる三人の兵たちを一瞥し、ジェイクはするりと背の大剣を抜いた。
そう。何事もなく抜いたのだ。
彼の持つ大剣は、切先から柄先までの長さが彼の身長ほどもある。そんな巨大な大剣を背から抜けば、そんなに高くないアマロー家の居間の天井にどう考えても引っかかるはず。
だが、彼の手には抜剣された大剣がある。
まるで背中から直接手の中に瞬間移動したかのような光景に、兵たちの勢いが僅かに緩む。
そしてその僅かな緩みをジェイクは見逃さない。
三度迸る銀光。
それだけでジェイクに詰め寄った兵士三人が、その場にばたりと昏倒した。

「一応、殺しはしねぇよ。男爵の家ン中をおめぇらの血で汚すわけ

にもいかねぇんでな」

ジェイクは自身の言葉通り、大剣の腹の部分で兵士の頭部を殴打したのだ。

尤も、ミフィシーリアを始め男爵夫妻やアルマン子爵にも、彼が剣を振るった光景は見えなかったのだが。

ジェイクが構える剣の位置が違う。彼らが気づいたのはそれだけであり、その一瞬で三人の兵士が無力化されて倒れ伏したのだ。

それだけではない。今彼らがアマロー家の居間には、僅かながら調度品が置かれている。

その置かれている調度品たちには、髪の毛ほどの傷もつけられていない。

あの巨大な大剣を眼にも止まらない速さで三度も振り、なおかつ、周囲の調度品に全く傷も付けない。

それがどれだけ難しい事であるか、剣に関して素人のミフィシーリアにも判る。

つまり、目の前にいるどこか飄々としたジェイクという男が、途轍もない程の剣の達人だという事にミフィシーリアは改めて思い至った。

そして同時に、居間の中にばちりという音が響く。

思わずジェイクをぽかんと見つめていたミフィシーリアだが、その音で頭が再起動をしたのかコトリの事を思い出した。

コトリは大丈夫なのかと彼女の方へ視線を移せば、そこにはジェイク以上にとんでもない光景が展開された。

コトリは兵が繰り出した剣戟をするりと躱す。その動きは猫科の動物のようにしなやかそのもの。

そして兵の剣を躱したコトリは素早くその懐に飛び込むと、その華奢な手を伸ばし兵の腹部に軽く当てる。

ばちり、と再び響く音。

コトリの手と兵士の腹部の間で青白い光が発せられ、それだけで

兵が崩れ落ちるように倒れた。
この時になって、既に兵士の一人が彼女の足元で倒れている事に、ミフィシーリアはようやく気づく。
「……い……『雷（いかずち）』の……異能……？」
そう呟いたのは誰だったか。
『雷』の異能。それを持つ者は唯一人。
カノルドス王国の国王、ユイシーク・アーザミルド・カノルドス1世。彼の人だけがこの世で唯一人、『雷』の異能が使える筈。
では、今目の前で『雷』の異能を使ったコトリは一体何者なのか？
混乱するミフィシーリアの耳に、どこかのんびりとしたジェイクの声が響く。
「さあ、観念しな子爵。こんな連中が何人いようが、俺たちの相手にゃならねぇぜ？」
軽い口調とは裏腹に、鋭いジェイクの視線がアルマン子爵を射貫く。
それだけで子爵の背後に控えていた数人の使用人が、ばたばたと居間から飛び出して行く。
逃げ出した配下に振り返る事すらせず、その場で腰を抜かしたように座り込むアルマン子爵は、今度は畏れで振るえる指先を、ゆらゆらとジェイクに向ける。
「き、貴様は……貴様たちは一体何者だ……」
そしてジェイクは。
「俺の正体か？　知ったらきっと後悔すると思うがよ？　それでも

知りたい？　じゃあいいぜ、教えてやろう」

と、にやりと悪戯小僧のような笑みを浮かべると、とんでもない事を口にした。

「俺の名はジェイク・キルガス。今ンところ、カノルドス王国近衛隊隊長ってぇ肩書きを背負ってるモンだ」

０５ 一露呈（後書き）

アマロー男爵領編もあと二話で終わりそうです。

その後は舞台を王都へと移します。

それはそうと、最近お気に入り登録してくださった方が２５名を超えました。

ありがとうございます。アクセス数の方も順調に伸びています。

今後もがんばりますので、見捨てないでお付き合いください。

よろしくお願いします。

06 ― 宰相補

「カノルドス王国宰相補を務めさせていただいております、ケイル・クーゼルガンです。以後、お見知りおきを」

そう言って優雅に頭を下げたのは、「紅雀の巣箱」亭にいた三人の内の一人、薄茶の髪に青い眼の青年、ケイルだった。

場所はアマロー男爵邸の居間。あのアルマン子爵との一件があった場所。時間はあれから三日が経過していた。

今この場に居合わせているのは、ケイルとアマロー男爵、そしてミフィシーリア。

ジェイクとコトリは、アルマン子爵一行を王都へと連行するため、昨日アマロー男爵領を立った。その際、コトリは何度もミフィシーリアへと振り返り、姿が見えなくなるまで手を振りっぱなしだった。

ちなみに、あの時ジェイクの殺気にアマロー邸を飛び出したアルマン子爵の使用人たちだが、彼らはアマロー邸の外で控えていたケイルに全員取り押さえられ、子爵と共に連行中である。

「こちらこそ、よしなに。クーゼルガン伯」

コトリとの別れを思い返していたミフィシーリアは、隣に座る父が立ち上がって頭を下げたのに気づき、慌てて自分も立ち上がって頭を下げる。

「ミフィシーリア嬢。市井の学者などと身分を偽って申し訳ありません」

「いいえ、気になさらないでください。クーゼルガン伯もお役めだったのでしょう？」

「そう言っていただけると助かります」

改めて腰を下ろしたケイルは、謝罪の言葉をミフィシーリアに述べると、アマロー男爵へと向き直る。

「国王陛下の命により、かねてからアルマン子爵の周囲を洗っておりました。子爵が国に収めていた税などの収入の記録と、子爵自身の金回りに明らかな食い違いが随分前から報告されていまして。内偵を進めていたのです」

「そうだったのですか。しかし、『国王陛下の両腕』とも言われるクーゼルガン伯とキルガス伯のお二人を動かすとは、陛下は余程アルマン子爵の動向に気を配われていたようですな」

ケイル・クーゼルガンとジェイク・キルガス。

二人は幼馴染であったユイシークが『カノルドス解放軍』を立ち上げた際、その初期から行動を共にしたという。

剣の腕に優れ、常にユイシークと共に戦場の最前線を駆け抜けたジェイク。

そして頭脳に秀で、様々な作戦を立案、成功させた軍師的な存在のケイル。

二人はユイシークと共に、常に『カノルドス解放軍』の先頭に立ち、『カノルドス解放軍』を勝利に導いてきた。

大剣を手に、群がる敵をなぎ倒しユイシークの傍を片時も離れずに戦場に有り続けた『大剣』のジェイク。

絶対的な窮地に陥った『カノルドス解放軍』を、まるで魔法でも使ったのかのように、その優れた頭脳で逆転勝利に導いた『魔術師』ケイル。

二人は『解放戦争』に勝利した後、伯爵に任ぜられ、近衛隊の隊長と宰相補という重職に就き、現在では『国王陛下の両腕』と呼ば

れるほどの存在になっていた。
　周囲は二人が将来的には政治と軍事の最高峰まで登りつめるだろうと目しており、新体制となった王国の中心部との繋がりを求める者たちから、色々な意味で注目されている。
　そして、今回の事件の一連の真相を領主であるアマロー男爵に説明するため、ケイルのみが一人残り、今男爵と会談中なのである。

「ですが、今回の件、男爵にも責はあります。不作による食糧の不足を、隣接する領主に軽々しく相談するのは些か問題です。直接王国に相談していただければ、税の一時的な軽減など、いくらでも対処できたのですから」

　隣接する領主が善良なら何の問題もないが、今回は相談した相手が悪かった。
　アマロー男爵としても、もう少しでアルマン子爵に騙され、愛娘を奴隷として奪われるところだったのだ。
　確かに子爵が何らかの形で儲けているとは思っていたが、まさか奴隷の密売に手を出しているとは思いもしなかった。
　今後誰かに何かを相談する際は、もう少し相手の事を調べてからにしようと心に刻むアマロー男爵である。

「全く、面目次第もありません。かくなる上は、如何様な処罰も受けましょう」
「いいえ、その心配は無用です。今回、アマロー男爵にもご迷惑をおかけした事ですし」
「迷惑……ですか？」

　迷惑と言われても心当たりのない男爵。はて、と首を傾げながら、隣に座る娘と視線を合わせる。

「……もしや……コトリが何か関係しているのですか？」

ミフィシーリアのその問いに、ケイルは穏やかに首を横に振る。

「実は、子爵がこのアマロー男爵領に入る一日前、子爵の息のかかった者がこの領内に入り込みまして」

「子爵の配下が？」

「彼らは予めこのアマロー男爵領に入り込み、商品となる奴隷を領民の中から数人誘拐するつもりのようでした」

「なんと……っ！？」

「そ、そんな……っ！！」

絶句する男爵親子に、ケイルはどこか微笑ましげな微笑を浮かべると更に続ける。

「その者たちは私とジェイクが取り押さえましたが……その際、連中が暴れたおかげで、「紅雀の巣箱」亭に少々被害が出まして。もちろん、その被害については国で補償しますので、男爵を通じて補償額の請求を願います。男爵の領地と領民にご迷惑をおかけして申し訳ありません」

「とんでもない。こちらこそ様々な配慮痛み入ります」

宰相補と父の政治的な会話を、ミフィシーリアは黙って聞いていた。

だが、彼女の胸中を占める事は、たった一つ。

もちろんそれは新たに友人となった彼女の事。

そんなミフィシーリアの心中を察したのか、ケイルが彼女へと視線を向けた。

「ミフィシーリア嬢。何か私に尋ねたい事がおありですね？」

直球でそう尋ねられたミフィシーリアは、覚悟を決めて目の前の宰相補に尋ねる。

「はい、クーゼルガン伯。無礼を承知で率直に伺います。コトリは……彼女は何者なのですか？」

「治癒」と「雷」の異能を持つ、どこか浮き世離れした銀髪の少女。

「治癒」と「雷」の異能を持つ者。それはカノルドス王国においてたった一人を指す。

国王ユイシーク・アーザミルド・カノルドス１世。

共に「治癒」と「雷」の異能を持つコトリと国王の間には、何らかの繋がりがあると考えるのが普通であろう。

力の籠った視線で、ケイルを見つめるミフィシーリア。対するケイルも冷ややかな視線でミフィシーリアを見つめ返す。

「それを聞いてどうしますか？」

「別にどうという事はありません。ただ、友人として気になっただけです」

「あなたがコトリを友人として思っているなら、直接彼女に聞けばよいのでは？」

そう聞き返されて言葉を失う。ケイルの言葉通り、確かにコトリを友人だと思うのなら、直接彼女に聞けばいいのだ。もっとも、その質問に彼女が正直に答えてくれるかは別問題だが。

心の中で様々な思いが浮かんでは消えるミフィシーリアを、ケイルはその冷たい視線でずっと見据える。

そしてミフィシーリアが続けて何かを言おうとするより早く、ケイルは冷めた表情のまま衝撃的な事実を彼女に告げた。

「率直に言いましょう。コトリは……彼女は人間ではありません」
「え……っ！？」
「コトリは作られた存在なのです」
「作られた……存在……？」

ケイルの言葉が理解できず、ただ繰り返すだけのミフィシーリア。
コトリが人間でないとは？　しかも作られた存在とは？　コトリは一体何だというのだろう。
ミフィシーリアが内心で混乱しているのを悟ったケイルだが、余計な事は何も言わず淡々と事実を告げる。

「彼女は、異能によって作られた存在……我々の仲間に、疑似的な生物を生み出す異能を持った者がいます。我々はその異能の事を「擬似生命」の異能、そしてコトリたち作られたものの事を「使（つかい）」と呼んでいます」
「彼女……たち？」
「ええ、異能によって作りだされたものはコトリ以外にもいるのです。もっとも、人の言葉を話し、あそこまで自由に振る舞うのは彼女だけですが」

異能によって作りだされた擬似生命体。それがコトリなのだとケイルは言う。

「本来なら彼女も他の「使」同様、人の言葉を理解する事はできても、自発的な行動を取ったりする事はないと思われていたのですが……どうやら「親」の異能が強過ぎて、その影響を受けたようでして」
「「親」の異能……それはまさか――？」
「はい。姫が考えている通り。コトリの「親」はユイシーク・アー

ザミルド・カノルドス1世陛下です。彼女は陛下の「使」なのですよ」

ユイシークの「使」であるコトリ。彼女はいわばユイシークの一部ともいえる存在であり、ユイシークとの間に存在する「絆」で繋がっていて感覚の共有さえできるのだという。

そのため、限定的ではあるが「親」であるユイシークの異能を使う事ができるのだ。

もっとも、「親」の異能を使える事が確認されているのはコトリのみであり、他の「使」たちは、例え「親」に異能があってもその力を使う事はできない。感覚の共有は稀に他の「使」でも確認されているが。

「コトリは作られた存在。そして彼女は陛下の一部でもある。敢えて悪い言葉を使うなら、彼女は陛下の所有物とも言える――この事実を知って、あなたはどうしますか？」

「え……？」

「コトリが人間ではない、と知った上で、ミフィシーリア嬢はそれでもコトリを友人だと仰しゃいますか？」

ケイルの視線が、冷たくミフィシーリアを貫く。

その視線に晒され、最初こそ混乱していたミフィシーリアの思考は、その視線の冷たさに徐々に落ちついていく。

そして。

そしてミフィシーリアの心の中で一つの事実ができあがる。

もっとも彼女にとって、それはもうとっくにできあがっていた事を、改めて確認しただけに過ぎないのだが。

だから、ミフィシーリアは告げる。

ケイルの冷たい視線に怖じ気づくこともなく、心の中にあった真実のみを。

「はい、クーゼルガン伯。例え何者だろうが、コトリは私の友人です。その事実だけは、たとえあなたであろうが陛下であろうが、覆す事はできません」

相手は自分よりも爵位が上の伯爵。しかも将来は国の内政を一手に引き受けるようになると噂される人物。しかも陛下の信頼も厚い片腕的な存在。

そんな人物に対し、一介の男爵令嬢でしかないミフィシーリアは一歩も怯む事なく、心の中にある、いや、コトリとの間に存在する二人の絆を信じて告げた。

そんなミフィシーリアを探るかのようにじっと見つめるケイル。事実、彼はミフィシーリアの言葉の真偽を探っていたのだろう。

どれぐらいの間、二人で見つめ合っていただろう。

やがてケイルの冷たい表情が、すっと温かいそれにとって変わった。

「どうやらあなたは、陛下の言葉を告げるに相応しい人物のようですね」

「は？　どういう意味でしょう？」

「陛下はコトリを通して、あなたのコトリへの接し方に興味を持たれました。そして本日、私がこの場に窺ったのは、先日の事件の報告の他にもう一つありました」

ミフィシーリアは、ケイルの話が急にわけの判らない事になって戸惑う事しかできない。対してアマロー男爵は、何となくケイルが何を言いたいのか察し、まさか、いやそんな、と自分に必死に言い聞かせる。

そしてついに、ケイルの口からミフィシーリアの運命を大きく変える一言が零れ落ちた。

「陛下は私に仰しゃられました。もしミフィシーリア嬢が、コトリが人ではないと知っても、躊躇なくコトリを友と呼べるのなら。その時はあなたを王都に連れて帰れ、と」

「……はい……？」

「つまりですね、ミフィシーリア嬢。陛下はあなたの後宮入りを望んでおられます。あなたは側妃として望まれているのです」

ケイルの言っている事を理解した瞬間、ミフィシーリアはそのあまりの驚愕の内容に、大きく目を見開き。

そしてその隣では父であるアマロー男爵が、あまりの事にくたりと気を失って倒れた。

０６ー宰相補（後書き）

とんでもない事になっています。

前回、お気に入り登録が２５を超えた、と言いました。しかし、あれからほんの数日でその倍の５０を超えてしまいました。アクセス数も総合ＰＶが１３０００を突破し、ユニークの方も２５００人を超えています。

これらは一重にここに訪れてくださる皆様のおかげと感謝する事しきりです。

ありがとうございます。これからもがんばります。

今後ともよろしくお願いします。

しかし、本当にどこからこれだけの人が来てくれるんだろう？

ここに来る切っ掛けとなった理由を誰か教えてください。

07 王宮よりの迎え

アマロー男爵領にある唯一の村。その日、その村中がざわざわと騒がしかった。

村の中央の通りを数騎の騎士に先導された立派な馬車が三台、ゆっくりと通り過ぎて行く。

そして馬車の後ろにも、数騎の騎士の姿が見える。

その馬車は全て黒塗りで、所々に細かい細工の入った、見るからに高級そうな馬車であった。

そしてその馬車の横にある扉の部分。そこには剣を抱えて祈りを捧げる少女の紋章。

村人たちはその紋章が誰のものかは判らなかったが、馬車の造りからかなり身分の高い家のものだろうと推測し合う。

剣を抱えて祈りを捧げる少女の紋章。その紋章を持つ家は、居間のカノルドス王国は特別な意味を持つ。

その紋章はアーザミルド家の紋章。

即ち。

この馬車の持ち主は、現カノルドス王国国王、ユイシーク・アーザミルド・カノルドス1世その人なのであった。

騎士と馬車の一行は、村を通り過ぎ、アマロー家の屋敷に到着した。

屋敷の門では、当主であるグゥドン・アマロー男爵を始め、彼の妻や二人の子供、そして僅かだが数人の使用人がその馬車一行を出迎えた。

やがて馬車一行が停止し、一番先頭の馬車の扉が開く。

中から現われたのは一人の男性。

しかし、その男性が何か言うより早く、彼の影から飛び出したも

のがあった。

「ミフィーっ！！」
「コトリっ！？」

馬車から飛び出したコトリは、実に嬉しそうにミフィシーリアに抱きついた。
そんなコトリとミフィシーリアを横目で見ながら、先程の男性は改めてグゥドンへと向き直った。

「お久しぶりです、アマロー男爵」
「こちらこそ、クーゼルガン伯。一ヶ月振りというところですかな」

先日のアルマン子爵――今では元、子爵だが――の事件から、既に一月が経っていた。
そしてこの一月。アマロー男爵家は実に大騒ぎだった。
元より、ミフィシーリアの結婚の準備は進められていた。
だが、その嫁ぎ先が一介の子爵から、側妃とはいえ国王へと変更になったのだ。当然、準備にかける度合が変わってくる。
結局、アマロー家はミフィシーリアの後宮入りを承諾した。
そもそも、辺境の貧乏貴族でしかないアマロー家に、国王からの正式な要請を断ることなどできるわけもなく。
ミフィシーリアもいきなりの後宮入りに不安が残るのも事実だが、国王の元ならコトリとも頻繁に会えるだろう。そう考えれば、アルマン子爵の元へ嫁ぐよりも気楽になれた。
何より、ミフィシーリアが後宮入りする事で、王国からアマロー男爵家には十分な援助が送られることになった。
それ加えて、アルマン元子爵の領地をアマロー男爵が統治する事にもなった。これは表向きアルマン元子爵の悪事を暴くのに、アマ

ロー男爵が協力した事への報償となっているが、実際にはミフィシーリアが後宮入りするための「ご祝儀」であるといえるだろう。
そしてその一ヶ月はあっという間に過ぎて、本日、国王の元へと向かうミフィシーリアを、ケイルが護衛を兼ねて迎えに来たのだ。
ちなみに、コトリが強引に動向を強請り、彼女に甘い国王がそれをあっさりと許したのは言うまでもない。

「これだけ……ですか？」

ミフィシーリアが王都へと持って行く予定の荷物を前に、ケイルは呆然とした表情で立ち尽くしていた。
ミフィシーリアが準備した荷物は、大きな鞄が二つ。たったそれだけだったのだ。
彼女の荷物がどれだけあるか判らなかったため、荷物を運ぶための馬車を二台も準備してきたのに、まさか大きめとはいえ鞄二つだけとは。
これには逆の意味でケイルは開いた口が塞がらなかった。
『解放戦争』に勝利しユイシークが王位を得ると、それまで中立だった貴族たちは、我先にと娘や一族の中でユイシークと年が近い者を側妃として差し出した。
もちろん、それら全てを側妃として受け入れたわけではないが、それでも何人かは側妃として後宮入りをした。
その際、彼女たちが準備した『嫁入道具』は、馬車数代分でも収まり切らないほど膨大なものだったのだ。
中にはそれだけでは飽き足らず、十人以上の侍女や召し使いを引き連れて後宮入りした者もいたほどである。
それを知っているケイルは、アマロー家の経済事情を考慮しつつ、馬車二台もあれば十分だと判断した。
それなのに実際に蓋を開けてみれば、用意されていたのは鞄二つ。

これではケイルでなくとも驚くというものだろう。

その後、ミフィシーリアは家族や使用人たちに別れを告げ、馬車に乗り込んだ。

そのミフィシーリアに後に、彼女の鞄を持ったメリアが続く。

今回のミフィシーリアの王都行きに、メリアはまたも同行を申し出てくれた。

「何言ってんですか、お嬢様。アルマン子爵の屋敷に行くのに比べれば、王都の方がよっぽど楽しみってもんですよ」

と、メリアは笑いながらミフィシーリアに告げた。

だが、メリアの心中は楽しみどころか真逆であった。

彼女たちが旅立つ前日、メリアは母であるシリアから何があってもミフィシーリアを守るように言われていたのだ。

「メリア。実の娘であるあなたに、こんな事を言うのは母親として失格かもしれないけど……最悪の場合、あなたは自分自身を楯にしてでもお嬢様を守りなさい」

「うん。判っているわ、お母さん。何があっても、お嬢様を守ってみせる」

自身の決心を母に告げるメリア。

母曰く、後宮とは女の戦場だとの事。

陰謀、謀略、抜け駆け、陥れなど何でもありの魔境。

国王の寵を得るためなら、周りの側妃を出し抜き、騙し、時には暗殺さえ有り得るまさに女の戦場。

そんな戦場の中で、ミフィシーリアにとって味方と呼べるのは、おそらくメリアただ一人だろう。

ただ、よくアマロー家に出入りしていたコトリという女の子は、どうやら国王の縁者らしいので、彼女がミフィシーリアの友人である以上、味方になってくれる人物も現われるかも知れない。

その辺りを見極め、何としてでもミフィシーリアを守る。

それがメリアの隠された決意だった。

「あ……あの、クーゼルガン伯爵様」

「何だ？」

「少々質問があるのですが、よろしいでしょうか？」

「言ってみろ」

現在、馬車の中でミフィシーリアを中心に、彼女の右側にコトリが、左側にメリアが馬車の進行方向に背を向けて座っている。人見知りの激しいコトリだが、何度かアマロー家出メリアと顔を合わせているうち、ある程度は打ち解けるようになっていた。

そして彼女たちの正面にはケイルが一人、腰を下ろしている。

そんなケイルにメリアが質問する。一応対応するケイルだが、その態度は何とも冷たくそっけないものだった。

平民の自分の方から伯爵であるケイルに質問したのだ。機嫌が悪くなっても仕方ないかな、とメリアは思いつつ質問を続けた。

「今の後宮には、側妃様は何人ほどいらっしゃるのですか？」

「四人だ」

「え？　四人しかいらっしゃらないんですか？」

「そうだが？」

それがどうかしたか、とでも言いたげな冷たいケイルの態度に、それ以上聞けなくてメリアは黙ってしまう。

そんなメリアの心境を読んだわけではないだろうが、ミフィシーリアの右に座っていたコトリが、もう少し詳しい説明をしてくれた。

「最初はもっといたんだけどね、出て行っちゃったのよぉ」
「出て行った？　どうして？」
「うん、あのね？　あなたたちはへーかにふさわしくない、とか言って、サリィが追い出しちゃったの」
「サリィ？」

そう言えば、以前にもその名前はコトリの口から聞いた事があるな、とミフィシーリアが思っていると、彼女の前に座るケイルが補足した。

「サリナ・クラークス様。カノルドス王国宰相……即ち、私の上役であるクラークス侯爵のご息女の事です」

クラークス侯爵家といえば、現在のカノルドス王国において『御三家』と呼ばれる大貴族の一つである。

『御三家』とは、『解放戦争』前はアマロー家と同様な辺境の下級貴族でありながら、『解放戦争』の初期からユイシークに協力した功績により、新体制となった現カノルドス王国の中心を担う事となったクラークス侯爵家、カークライト侯爵家、そしてミナセル公爵家のことを言う。

ミナセル公爵家は『解放戦争』中に当主を失い、家督を夫人が継いだ。その後、公爵夫人は公職を辞しているが、現王国の政治をクラークス家が、軍部をカークライト家が統括している。

そんな大貴族の令嬢であるサリナ・クラークスは、現在ミナセル公爵家の令嬢であり、『癒し姫』の異名を持つアーシア・ミセナルと並んで、王妃の最有力候補と言われている側妃でもある。

（なるほど……後宮に入ったら、お嬢様にも嫌がらせをしてくるかも。これは要注意だわ）

気に入らない側妃を追い出すほどだから、きっと気性の激しい人なのだろうと、メリアは推測し、心の中で第一仮想的に認定する。
そして、髪型は金髪の縦ロールに違いないと勝手に決め付けた。

「私からも質問しても構いませんか？　クーゼルガン伯」
「は、何なりと」

随分お嬢様と私とで態度が違わない？　と思ったメリアだが、もちろんそんな事を口にだしたりはしない。

「「紅雀の巣箱」亭であなたと初めてお会いした時に比べて、今のあなたは少々……その、冷たいというか印象が違うというか……」
「あの時はアルマンの奴隷密売の証拠を押さえるため、別人になりすましていましたから。初めて会う人物には違う印象を与えるため、多少の演技を加えておりました。こちらの方が私の地です」

特に表情を変える事なくそういうケイルに、メリアは冷血で嫌な奴だと感じた。
しかし、その印象はすぐにひっくり返る事になる。

「そう言えば、パパやジェイクが言っていたっけ。ケイルの奴はすぐに冷血ぶりたがったり、悪ぶりたがったりするけど、本当はお人好しなんだって」
「コ、コトリっ！？」

コトリの何気ない一言に、ケイルは真っ赤になりながら狼狽えた。
この人が狼狽えたところを初めて見るな、とミフィシーリがやや場違いな感想を抱いたり、へえ、そんなに冷たい人じゃないんだ、

とメリアが感心したりしている間も、コトリとケイルの遣り取りは続いていた。

「この前、アマロー男爵領に行った時も、遊んでいる子供たちに飴玉あげたりしてたよねぇ？」

「ど、どうしてそれを知っているっ！？」

「だってコトリ、ジェイクと一緒に隠れて見てたもん」

「ジェイク……っ！！　あ、あいつはコトリに何て事を教えやがるっ！？」

一気に印象が正反対のものへと取って代わったケイルと、楽しそうな声を上げるコトリを微笑ましげに眺めるミフィシーリアとメリア。

彼らを乗せた馬車は、護衛の騎士たちを引き連れてゆっくりと南へと向かう。

ごとごとと揺れる馬車の中から、何気なく外の景色に目を移したミフィシーリアは、視界の隅を何かが横切ったような気がした。

改めてそちらに視線を移せば、遥か彼方の空を何かが舞っていた。

かなり距離があるのに、はっきり見えるということは、その何かの大きさはかなりのものだろう。

空を飛ぶ魔獣の類でしょうか？　とミフィシーリアが眺めている間にも、その魔獣らしきものとは更に距離が開いていき、やがて見えなくなった。

取り敢えず襲って来る様子もなさそうので、ミフィシーリアは改めて王都へと思いを馳せさせる。

そこで出会うであろう人たち。特に自分が嫁ぐ相手でもある国王陛下。

噂では色々と聞き及んでいるものの、ミフィシーリアは国王と直接謁見した事はない。いや、今後も謁見することなどないと思っていた。

そんな自分がまさか側妃に選ばれるとは。
確かに不安は尽きない。だが、明るい材料もないわけではない。
コトリがいる。どこか幼さが抜けないこの少女といると、いつも楽しくなる。
メリアがいる。幼い頃ころから姉妹同然で育って来た彼女は、きっと自分を支えてくれる。
だから。
だからミフィシーリアは、王都へ行っても大丈夫だと自分に言い聞かせた。

０７ 王宮よりの迎え（後書き）

『辺境令嬢』更新。

先日、何気なく「小説家になろう」のランキングを見てみました。
するとジャンル別の日別ランキングと週間ランキングの１００位以内に、この『辺境令嬢』がランクインしているじゃないですか！
こいつはもう快挙ですよ、快挙。
もちろん、これらは全てここに訪れてくださる皆様のおかげです。
ありがとうございます。いくら感謝してもし足りません。

物語の方はこれにて「アマロー男爵領編」は終了し、次回より「王都編」へと突入します。
引き続きお付き合いいただければ幸いです。
今後ともよろしくお願いします。

０１－国王との謁見

赤く柔らかな絨毯が敷かれた広大な広間。
天井には豪華なシャンデリアが幾つもぶら下り、もしも今が夜だったらきっと星空のような煌めきを放っていただろう。
そしてミフィシーリアの背後には先程開かれたばかりの人の背丈の倍以上ある大扉。
そしてその扉から彼女の足元を通り過ぎ、赤い絨毯は真っ直ぐに階段状になった広間を一望できる場所へと続く。
そこには椅子が一つ。その椅子は決して華美ではないものの、品の良い装飾が施されている。
もちろん、その椅子は玉座だ。
この国で国王只一人が座る事を許された、正にこの国の頂点。
そして今、その玉座には一人の人物が腰を下ろしていた。
決してその人物を見上げないようにしながら――謁見の際に不躾に玉座の主を眺めるのは不敬になる――、ミフィシーリアは視線を伏せたままゆっくりと絨毯の上を進む。
そう。
今、ミフィシーリアは自分の夫となるべき国王と初の対面を果たすため、謁見の間にいるのだった。

カノルドス王国、王都ユイシーク。
人口は約三万人。カノルドス王国最大の都市である。
かつてはこの王都には別の名前があったのだが、新国王が即位した際、新王の偉業を称えて新王と同じ名前に改名された。
そんな王都までアマロー男爵領からは約二週間。それだけの時間をかけて、ミフィシーリアはようやく王都へと辿り着いた。
途中、宿場町などで宿を取ったりしたが、慣れない旅にミフィシ

ーリアとメリアはすっかり疲れ果てていた。
ようやく王都へと辿り着き、取り敢えず客間へと通されたミフィシーリア。メリアもその客間に附属している侍女の控え室に入り、その日は旅の垢と疲れをゆっくりと落とした。
その際に使用した客間にあった浴室を見て、そのあまりの広さと豪華さに思わず本当にこの浴室を使ってもいいのかと、こそこそ相談する主従の姿があったりしたが、まあ、それはご愛敬。
そして一夜明けて。
ついにミフィシーリアは国王と対面するため、謁見の間へと赴いた。
ただ、本日の謁見は非公式のもの。ミフィシーリアが側妃として紹介されるのは後日改めて行われるので、今日、謁見の間にいるのは国王と僅かな側近のみだと聞かされていた。
大勢の貴族たちの前での謁見ではないと知り、幾分緊張が和らいだミフィシーリア。
本日の謁見のために用意されたドレスに着替えたミフィシーリアは、謁見の間へと続く扉の前で自分の名前が呼ばれるのを待つ。
そうやって待っている間、今着ている上等なドレスに着替える際、あまり着慣れないドレスにメリア共々悪戦苦闘した事を思い出し、思わず小さな笑いを零す。
そんなミフィシーリアに、扉の両横で長柄武器を構えた近衛兵たちが不審そうな視線を向ける。
近衛兵たちの視線に気づき、改めて姿勢を正した時、厳かに彼女の名前が呼ばれた。
そして同時に扉が開く。
開かれた扉の向こうには赤い絨毯。そしてその絨毯は玉座へと続く。
その絨毯の上を、ミフィシーリアは視線を伏せながらゆっくりと進む。
先程ちらりと謁見の間の中が見えたが、どうやら玉座とその横に

誰かがいるようだった。
玉座にいるのはもちろん国王だろう。そしてその横に控えているのは、ちらりと見た限りでは年若い男性のように見えた。
ひょっとするとあれはケイルだろうか。そんな事を考えている内に、ミフィシーリアは玉座の元まで辿り着いた。
そこでミフィシーリアは改めて跪く。やがて上から面を上げよとの声がかかり、ミフィシーリアはゆっくりと視線を上げて行く。
玉座の横には侍従らしき制服を来た若い男性。ケイルでもジェイクでもなく初めて見る顔だ。
そして改めて玉座へと視線を移したミフィシーリアは、そこに座るものを見た。
見た。そりゃあもう、まじまじと。
それが不敬だと知りつつも、ミフィシーリアは玉座から視線を逸らす事ができなかった。

太短い手足は毛足の短い細かな柔毛に覆われ。
ぎょろりとしたまん丸な目は幾分離れ気味。
つんと突っ立った耳は左右非対称で。
でろんと吐き出されたピンクの長い舌が何ともラブリー。
その姿をまじまじと見つめたミフィシーリアは、長い長い沈黙の後ぽつりと零した。

「……ぬいぐるみ……？」

そう。
玉座にでんと腰を下ろしているもの。
それは熊のぬいぐるみだった。それも等身大の。
思わずぽかんとぬいぐるみを見上げるミフィシーリア。そんな彼女に、玉座の横に立っていた男から声が飛ぶ。

「何だ、その態度はっ！？　無礼であろう！」
「は……？　え……？」

無礼と言われても呆然とするしかないミフィシーリアに、その男は更に言葉を浴びせかけた。

「このべあーくん三世は、『解放戦争』中に何度も暗殺者の刃から陛下を身体を張って守った真の勇者である！　見ろ！　べあーくん三世の身体中にある名誉の負傷の数々を！」

言われて思わずそのぬいぐるみを見れば、確かに身体中に繕った跡があった。
男の言葉を信じるなら、それが暗殺者の刃による名誉の負傷とやらだろう。

「そんな真の勇者を前にして呆然とするとは！　何たる不敬！　何たる無礼！　その罪や許されじ！」

玉座の横の男は、どこか芝居がかった仕草で一人熱弁をふるう。

「これは最早死罪は確定。だが、べあーくん三世は心が広い。貴様がこの場で全裸になり、床に額を擦り付けて謝るのなら許すと仰しゃっておられる！　さあ！　べあーくん三世に感謝し、全裸になって許しを請うがよい！」

何か一ヶ月くらい前にも似たような事を言われたなぁ、と思わず現実逃避に走るミフィシーリア。
その間も、どこか人の悪そうな笑みを浮かべて、男はミフィシーリアに裸になれと迫る。

どうしたらいいのかミフィシーリアが迷っていると、謁見の間の奥、玉座の右手にあった小さな扉が突然開き、そこから一人の女性が現われた。

その扉は本来、王族が謁見の間に入る際に使用される扉だ。という事は、その女性は王族なのだろうか？

その女性が身に付けているものは、目の前で喚く男とよく似た侍従の制服らしきもの。もちろん、男が着ているものとは各所が違うから、女性用の制服か何かだろう。

ミフィシーリアより幾つか年上と思しきその女性は、緩やかに波打つ長い亜麻色の髪を揺らし、その実に整った顔に明らかな怒りを浮かべながら、大股に玉座横の男へと歩み寄る。

対して男はといえば、ずんずんという擬音が聞こえそうな勢いで近づいて来る女性に、明らかな怯えを見せて後ずさる。

「な　に　を　や　っ　て　い　る　の　か　し　ら　？」

一字一句短く区切って問い質す女性。その灰色の瞳には明らかな怒りと僅かな呆れ。

「な　に　を　や　っ　て　い　る　の　か　し　ら　？」

もう一度同じ質問をする女性に、男は凄まじい勢いでだらだらと汗を浮かべる。

「い、いや、あのな？　アマローの娘と謁見するって事だったから、ここは一つ少し驚かせようかなーと……あ、いや、だからな？　そんなに怒る事ないだろ、リィ？　こいつはきっと緊張しているだろう彼女を和ませようとした冗談さ。な？　おまえもそう思うよな？」

男は必死に眼だけでミフィシーリアに弁護を要求する。

この時、ミフィシーリアは改めてこの男の容姿を確認した。
年は自分より少し上か。だが二十歳はおそらく超えていまい。明るい茶色の髪はよく手が入れられており、漆黒の瞳はきらきらと輝いている。
もっとも、その輝きは悪戯小僧のものと同一のものであったが。
顔は整ってはいるが決して美形と呼べる程ではない。だが、一度見たら決して忘れられない何かがこの男にはあった。
そう。言ってみれば、人を引き付けて止まない魅力のようなものが。
ミフィシーリアが男を観察している間に、リィと呼ばれた女性はその男の元に辿り付いていた。
そして彼女はその華奢な右手を振り上げる。もちろん、手はぐっと拳に握り締められて。そしてそのまま、その拳は男の脳天へと振り下ろされた。

「この、永遠の悪戯小僧がああああああぁぁぁぁぁっ！！」

叫びと共に響くげいんという打撃音。
男は脳天を押さえて床を転げ回っている。どうやら先程の拳には相当な力が込められていたらしい。
床でのたうち回る男を冷たく見下ろし、リィと呼ばれた女性はふん、と侮蔑の溜め息を一つ零すと、のたうち回る男の懐を探り、何やら引っ張り出すとつかつかとミフィシーリアへと歩み寄った。
そしてミフィシーリアの前まで来ると、優雅に一礼。先程の事などなかったかのような見事な一礼だった。

「ようこそ、ミフィシーリア・アマロー様。王宮一同を代表し、あなたを歓迎いたします」

自分に礼を尽くす女性に、ミフィシーリアも慌ててこちらこそ、

と頭を下げる。

「私は宰相補兼侍従長、リーナ・カーリオンと申します」

再び優雅に頭を下げたその女性は、先程男の懐から取り出したものをミフィシーリアへと差し出した。

それは鍵だった。

どこか古めかしい銀色の鍵。

そしてその鍵の頭の部分には、黒い黒曜石のような宝石が一つ付いていた。

「この鍵は後宮の住人の証です。決して無くさないように。いいわね？」

リーナから渡された鍵を、ミフィシーリアは改めて眺める。

そして鍵の黒い宝石が付いていない面に、装飾された文字で「6」と刻まれている事に気づいた。

「それはあなたが後宮第六の間の主人の証。つまりあなたが現在第五側妃であるという証明なの」

現在後宮第一の間に住人はいない。そこは正妃のみが入る事を許される部屋だからだ。

そして第二の間には第一側妃であるアーシア姫が入っている。以後、後宮入りした順に第五側妃であるミフィシーリアの第六の間まで、後宮の部屋が埋まっているとリーナが説明してくれた。

そしてその説明が終わると、リーナは微笑みながら懐から何かを取り出す。

その取り出されたものを見て、ミフィシーリアが驚きを浮かべる。

リーナが取り出したのは、先程ミフィシーリアが手渡された鍵と

同じ物。
　唯一違うところといえば、ミフィシーリアの鍵に「6」の文字が刻まれていたのに対し、彼女の鍵には「5」の文字が刻まれているところか。
　それは即ち、この目の前の女性もまた、ミフィシーリアと同じ側妃であるという事に他ならない。
　驚いて動きを止めたミフィシーリアに、リーナは微笑みを浮かべたまま後宮に案内するから着いて来るように促した。
　しかし、驚きから立ち直ったミフィシーリアは、果してそのまま彼女に着いて行っていいのか迷う。
　そんなミフィシーリアの様子を察したリーナが振り返った。

「どうしたの？」
「あ、あの……勝手に謁見の間を出ても構わないのですか？　まだ国王陛下との謁見が済んでいませんが……」
「ああ、その事ね。それならもういいわ」

　そう言い捨てて謁見の間を出ようとするリーナ。それでもミフィシーリアが迷う素振りを見せると、リーナは改めていまだに床でのたうち回っている男を指差した。

「あれが陛下よ」
「――――――は？」

　ぽかんと表情の抜け落ちた顔でミフィシーリアは立ち尽くす。
　そんな彼女に、リーナは無理もないわね、と溜め息を一つ零す。

「カノルドス王国国王、ユイシーク・アーザミルド・カノルドス１世。正真正銘、あそこでのたうち回っているのが我らが国王陛下その人よ」

「はあああああぁぁぁぁっ！？　あ、あれが国王陛下なのですかっ！？」

慎みも礼儀もふっ飛んだミフィシーリアの叫び声が謁見の間に響き渡る。

そんなミフィシーリアに、リーアは腕を組んで無理もないわね、と沈痛そうに再び呟いた。

０１－国王との謁見（後書き）

『辺境令嬢』更新。

やってしまいました。

こういう後宮ものの王様って大抵美形と相場が決まっているというのに、うちの王様は美形ではありません。しかも、彼のモットーは「永遠の悪戯小僧」です。

果してこんな王様で受け入れて貰えるのか少々心配ですが、こんな王様でやっていくしかありません（笑）。

今後もよろしくお願いいたします。

※アマロー領から王都までの日程をこっそりと修正。今までの距離だとアマロー領までの距離が近過ぎて、辺境というイメージではなくなってしまいそうだったので。

02 ― 犬姫

リーナに案内され、ミフィシーリアは王宮の廊下を歩く。向かう先は後宮でミフィシーリアに与えられた第六の間である。

途中、昨夜泊まった客間に立ち寄りメリアと合流、荷物を持った彼女が静かにミフィシーリアの後ろを着いていく。

荷物を持ったメリアの姿を見たリーナが、その少なさに少々驚いた様子だったが。

複雑な構造の王宮は、ミフィシーリアやメリアからすれば迷路同然で、とても一度で覚えられるようなものではなく、表には出さないもののミフィシーリアもメリアも必死にリーナの後を追う。

きっと今、彼女とはぐれたら迷子になるのは確実なのだから。

そして同時に脳裏を掠めるのは、先程の一幕。

自分の数歩先を歩くこの女性はれっきとした側妃の一人であり、更に宰相補兼侍従長という要職に就いていると言っていた。

だが、例え国の要人の一人であり、側妃の一人であっても、一国の国王を殴って許されるのだろうか。いや、そもそも側妃という立場でありながら、要職にあるというのもいかがなものか。

正妃や側妃の第一の仕事と言えば、当然子供を産む事である。

王の世継ぎが生まれる確率を上げるために、後宮という場所は存在するのだから。

だから普通、側妃は後宮から出る事はない。正妃ともなれば様々な行事に出席する必要もあるだろうが、側妃にはそのような義務はない。

それにどこにどのような危険が潜んでいるのか判らない、という事実もある。

王の寵愛を受ければ当然、他の側妃たちからは妬みを買う。そうなると、最悪の場合暗殺という手段が用いられる可能性だってあるのだ。

だから側妃たちは後宮から出ることはなく、出たとしても侍女や護衛の兵を引き連れて出る。

だがこのリーナという側妃は、護衛どころか侍女の一人も連れず、あまつさえ公職にまで就いているというのだ。さすがにこれは非常識過ぎないだろうか。

その事実にミフィシーリアは知らず眉間に皺を寄せてしまう。そんな彼女の様子に気づいたのか、前を歩くリーナが振り向いた。

「どうしたの？　ここのところ、皺寄ってるわよ？」

と、リーナは自分の眉間を指差しながら問う。

「あの……よろしかったのですか？」

「え？　何が？」

「そ、その……国王陛下を殴ってしまわれて……」

「はぁっ？　国王陛下を殴ったっ！？」

ミフィシーリアの後ろを歩くメリアが思わず驚きの声を上げるが、リーナはそれを一切気にせずに深々と溜め息を零す。

「私が王宮の中で何て呼ばれているか知ってる？」

いきなり見当違いな問いかけに、ただただ黙って首を横に振るミフィシーリア。

「『国王の外付け良心』……私の事を王宮の人たちはそう呼ぶのよ。甚だ不本意だけど」

リーナが言うには、何かにつけて暴走する国王を彼女が奔走しながらが諫めるのが、いつの間にかこの王宮では当たり前の光景にな

ってしまったそうだ。
そして付いた呼び名が『国王の外付け良心』。確かにリーナにとっては不本意な呼び名だろう。

「だから、私があいつの暴走を止める際、多少行き過ぎな行為をしても誰も……宰相閣下や将軍閣下でさえ文句は言わないわ。もちろん、当のあいつも承知している事よ」

国王陛下を平然とあいつと呼び、見下すような態度のリーナ。だが、彼女の瞳の中には確かな信頼と深い情愛が見て取れた。

「リーナ様は……リーナ様は、陛下の事を愛していらっしゃるのですね……」

思わず零れ出たミフィシーリアの言葉に、リーナは一瞬驚いた表情を浮かべると、すぐにそれを引っ込めて苦笑を浮かべる。

「もちろん、私はあいつを愛しているわ。だけどそれは私だけじゃない。今、後宮にいる側妃たちは皆、あいつを心の底から愛しているのよ」

照れる様子もなく平然とそう言ってのけたリーナ。そこまで彼女にそう言わしめる国王に、ミフィシーリアは改めて興味を抱いた。

「あー、くそ。リィの奴、思いっきり殴りやがって……」

床に直接座り込み、頭頂部をひとしきり撫でながら、ユイシークはぶつぶつと不満を呟く。
そしてひょいっと立ち上がると、いまだに玉座にあったべあーく

ん？世を無造作に放り投げ、どかりと玉座に腰を下ろした。

「驚いていたかな、あいつ……ま、驚いたなら成功だな」

玉座のひじ掛けに頬杖を突き、そう一人呟いた時。不意に彼の正面の大扉が開いた。

開いた扉の向こうに立っていたのは一人の男性。それはユイシークがとても良く知っている人物。

その人物は無造作に玉座に座るユイシークに近づくと、跪く事さえせずに彼に話しかける。まるで気心の知れた友人に対するかのように。

「よう、シーク。どうだった、アマローのご令嬢は？　対面したんだろ？」

「珍しいな、ジェイク。おまえが俺と側妃との対面を気にするなんてよ？」

国王とその国王を守る近衛隊の隊長。二人は互いの立場を弁える事なく、旧知の知人にするかのような挨拶を交わす。

「そりゃあ、気になるぜ。もしおまえがあのお嬢さんを側妃にと言い出さなかったら、俺が嫁に貰ってたところだからな」

「なんだ、ジェイク？　おまえ、あの娘に惚れたのか？」

「んー、別にそういうわけじゃねぇんだけどよ。気に入ったのは確かだ。なんせあんなご令嬢はこれまで見たことねぇからなぁ」

あっけらからんとそう言ったジェイクは、にやりとした笑みを浮かべた。

あの令嬢は領民のためなら、自分が奴隷となる事をいとも容易く承知した。もちろん、奴隷となる事がどういう意味なのか判らない

筈がないだろう。
聞けば、コトリが人間ではないと知っても、はっきりと友であると言い切ったらしい。
普通の貴族の娘なら、いくら領民のためとはいえ、奴隷となる事を承知したりなどはしないだろう。
そしてコトリの事だって彼女を気味悪がるか、恐れるかのどちらかだというのに。
だが、ミフィシーリアは違った。
あんな娘は貴族どころか、平民の中でもそうはいないだろう。だからジェイクはミフィシーリアに興味を持った。
ジェイクは今では伯爵位を授かっているが、『解放戦争』の前は単なる孤児だ。そんな自分に堅苦しい貴族の娘は必要ない。
とはいえ、平民から伴侶を選ぶわけにもいかない。彼の今と今後の立場がそれを許さない。
だからジェイクはミフィシーリアなら、と思ったのだ。
彼女ならば自分の伴侶として、きっとやって行けると。彼女と一緒なら、自分もきっとやって行けると。
だが、しかし。

「悪いな、ジェイク。おまえがそうであるように、俺もあの娘には興味があるんだ。ここは国王としての権利を行使させて貰う」

親友とも悪友とも呼べるこの男もまた、ミフィシーリアに興味を抱いたようであった。
ユイシークはコトリと一部感覚を共有出来る。それを通じて、彼もミフィシーリアがコトリに対してごく普通に接することに興味を抱いたのだ。

「まぁ、おまえがそう言うなら俺は何も言わねぇよ。だが、覚えておけよ？　もしあの娘を悲しませる事しかできねぇようなら、俺は

おまえを殴るだけじゃ済まさねぇぜ？」
「おう。なに、あの娘ならあの連中の中にも溶け込めるさ。コトリもいる事だしな」
ユイシークは親友にして悪友を前に、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

ミフィシーリアたちはその後、リーナに歩きながら王宮や後宮について様々な事を説明して貰った。
そして、幾つかの階段を上下し、幾つもの廊下を曲ったところで、ミフィシーリアたちの視界に広々とした庭園が飛び込んで来た。

「これは……素晴らしいですね……」
「ふぁぁ……、綺麗な庭園……」

綺麗に手入れされたその庭園に、二人が感嘆の溜め息を零す。
計算されて配置された樹木は綺麗に形を整えられ、植えられた草花もよく手入れされていて、色とりどりの色彩に溢れている。
地面には一面の芝生が植えられており、裸足で歩いてもきっと気持ちいいだろう。
辺りには小鳥の鳴き声が幾つも響き、何ともいえない風情を醸し出している。
そしてそんな庭園の片隅には小さな東屋。その東屋には現在誰かがいるようで、一人が東屋に設置されている椅子に座り、その他の者がその周囲に控えるように立っていた。
座っていた人物がどうやらミフィシーリアたちに気づいたようで、立ち上がるとゆっくりと背後の者たちを引き連れてこちらに近づいて来る。
そしてその人物が近づいた事で、それが綺麗なドレスを身に纏っ

た金髪の年若い女性だと知れた。背後に控えているのはその女性の侍女たちのようである。

「これはこれはご機嫌よう、リーナ様」

「こちらこそ、お顔が拝見できて嬉しいですわ、アルジェーナ様」

金髪の女性がドレスの裾を摘まんで礼をすると、リーナも頭を下げて礼を返す。

慌ててミフィシーリアとメリアも、リーナに倣って頭を下げた。

「それでアルジェーナ様。本日はこちらで何を？」

「ええ。父が登城する用事がありましたので、私も陛下にご挨拶をと思いまして。ですが、残念ながら陛下はお忙しいご様子。ですからこちらでお待ちしておりましたの」

と、ここでアルジェーナと呼ばれた女性は、ようやくリーナの背後にいたミフィシーリアたちに気づいたようだった。

「あら、そちらは？　もしかして新しい後宮の使用人かしら？」

確かに、ミフィシーリアは地味な格好をしていた。

流石に今日は国王と謁見するため、今日のために事前に準備したドレスを着てはいたが、元々華美なものを嫌うミフィシーリアの事だから、今日用意したドレスもそれ程上等なものでも派手なものでもない。

それでもミフィシーリアにすれば、普段は袖も通した事のないような代物であるのだが。

しかし、目の前の豪華なドレスを身に纏った女性からすれば、今のミフィシーリアの姿でも使用人と勘違いしても不思議ではないのだろう。

メリアは侍女であるので、最初から侍女のお仕着せを着ている。

「いいえ、こちらはミフィシーリア・アマロー様。本日、陛下より第六の間の鍵を与えられた正式な側妃様です」

「な……なんですってっ！？」

リーナがミフィシーリアを側妃だと紹介した瞬間、アルジェーナの表情が一変した。

それまでは穏やかな笑みを浮かべていた彼女だったが、一瞬だけ驚きを浮かべるとそれはすぐに怒りに取って代わった。

「こ……このわたくしを……ストリーク伯爵家の令嬢たるこのわたくしの後宮入りを断わっておきながら、このような地味な田舎娘が側妃ですってっ！？　そんな事が……そんな事があるはずがないわっ！！」

アルジェーナは顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

そしてその怒りはリーナの背後に控えていたミフィシーリアへと向けられる。

「あなた……っ！！　一体どうやって陛下を誑かしたのっ！？」

アルジェーナは今にも掴み掛からんとする勢いでミフィシーリアに迫る。

ミフィシーリアの危機を悟ったメリアがミフィシーリアの前に出ようとしたが、不意にアルジェリーナの姿がメリアの前から消えた。

「あ……あれ……？」

急に消えたアルジェーナの姿を求め、メリアはきょろきょろと左

右を見回す。

そんなメリアの耳に、どこからともなく呻き声のようなものが届いた。そしてどうやらその呻き声は、彼女の足元から聞こえてくるようだ。

ゆっくりとメリアが視線を下に向けると、そこに先程消えたアルジェーナの姿があった。

アルジェーナは無様に大地に突っ伏したまま、弱々しく呻き声を上げていた。背後の侍女たちからも悲鳴が上がっている。

彼女が不意に消えたように思ったのは、どうやら転んで地面に突っ込んだからのようだ。

はて、なぜ何もない所で転ぶのだろう？　と、メリアが周囲を見回すと、どこか不敵な笑みを浮かべたリーナと目が合った。

更によくよく観察してみれば、メリアの右足が少し前に出ている。

どうやらミフィシーリアに掴み掛かろうとしたアルジェーナを、リーナが足を引っかけて転ばせたのだ、とようやくメリアは理解した。

「こ……この……っ！！　何て事するのよっ！！」

ようやく起き上がったアルジェーナは、ドレスに付いた芝生の葉を落とす事もせずに自分を転ばせたリーナを睨みつける。

「こ、このわたくしにこのような真似をして只で澄むと思っているのっ！？」

「あら、あなたこそ正式に側妃となられたミフィシーリア様に、このような無礼を働いて只で済むとでも？」

侮蔑したように言い放つリーナの言葉に、アルジェーナは更に顔を赤く染める。

「お……お黙りなさいっ！！　犬姫の分際でっ！！　あ、あなたなんて元奴隷のくせにっ！！」

元奴隷。その言葉に驚くミフィシーリアたちを気にかける事もなく、リーナは更に不敵な笑みを浮かべる。

「あなたは間違っているわ」

「何ですってっ！？　あなたがいくら貴族の養子になろうとも、元奴隷という事実は消せなくってよっ！！」

「だからそれが間違っていると言っているのよ」

リーナは制服の襟元を緩めると、その首元を白日の元に晒した。

そしてそれを見たミフィシーリアが驚きに目を見張る。

彼女の細く白い首には黒い革製の首輪があった。よくよく見れば、その首輪には国王であるユイシークの名前が刻み込まれている。

「私は陛下の元奴隷ではないわ。私は今でも……いえ、永遠に陛下の奴隷なのよ」

そう言って首輪を晒すリーナの姿は、とても誇り高く輝いていた。

０２ー犬姫（後書き）

『辺境令嬢』更新。

そして犬姫の活躍。

実は彼女、外伝として何話か書けてしまうほどのお気に入りだったり。

いつか書く事ができればいいなぁ。

今回は『魔獣使い』もう更新しています。

今後もよろしくお願いします。

０３ 一後宮への第一歩

「何事ですか？」

リーナとアルジェーナの間の一触即発の空気を、吹き込んだ爽やかな一陣の風が吹き飛ばす。

皆の視線が声の方へと向かえば、その先には一人の騎士の姿。

男性にしてはやや小柄で線も細くすらりとした身体つきだが、小柄なミフィシーリアと比べれば頭一つは背が高いだろう。年齢は二十歳前後に見える。

襟元できっちりと切り揃えられた黒髪は絹糸のような光沢を有し、その髪と同色の瞳は優しげに輝いている。

まるで絵物語から抜け出した主役のような、男性とは思えない優しげで美しい容貌の青年。現にこの騎士が現われた瞬間、アルジェーナの背後に控えていた侍女たちの間から黄色い声が幾つも上がった。

騎士の制服を身に着け腰には長剣。そして胸元には隊長の地位を示す階級章。その背後には部下らしき数人の女性騎士の姿があった。

「……マイリー様……」

アルジェーナが忌々しげに呟く。どうやらそれが現われた騎士の名前らしい。

メリアなどは、マイリーの美しい姿にすっかり見蕩れている。

そしてマイリーは、そのままミフィシーリアたちの傍まで来ると、無言でアルジェーナの前にたち、失礼しますと一言断りを入れ彼女のドレスに付いた芝の葉などを優しく取り払う。

「あ、ありがとうございます、マイリー様」
「それで何事ですか、アルジェーナ嬢？　あなたとリーナ嬢が何やら揉めていたと部下から報告がありましたが？」
「い、いえ、何でもありませんわ。では、皆さん、ご機嫌よう」

慌てたように挨拶を残すと、アルジェーナは侍女たちを引き連れて庭園を後にする。
その際、リーナやミフィシーリアを鋭い目つきで一睨みするのを忘れなかった。
それを目にしたメリアはうんざりとする。
どうやらあのアルジェーナという令嬢は側妃ではないようだが、それでもミフィシーリアにあそこまでの敵意を露にした。
そうすると、同じ立場になる他の側妃たちは、どれ程の敵意をミフィシーリアに向けてくるというのだろう。そう考えるだけでもメリアの気分は重くなる。

（……だけど、私がお嬢様を守らなきゃ！）

と、メリアは人知れず改めて決意した。

「あまり無茶な事しないでよ、リィ」
「あら、最初に無茶な事をしたのは向こうよ、マリィ」

リーナの前に立ったマイリーは、苦笑を浮かべながら肩を竦める。
互いに愛称で呼び合うこの二人は、かなり仲が良さそうだとミフィシーリアが思っていると、そのマイリーの眼が自分に向いている事にようやく気づいた。

「ひょっとして、こちらのご令嬢が？」

「そう。こちらがミフィシーリア・アマロー嬢。今日から第六の間に入る方よ」

リーナと言葉を交わしたマイリーは、ミフィシーリアの前に来るとすっと一礼する。

「お初にお目にかかります、ミフィシーリア嬢。私は後宮騎士隊の隊長を務めておりますマイリー・カークライトと申します。どうぞ、よろしく」

「は、はい、こちらこそ、よろしくお願い致します」

慌てて頭を下げたミフィシーリアだが、今、目の前の騎士が名乗ったカークライトという家名に聞き覚えがあった。

「カークライト……？　それではあなたは……」

「はい。現在この国の軍部を統括しているカークライト将軍は私の父です」

御三家の一つ、カークライト侯爵家。

クラークス侯爵家と同じく、『解放戦争』の初期からユイシークに協力してきた貴族であり、先程マイリーが言った通りカークライト侯爵は軍部を統括している。

マイリーが現在、後宮騎士隊の隊長を務めているという重職にあるという事は、この騎士もまたジェイクやケイルと同様に、『解放戦争』の時からユイシークと共に戦場を駆け抜けて来たのだろう。

今話に出た後宮騎士隊とは、後宮の警備警護を主任務とする騎士隊である。

その編成は後宮という場所の警備警護から、主に女性の騎士で編成されている。騎士を目指す少女たちにとって、後宮騎士隊は憧れの部隊であるともいえるのだ。

かつてのカノルドス王国では、女性が騎士に叙勲されるような事は有り得なかった。

だが新体制となった今では、男だろうが女だろうが貴族だろうが平民だろうが実力があればどんな役職にでも就く事ができるようになった。

これもまた、現国王が国民から支持されている理由の一つである。

「鍵は受け取りましたか？」

マイリーはミフィシーリアににこりと微笑むとそう口にした。

先程見た国王のどこか悪戯小僧のような笑みとはかなり違うなぁ、と何気に無礼な事をこっそりと思いつつ、ミフィシーリアは先程リーナから手渡された鍵を取り出すとマイリーに見せた。

「できればその子は肌身話さず持っていてあげてください。そうすればきっとその子は、あなたの想いに応えてくれるでしょう」

「は？　それはどういう意味でしょうか？」

だがマイリーはミフィシーリアの問いには答えず、爽やかな微笑みを浮かべるだけ。

「それでは、私はまだ仕事中ですので。後程、またお会いしましょう」

そう言い残し、マイリーは部下の女性騎士を連れて踵を返した。

去って行くマイリーの背中に、にミフィシーリアはぺこりと一礼すると、リーアへ振り返る。丁度彼女は制服の襟元を正しているところだった。

そしてミフィシーリアは思い出す。先程、リーアがアルジェーナに『犬姫』と呼ばれていた事を。彼女の首に奴隷の首輪が存在した

事を。

「ごめんなさい。驚かせたかしら？」

リーナは正した制服の首もとを押さえながら尋ねる。

「は、はい。確かに驚きましたが……」

「ふふ。正直ね。でも好きよ、そういう正直なのは。確かに私は陛下の奴隷だった。一応、今では奴隷からは解放されてカーリオン伯爵家の養女となっているけどね」

と、リーナは再び襟元を緩めて首輪を露出させる。そしてくるりと背中を向け、波打つ亜麻色の髪を掻き上げてうなじをミフィシーリアに見せた。

先程同様、ミフィシーリアには黒い首輪が見えた。しかし、彼女の首輪には鍵がついていなかった。

普通、奴隷の首輪には鍵がつく。奴隷が勝手に首輪を外して逃亡しないために。

その鍵がないという事は、彼女は自分の意志で首輪を外す事ができるという事。即ち、リーナは奴隷ではないが、敢えてその首輪を身に付けているという事になる。

「この首輪はあいつから初めて贈られたもの……例えそれが奴隷の首輪だったとしても、私は絶対に手放さない。だってこれもあいつとの絆の一つだもの」

そう語るリーナの表情は甘く蕩け、まるで恋する少女そのもの。

「私にはね、弟がいるの。たった一人の肉親の弟が。でも、その弟は病気だった。いつまで生きられるか判らない死の病……。私は弟

の病を癒してもらうため、陛下の奴隷になったのよ。そしてこの王宮で、一番下の下働きとして働き始めた……犬人族（コボルト）たちと一緒に寝起きしながらね。だから人によっては私を『犬姫』なんて呼ぶわ」

そうリーナは微笑みながら語る。その微笑みが向けられているのは、今話に出てきた彼女の弟か。それとも恩人にして愛しき国王か。

「当時の私たちは孤児だった。お金どころか何も持っていなかった。弟の治療の引き換えに差し出せるものといえば私自身しかなかった。だから奴隷になるぐらいは最初から覚悟していたわ」

リーナが語るうちに、その顔に浮かぶものが微笑みから別のものに変わっていくのをミフィシーリアは目の当たりにする。

今、リーナの顔に浮かぶのは、明らかな怒りだった。

「でもあの鬼畜ときたら、私を奴隷にするだけじゃ飽き足らず、その場で裸になれって言ったのよ？　それも公衆の面前で！」

リーナが国王となったユイシークに弟の治療を直訴したのは、ユイシークが国王となり、その姿を国民に知らしめるため、王都を馬車で移動中の時だった。

当然、周囲には新たな王を一目見ようと大勢の人々が集まっていた。そんな中、王に弟の治療を願ったリーナは、その代償として奴隷となり、同時にその場で裸になれと命じられたのだ。

「そ、それで……その、リーナ様は……」

「ええ。裸になったわよっ！！　公衆の面前で全部脱いだわっ！！　そりゃあもう、王都中の人に裸を見られたわよっ！！」

顔を赤く染めた二人の会話。

一人は羞恥で、もう一人は怒りで顔を赤くするという違いはあったが。

「そりゃあね、あんな公衆の面前であいつに直訴した私が悪かったのかもしれないけど！」

リーナも今では知っている。なぜユイシークがあの時、あのような過酷な条件を出したのかを。

もちろん、単なる好色さから出した条件ではない。然るべき理由があって出された条件だったのだが、その条件を出したのがユイシークである以上、単なる嫌がらせか悪戯ではないかとも思えてしまうリーナだった。

ユイシークが過酷な条件を出した理由。それは徒(いたずら)に前例を作らないためだった。

新しく国王となった青年が、孤児である姉弟を助ける。それはそれで美談として語り継がれるだろうが、それだけで終わらないのは目に見えている。

ユイシークは国王となった。今までは単なる反乱軍のリーダーだったが、これからはそれでは済まされない。

国王となったからには様々な執務が待ち受けている。そしてその量は膨大だ。

それなのに、ユイシークが国民を癒したという前例を作れば、癒しを願う者は後を断たなくなるだろう。

そして一人を癒した以上、それ以外の癒しを断わる事は王としての信用を失う事に繋がる。

あいつは癒したのに、どうして俺は癒してくれないのか。癒しを願う国民からすれば、そう思ってしまうのは当然だろう。

そしてユイシークが国民を癒せば癒す程、王としての執務が滞る。

だから、ユイシークはリーナに過酷な条件を出した。

奴隷に落ちてまで癒しを願うのか。公衆の面前で肌を晒してまで

弟を助けたいのか。
果してリーナにそれだけの覚悟があるのかを、ユイシークはあの時試したのだ。

「どんな事でもするから癒してくれ」

そう言う者をユイシークは何人も見てきた。だが実際には、過酷な条件出されれば尻込み刷る者が殆どだった。
だが、リーナは違った。ユイシークの出した過酷な条件を全て飲んでまで弟の癒しを願った。
だからユイシークはリーナたち姉弟に救いの手を差し伸べた。
リーナの覚悟が本物だったから。彼女の弟に対する愛情が本物だったから。
実を言えば、今でもこっそりとユイシークは国民の癒しの願いに応じている。
だけどそれは本当に癒しを必要とする者にだけ。
様々な者を使い、本当に癒しを必要としている者をこっそりと王城に呼び、癒しを施しているのだ。
ユイシークでなくても癒せるほどのものなら、従兄妹であるアーシアに任せる事もある。
そして、誰に癒されたのかを誰にも明かさない事を、癒しを施す条件の一つとして付け加えて。
リーナと同等の覚悟を持つ者を、新しき国王は決して見捨てはしないのだ。

「ごめんなさいね。結構な道草になっちゃったわ」

そう詫びると、リーナは改めてミシフィーリアたちを案内した。
先程の庭園は王城の中央に位置するらしく、その庭園をぐるりと

回った先に、これからミフィシーリアが暮らす事となる後宮があった。

リーナに従い歩く事しばし。ついにミフィシーリアの前に後宮へと繋がる扉が現われた。

扉の両脇に立つ女性騎士――後宮騎士と思われる――が、リーナに気づき敬礼する。

騎士たちに鷹揚に頷いたリーナが目配せすると、騎士の一人が扉を押し開いた。

開いた扉の先には、彫刻の施された柱が何本も並ぶ長い廊下。

その廊下へと、ミフィシーリアはリーナに続いて足を踏み入れた。

そう。

この瞬間から、ミフィシーリアの側妃としての、後宮での暮らしが始まるのだ。

０３ 一後宮への第一歩（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

おかげ様をもちまして、お気に入り登録が１００件を超えました。
これも全てはここに来てくださる皆さんのお陰です。

今後もがんばりますので、末永くお付き合い願います。

よろしくお願いします。

０４ー第六の間にて

よく掃除の行き届いた廊下を、ミフィシーリアはメリアを伴ってリーナの後を歩く。

足元は綺麗に磨かれた石の上に絨毯が敷かれている。その絨毯の長い毛足が、歩く彼女たちの足音を吸収する。

三人は幾つもの扉を通り過ぎて行く。

途中、ミフィシーリアはそれらの扉に彫刻された模様の中に、図案化された数字がある事に気づいた。

おそらく、その数字がそれぞれの側妃たちの暮らす部屋の番号なのだろう。

リーナはミフィシーリアが入る部屋の事を「第六の間」と呼んでいた。

ミフィシーリアはきっと自分が入る部屋の扉には、「６」という数字が図案化されているのだろうと推測する。

やがてリーナが一つの扉の前で足を止めた。

同じように足を止めたミフィシーリアたちに、リーナはにこりと微笑んで告げた。

「ようこそ、ミフィシーリア・アマロー様。ここがこれからあなたが暮らす第六の間よ」

リーナが示す扉には、やはりミフィシーリアの予測通り「６」という数字があった。

これから暮らす己の部屋に足を踏み入れたミフィシーリア。と、彼女に続いて部屋に入ったメリアは、その部屋の広さに驚いた。

故郷であるアマロー男爵領にあるアマロー家の館。その館の居間

ほどの広さの部屋が、扉の向こうに存在した。
部屋の中にはテーブルや、ソファー、暖炉といった一通りの家具。足元には廊下よりも複雑な模様が織り込まれた絨毯。そしてその部屋には手前に二つ、奥に二つ、全部で四つの扉が存在した。
その二つの扉の内、手前にある二つの扉を指差しながら、リーナが説明を加える。

「手前の右側の扉は侍女の……えっと、メリアだったかしら？　あなたたち侍女の控えの間に続いていて、二人までならそこで寝起きできるようになっているわ。左側の向こうは洗面所とお手洗いよ」

そして、と前置きして更に説明は続く。

「奥の扉の右側は寝室ね。残る左側は浴室。一応この部屋に浴室はあるわけだけど、それ以外にも陛下と側妃専用の大浴場があるから、よければそちらを利用しても構わないわよ？　私は部屋の浴室よりも、大浴場の方が広くて気持ちいいからよくそちらを利用するけど。ああ、そうそう、メリアのお風呂は悪いけど使用人共同のものを使ってね」
「あ、はい、了解しました！」

そう言われたメリアは頷きながらも、とある事実に気づく。
先程から自分たちを案内してくれ、今も細かく説明してくれる目の前のリーナという名の女性。
メリアはこれまでの会話の内容からひょっとしてとは思っていたが、どうやらこの女性も側妃の一人だと思って間違いないと確信した。
その事実に驚くも、何とか顔に出さないように努めるメリア。
しかし、新しく入った側妃の案内人に、先輩の側妃が務めるという話は聞いた事がない。

普通なら新しく現われた敵ともいうべき存在に、このように懇切丁寧に案内をしてくれるものだろうか。

表面的には大人しく、だが内面では大いに訝しみながら話を聞くメリア。そんなメリアの心境をよそに、リーナの説明は続いた。

「後、今日のこれからの予定だけど、宮殿医師の診察を受けて貰います」

「宮殿医師の診察……ですか？」

「お嬢様は別に病気も怪我もありませんけど？」

リーナに対する疑惑が残るメリアの台詞には、若干の刺のようなものが含まれた。

その事に気づかないリーナではないが、敢えてそれを無視してメリアの質問に答える。

「一応、これは全ての側妃の義務みたいなものだから我慢して貰えるかしら？　それに自分でも気づかない病気って以外にあるのよ？」

「なるほど。もしも、私に自分でも気づかない病気があって、その病気が他の側妃様や陛下に移りでもしたら大変だ、という事ですね？」

「ふふ、理解が早くて助かるわ。要はそういう事よ」

リーナが付け加えた説明によると、側妃たちは定期的に宮殿医師の診察を受けているという。

この定期的な診察は、側妃たちの健康を維持するのはもちろんだが、その主な目的は懐妊の発見である。

側妃たちの第一の役目は、次の王となるべき者を産む事であるのは言うまでもない。それ故に側妃の懐妊の早期発見のため、定期的な診察が行われているのだという。

もっとも、今のところ懐妊の兆しを見せている側妃はいないそう

なのだが。

「大まかな説明はこんなところかしら。後、あなたの正式なお披露目は後日行われるわ。それまでに色々と準備があるからちょっと忙しくなるわよ。いつお披露目が行われるのかは、正式な日取りが決まり次第伝えるわね。それから……」

リーナの視線がちらりとメリアを捉える。

「実家から連れて来た侍女は彼女だけみたいだけど……もし、もっと人手が必要なら言ってね。私の方から手配するから。それから専属の護衛とかも必要かしら？」

「いいえ。侍女はメリアがいれば十分です。護衛も必要ありません」

ミフィシーリアの答えに、リーナの表情が若干曇る。

「メリアだけではいけませんか？」

リーナの感情の変化を敏感に感じ取ったミフィシーリアは、彼女には珍しく険のある口調で問い返す。

「いいえ、別に彼女だけでも構わないけど……まあ、いいわ。後からでも必要だと感じたらそう言ってね」

そしてリーナはどうぞごゆっくり、と告げるとその場で一礼。ミフィシーリアたち主従もそれに返礼する。

ミフィシーリアが視線を戻した時、リーナはすでに身を翻して出入り口の扉へと向かっている。

だが、その彼女の足がふと止まり、再びミフィシーリアたちへと向き直った。

「私とした事が、大切な事を伝え忘れていたわ」

リーナはぺろっと小さく舌を出すと、改めてミフィシーリアたちの元へと戻って来た。

「大切な事ですか？」

「ええ。あなたは側妃として後宮に入った。そして側妃の証でもある鍵を浮け取った。でも、諸侯へのお披露目が済むまでは、あなたはまだ正式な側妃としては認められていない」

ミフィシーリアの諸侯へのお披露目とは、いわば彼女と国王の披露宴である。それが済むまでは、この国のしきたりで側妃としては認められない。

その事を承知しているミフィシーリアは、リーナの話に黙って首を縦に振る。

「それでもきっと、あいつはあなたに色々とちょっかいをかけてくると思うの。だから――」

リーナがあいつと呼ぶのが誰なのか、今更聞くまでもない。

正式な側妃となる前でも国王はきっとこの部屋を訪れる。だから失礼のないように接しろ。つまりは、国王に身体を求められればそれに応じろ、とリーナは言いたいのだろう。

もちろん、ミフィシーリアとて側妃として後宮入りした以上、国王に身体を求められれば、それに応じる覚悟はある。後宮入りするという事は、それが主な目的なのは否めないのも事実である。

だからミフィシーリアは、今度もリーナの言葉に黙って頷こうとした。しかし、彼女が次に告げた言葉は、ミフィシーリアがまるで予想もしない言葉だった。

「――適当に流しなさい。あいつの言う事をいちいち真剣に聞いては絶対にだめ。拒否したければ拒否してもいいわ」
「え……？　それでよろしい……のですか？」
あまりの言いようにぽかんとするミフィシーリア。彼女の後ろではメリアも似たような顔で驚いている。
そしてリーナはまたも深々と溜め息を吐く。彼女が国王について語る際、よくそうして溜め息を吐く事にミフィシーリアは気づいていた。
それは彼女が普段から、国王の所業に余程手を焼いているという証なのだろう。
「全然構わないわ。あいつは『面白い』が何より優先する奴よ。だから何か面白そうな事を思いつけば、それを必ず実行しようとする。そしてそれを実行するだけの行動力が無駄にあるものだから、余計に厄介なの」
そう言い残すと、今度こそリーナは第六の間を後にした。
リーナが去った後、ミフィシーリアとメリアは持って来た荷物の整理と第六の間の掃除に取りかかった。
掃除の方は前もって行われていたようで、軽く掃除する程度で済んだ。
荷物の整理も、元々持って来た荷物が少ないため、こちらも短時間で終わってしまう。
そしてやる事を全てやり終えたミフィシーリアは、この部屋に備えつけられてお茶の葉を使用し、メリアに入れて貰ったお茶を飲み、ほうと溜め息を吐く。

何だかんだで、やはりミフィシーリアも疲れたのだ。

「疲れましたか、お嬢様？」

「ええ。流石に疲れたわ。今日は色々あったもの……」

国王との驚きの謁見に始まり、自分と同じ側妃であるリーナによる王宮と後宮の案内。

そしてその途中に遭遇したアルジェーナという貴族令嬢とのちょっとした諍い。

だが、これで今日が終わったわけではない。リーナが先程も言っていたように、宮殿医師の診察がある筈なのだ。

宮殿医師の診察って何をするのかしら、とミフィシーリアが考えていると、扉をノックする音が響く。

メイリアがミフィシーリアに伺うように視線を向け、それに応えてミフィシーリアが頷く。

それを確認したメリアが扉まで移動して、外にいる者に何者かと誰何の声をかけた。

そしてそれに応える年若い男性の声。

「ミフィシーリア様の診察に窺った宮殿医師です」

宮殿医師と聞いてもっと年を取った人物を想像していたメリアは、思いの外年若い声に軽く驚きつつ扉を開く。

そして開けられた扉の前には、ミフィシーリアと同年代と思しき少年が大きな黒い鞄を抱えて立っていた。

ノックをし、中から入出の許可を得ると、リーナは扉を開いて入室する。

扉の奥は大きな部屋。その部屋の中央に十人は余裕で座れる大き

な長方形のテーブル。
そしてそのテーブルには数人の女性が座っていた。
リーナはその顔ぶれを確認し、空いていた席の一つに腰を慣れた様子で腰を下ろす。

「どうでしたか？　ミフィシーリアさんの様子は」

テーブルの上座のすぐ右に座っている――上座は空席――、二十代後半に見える明るい茶髪の女性が腰を下ろしたリーナに尋ねた。

「さすがにあいつとの初対面は戸惑っていましたよ。まあ、謁見と言われて赴いたのに、あんな悪戯をしかけられたんですから、当然といえば当然ですね」

リーナの答えに、その場に居合わせた数人の女性がクスクスと笑う。

「相変わらずですわねぇ、シークさんも」

豪奢な金髪の女性が実に慈愛に満ちた顔で、そうじゃなければシークさんじゃありませんが、と続けた。

「ねぇ、ママー。いつになったらミフィに会いに行ってもいいの？」
「今日は我慢しなさいコトリ。ミフィシーリア嬢もきっと疲れているだろうから。もう少しして、彼女の疲れが取れた頃に会いに行くといいよ」
「あ、そうか。ミフィも遠くから王都まで来て疲れているもんね。うん、判ったよママ」

コトリは自分の隣に座り、ママと呼んだ黒髪の女性に嬉しそうに

甘える。
そんな二人の遣り取りを、この場の全員は微笑ましげに見守っていた。

「それで、ミフィシーリアさんは今日の食事はどうされると？　こちらに食べに来るのですか？」
「いえ、先程部屋に案内した際に聞きましたら、部屋で食べたいとの事でした。ですから……」
「ええ、承知しました。準備しておきます」

リーナの返答に、先程の上座の右に座っていた女性がにこやかに答える。

「それでは、彼女を歓迎する意味も含めて、腕を揮って美味しいものを準備するとしましょう」

この時、その女性が自分の正面に座っている、自分と良く似た髪色の女性が何やらそわそわしている事に気づいた。

「どうしたの？　何かあった？」
「え、う、ううん、な、何でもないよ！」

慌てて手と首をぶんぶんと振るその女性。

「そう？　それならいいのだけど」

そう返答した女性ににっこりと笑いつつ、先程からどこか落ち着きのない女性は、誰にも聞こえない声でぽつりと呟いた。

「……ねぇ、シィくん……ボク、本当にそんな酷い事しなくちゃい

けないの……？」

０４ 一第六の間にて（後書き）

『辺境令嬢』更新。

ようやく主要人物が出揃いました。とはいっても、今回ちょろっとしか出ていない人も三人ほどいますが。まあ、名前だけは前からちらちら出てましたけど。

あ、まだ宰相閣下と将軍閣下は名前が出ただけで実際には出てないや。

それでは今後もよろしくお付き合い願います。

05 ― 癒し姫

若い。いくら何でも若過ぎないか？
それが扉の向こうに立っていた人物を見たメリアの第一印象だった。

「宮殿医師のジークント・カーリオンと申します」

目の前に立つメリアに対し、そう自己紹介した少年はぺこりと低頭する。

「宮殿の医師様……ですか？　失礼ですが随分とお若いですね？」

私、警戒してます、という態度を隠そうともしないメリアは、単刀直入に宮殿医師と名乗った少年に尋ねる。
確かにその少年の見た目はミフィシーリアと同じくらいの年齢である。宮殿医師という重職に就くには些か若過ぎる。
そんなメリアに対し、少年は困ったような顔をしながらも切り出した。

「不審に思われるかもしれませんが、僕は確かに宮殿医師です。まあ、正確には見習いですけど。それと、本日宮殿医師がこちらに伺うという話は姉から聞いていると思いますが……」
「お姉さん……？」
「はい。宰相補兼侍従長兼第四側妃のリーナ・カーリオンは僕の姉です」
「ああ、リーナ様の弟さんですか……って、ええっ！？　あの人、

側妃なのに宰相補とか侍従長とかまでやってんですかぁっ!?」

リーナが側妃の一人だろうという予測はしていたが、役職に就いている事までは予想もしていなかったメリアは大いに驚く。

そして同時に、いくら驚いたとはいえ側妃の一人に対して無礼な口の利き方をしてしまった事にも気づく。それも当人の弟と名乗る少年の目の前で。

「も、ももも申し訳ありませんでしたっ!!　側妃様に対して無礼な口を――」

「いえ、お気になさらず。姉はじっとしていられない質でして。きっと根っからの貧乏性なんでしょうね。ところで、中に入ってもよろしいですか？」

メリアがミフィシーリアに入室の許可を取り、ジークントと名乗った宮殿医師の少年を部屋に招き入れた。

ジークントは黒い鞄を持ったままソファに座るミフィシーリアの前まで来ると、そこで再び低頭する。

「改めまして、ミフィシーリア・アマロー様ですね？　僕はジークント・カーリオン。宮殿医師の見習いです。本日はミフィシーリア様のお身体の様子を診察させていただくために参上致しました」

「こちらこそよろしくお願いします。ジークント様は今、ご自分が宮殿医師の見習いと仰しゃられましたが……」

「ええ。実は本日こちらへは、僕の師匠に当たる宮殿医師のシバシィ先生が来る予定だったのです。ですが、先生が急に持病のぎっくり腰を起こしてしまいまして。それで急遽、僕がこちらに伺うように仰せつかりました。先生に比べたらまだまだ未熟者ですが、何とぞよろしくお願い致します」

なるほど、どうりで若いわけだ。とメリアも納得した。

そして改めて見れば、ジークントとリーナの容貌は確かに似通った部分があった。

そうしてメリアがジークントを観察している間に、彼は鞄から様々な器具を取り出して診察の準備をしている。

「では、診察を始めさせていただきます。診察のためミフィシーリア様のお身体に触れさせていただきますが、ご了承願います。それから、少し立ち入った質問もさせていただくと思います。それも診察に必要な事ですから、正直にお答えください」

「ええ、承知しました」

「それでは、失礼致します」

そう答えるとジークントはまず、ミフィシーリアの脈を確かめるために彼女の細く白い腕を手に取った。

騎士たちが使う馬を繋いでおく厩舎。その厩舎の近くを、一人の小柄な少女がうろうろとしていた。

時に厩舎の周囲の草むらにしゃがみ込んで顔を突っ込み、ぶつぶつと呟きながら再び立ち上がると、また厩舎の周囲をうろうろと歩き回り、別の草むらをごそごそと掻き分ける。

少女の身なりは動き易さを重視した、不必要な装飾を省いた簡素なもの。しかし、その服に使われている生地は、そこらの町娘が着るようなものとは明らかに違う上質なものであった。

十五、六歳と思しき小柄な少女。明るい茶色の髪を長く伸ばし、大きな二つの黒瞳はどこか不安げに揺れていた。

そんな少女を、厩舎に馬の様子を見に来た二人の下級兵士が偶然見とがめた。

明らかに行動不審な少女に、誰何の声をかけたのは兵士としては当然の行為だろう。

「おい、そこのおまえ！　こんなところで何をしている！？」
「うきゃあぁっ！！」

突然背後から声をかけられ、驚いた少女は素っ頓狂な声を上げて文字通り飛び上がる。
ぴょーんと飛び上がった少女は、着地すると同時に振り返る事もなく脱兎の如く走り出す。

「こら待て！　いきなり逃げるとは怪しい奴め！」

当然、彼女を見とがめた兵士たちも、ひょっとすると不審者かも知れないと思い、その少女の後を追って走り出した。
だがそこは小柄な少女と鍛えられた兵士。兵士たちは先行する少女にあっという間に追いつき、その肩を捕まえて立ち止まらせる。

「ご、ごごごごごめんなさいっ！！　ぼ、ぼぼぼぼボク、別に怪しい者じゃありませんっ！！」

少女は立ち止まり、兵士たちに振り返ると、そのまま何度もぺこぺこと頭を下げる。
そんな少女に、兵士たちは更に不信感を募らせた。

「何を言う。怪しい者じゃないなら、どうして逃げ出したんだ？」
「そうだ。取り敢えず、兵士の詰め所まで来て貰おうか」
「えええぇぇぇっ！？　ぼ、ボク、連行されちゃうのっ！？」

少女は下げていた頭を上げ、涙を浮かべたうるうるとした大きな瞳で兵士たちを見上げる。
そんな少女を見て、嗜虐心を刺激された兵士の一人が、下卑た笑

いを浮かべる。

「そうとも。詰め所へ連行して詳しく話を聞かせて貰おうか。万が一、下手に隠しだてするようなら……へへへ」

兵士の視線が少女の身体を舐めるように見回す。この少女が小柄で幼い容姿ながらも実にめりはりの効いたボディラインをしているのが、兵士たちは着衣の上からでも容易に想像できた。

少女の肢体を想像しながら下品な笑みを隠そうともしない兵士たちは、相変わらず涙ぐんだ少女の腕を引っ張りながら詰め所へと足を向ける。

だが厩舎まで戻ってきた時、厩舎に繋がれた馬を出そうとした一人の騎士と出くわした。当然騎士は兵士に連れられた少女に興味を示す。

「おい、おまえたち。その少女は何者だ？」

「あ、はい、この女は先程この辺りでうろうろしていた不審者です。これから詰め所まで連れて行って、詳しい話を聞こうかと思いまして」

自分たちよりも身分が高い騎士に質問され、兵士たちは姿勢を正して答えた。

「ふむ、不審者だと……？」

騎士の視線が少女へと向けられる。そして次の瞬間、騎士の顔から表情というものが抜け落ちた。

騎士の態度に兵士たちは不思議そうに互いに顔を見合わせる。だが彼らもまた、騎士が呟いた言葉を聞いた途端、この騎士と同じような態度となる。

「あ……アーシア様……」

兵士たちもその名前には聞き覚えがあった。いや、この王宮に勤める者で、その名前を知らない者はいないと言っていいだろう。兵士たちの顔色が見る見る青ざめる。

アーシア・ミナセル。

国王の従兄妹にして第一側妃。そして最も正妃に近いと言われる女性。

『癒し姫』とも呼ばれる彼女を、聖女の如く扱う者はこの王宮には数多い。目の前の騎士もまた、そんな者の一人であった。

騎士は兵士たちがいまだにアーシアの手を掴んだままなのに気づくと、無言で彼らの頬に拳を叩き込んだ。

「うきゃっ！！」

突然の騎士の行為に悲鳴を上げるアーシア。

地面で頬を押さえてのたうつ兵士たちを一切無視して、騎士はその場に跪いて低頭した。

「申し訳ありません、アーシア様！　この者たちが大変失礼な真似を致しました！」

「あう……うぅ……？」

足元で悶える兵士たちと平身低頭する騎士に、アーシアはきょろきょろするばかり。そんなアーシアを置いてきぼりに、騎士は更に言葉を続けた。

「この者たちは厳罰に処します。覚悟はいいな、おまえたち！」

騎士は厳しい視線でいまだに立ち上がれない兵士たちを睨みつける。

「ちょ、ちょっと待ってっ！！」

厳罰という言葉に、アーシアは慌てて倒れている兵士たちに駆け寄った。

「びっくりして思わず逃げちゃったボクが悪いんだ。この人たちは悪くないんだよ。許してあげてくれないかな？」

「はぁ……アーシア様がそう仰しゃるのなら……」

騎士の許しを得てアーシアは安堵の溜め息を吐くと、倒れたまま自分を見上げている兵士たちの傍らにしゃがみ込んだ。

「ごめんね。ボクのせいで痛い思いをさせて……すぐに癒(なお)すからね」

アーシアは兵士の赤く腫れ上がった頬に片手を翳す。その手に金色の淡い輝きが宿り、輝きは兵士の腫れた頬に染み込むように消えていく。

「い、痛みが……」

嘘のように消えた痛みに、呆然と呟く兵士にアーシアは優しく微笑みかけ、もう一人の兵士にも同じように『癒し』を施した。

そして『癒し』を施された二人の兵士は、慌てて立ち上がると直立不動でアーシアに敬礼を捧げた。

「あ、ありがとうございましたっ！！　このご恩は一生忘れませんっ！！」

「我が命は今日この時より、アーシア様に捧げますっ！！」

アーシアに癒された二人の兵士の目には、先程のような下卑たものは微塵も見られない。

二人の彼女に対する先程の行為は、下手をすると斬首にも相当しかねない重罪だ。

それを他ならぬアーシア本人によって救われた二人の瞳には、アーシアに対する信奉のようなものが明らかに現われている。どうやらまたここに彼女の信者が誕生したようだった。

「ところでアーシア様。このようなところで、共の者も連れずに何をなさっておいでなのですか？」

騎士の質問に、アーシアはあからさまに眼を泳がせた。

「あ、うん、その、えっと……ね？　ちょっと探し物をしていたんだけど……」

「探し物……でございますか？　一体何をお探しに？　我らでよろしければお手伝いいたしますが？」

騎士の言葉に、背後に立つ二人の兵士もしきりに頷く。

「あのね……ボ、ボクが探しているのは……」

アーシアが告げた『探し物』に、騎士と兵士たちはぽかんとした顔になった。

「あ、あの、アーシア様？　失礼ですが、それを探して一体どうなさるので？」

「う、うん、その……あ、あのね、シ……じゃない、へ、陛下に探

すように言われたんだよ」
「国王陛下に……でございますか？」
あからさまに不思議そうな顔の騎士。二人の兵士も顔にこそ出さないものの、きっと騎士と同じ気持ちだろうとアーシアは思う。
自分だって『あれ』を探していると聞かされれば、きっと彼らと同じような顔をするだろうから。
それでも騎士は、彼女の手伝いを承知してくれた。尤も、実際には背後に控えていた兵士たちに探すように命じただけだったが。
そしてしばらくすると、二人の兵士はアーシアの『探し物』を見つけ出してきた。
彼らはそれをアーシアが持参した箱に入れる。その間、アーシアは顔を背けて『探し物』を極力見ないようにしていた。
兵士に『探し物』の入った箱を指し出されるアーシア。だが彼女は顔を顰めておっかなびっくり手を出してはひっ込めを繰り返す。
「あ、あのー、よろしければ、このまま我々でお運び致しますが……」
「ほ、本当っ！？　あ、ありがとうっ！！」
いい加減焦れた兵士が告げた言葉に、アーシアは花のような笑顔で応えた。
その笑顔に思わず見蕩れた兵士たち。だがすぐに我に返ると、アーシアに『探し物』をどこまで運べばいいのかを尋ねた。
「うん、悪いけど後宮第六の間……第五側妃のミフィシーリアさんのところまで運んで欲しいんだ」

０５ー癒し姫（後書き）

『辺境令嬢』更新。

今回は以前からちょくちょく名前の出ていた『癒し姫』が本格登場。

しばらくは主要人物の登場と紹介を含めた話が続くので、ヒロインの影が薄くて仕様がない。主要人物が本格的に出揃うまで、もうしばらくこんな調子になるかと。

今後も気長にお付き合いいただきますよう、お願いいたします。

06－ユイシークの思惑

「宰相閣下と宰相補殿がお見えです」

国王の執務室の外で警備に当たっていた近衛兵が来客を告げた。

それを聞いたリーナは、部屋の主に相談する事もなく勝手に扉を空ける許可を出す。

近衛兵が開けた扉を潜り入室して来たのは、この国の宰相であるガーイルド・クラークス侯爵と、彼の補佐役であるケイル・クーゼルガン伯爵であった。

カノルドス王国宰相・ガーイルド・クラークス侯爵。

『解放戦争』以前は辺境伯でしかなったが、ユイシークと共に『解放戦争』を勝ち抜き、今では御三家の一角としてこの国の中枢を担う人物である。

四十も半ばを越した中年男性だが、その上背のあるがっしりとした身体つきと厳つい容貌は、どう見ても文官ではなく武官に見える。

事実、彼はユイシークたちと一緒に戦場を駆け抜けてきた武人でもあるのだ。

だが、同時に政治家としても卓越した手腕を持ち、現在はこの国の政治を取り仕切っている。

本人曰く、文官よりも武官としてありたいのだが、他に人材がいないので仕方なく宰相をやっているとの事。

だが現在、彼の下にはケイルやリーナという優れた人材が育ちつつあり、数年もすると彼らに政治を任せて軍の方に移るのではないか、という噂もある。

そして彼らが入室した時、この部屋の主にして国王であるユイシーク・アーザミルド・カノルドス1世は、執務用の机の前で――――

――――完璧にだれていた。

「……もう嫌だぁ……仕事したくないぃ……王様なんてなるんじゃなかったぁ……」

死んだ魚のような瞳でぶちぶちと文句を言いつつも、それでも手だけは動いているのは感心するべきか、呆れるべきか。

ユイシークは今、ミフィシーリアのお披露目に招く招待客への案内状に、彼の直筆のサインを入れていた。

招待状といってもその数は膨大で、王都に住む貴族のみならず、自領にいる貴族や隣国にまでその招待状は届けられる。

そしてサインが入れられた招待状は王家の紋章の透かしを入れた封筒に入れられ、リーナがその封筒を丁寧に封蝋していく。

リーナは封蝋の傍ら、宥めたりすかしたりあの手この手を駆使して、招待状のあまりの多さに完全にだれたユイシークに何とかサインを入れさせていた。

こんな芸当ができるのは王宮でもリーナのみと言われており、これができるからこそ彼女はユイシークの側役として認められ、一度は奴隷に落とされたものの、今では側妃の一人としてまで登り詰めたのだ。

「相変わらず苦労しとるな、リーナ……」

「……いつもの事です。ガーイルド様」

ユイシークの執務机の横に置かれた机で彼の仕事の補佐をしていたリーナは、ガーイルドから呆れと憐れみの混じり合った視線を向けられて、いつものように溜め息を零した。

「おぉぅ、ガーイルドのおっさんじゃないか。なあ、おっさん。王様代わってくれ。今日からはおっさんが王様でいいだろ？」

「馬鹿者。儂に王が務まるようなら、最初から貴様を担ぎ上げたり

はせんわ」
「じゃあ、ケイルでいいや。おまえ、今日から王様な」
「断わる。今の仕事でも大変だというのに、それ以上に大変な国王なんてやっていられるか」

もしここでガーイルドなりケイルなりが首を縦に振ろうものなら、ユイシークは本気で王位を譲るだろう。それが判っているからこそ、二人は決して首を縦には振らない。

そんなユイシークたちの遣り取りを聞きながら、リーナは思わず苦笑する。

世の貴族の中には、何とかして権力を得ようとしている連中が数多くいるというのに、今この場では権力の最高峰ともいうべき国王の座をお互いになすりつけようとしている。

もし、そんな連中がこの遣り取りを目にしたら、一体どう思うだろうか。

一度本当にこの場を権力を欲しがる貴族連中に見せてやろうかしら、と考えながら、リーナはガーイルドたちの来訪の目的を尋ねた。

「うむ。貴様が新しい側妃を迎えたという話を聞き付けた貴族どもが、早速売り込みをかけてきおったわ」

ガーイルドがちらりと傍らのケイルを見やると、ケイルは手にしていた書類をユイシーク……ではなく、リーナに手渡した。ユイシークに直接渡すと、他の書類に紛れて紛失しかねない、という長年の付き合いから来る行為だ。

それを承知しているリーナは、何も言わずに置かれた書類を手に取り、ぱらぱらとその中に眼を通す。

「新たに側妃となる事を希望している令嬢たちの一覧……ですか」
「やれやれ……どこもかしこも馬鹿ばっかりか。一人側妃を増やし

たからといって、続けて三人も四人も増やすとでも思っているのか？」

「思っておるのだろうな。連中も何とか貴様に取り入ろうと必死なのだろうよ」

「確かに馬鹿ばかりだな」

男性陣三人がそんな遣り取りをしている間、一覧に目を通していたリーナはある事に気づいた。

「……何か見覚えのある名前が幾つか一覧に載っていますけど……これって本気なのでしょうか？」

目録から目を上げたリーナが、不審そうな顔でガーイルドを見上げた。

「無論、本気なのであろうよ」

「信じられないわね……」

二人の会話に興味を引かれたユイシークは、リーナから一覧を受け取り目を通す。

「何だこりゃ？　以前に後宮から追い出された奴の名前が幾つもあるぞ？」

「ね？　正気を疑うでしょう？」

目録には十数人の貴族令嬢の名前が連ねてあったが、その中にかつて側妃として後宮に上がり、国王の寵愛を一度も受けることなく追い出された者の名前が幾つか載っていた。

「貴様が無名の辺境貴族の娘を後宮入りさせた事で、連中は貴様が

今の側妃殿たちに飽きでもしたと考えたのだろうよ」
「だからって、一度追い出された奴を、また後宮入りさせようとするか？」
「先程貴様も言っただろう。連中は間違いなく馬鹿なのだろうさ」
「こんな権力を得ることしか頭にないような奴の娘を後宮入りさせる必要はない。これは国王としての命令だ」

国王の命令。ユイシークがそう認めた途端、それまではとても一国の王に対する態度とは思えなかったガーイルドたちが、一斉に背筋を伸ばして低頭し「御意」と返答する。
私人から公人へ。彼らの意識は一瞬で切り替わる。この切り替えができないようでは、ユイシークの側近は務まらない。

「して、陛下。一つお聞きしてもよろしいか？」

公人として、国王を補佐する宰相としての立場で、ガーイルドはユイシークに質問する。

「何故陛下は今回、アマロー男爵の娘を後宮入りさせる決意をなされたか？」

ガーイルドのこの問いに、ユイシークは執務机の椅子に座り直し、腕を組みながら眼を閉じた。
そして、しばらくの間そうしていたユイシークが再び眼を開いた時、この国の将来を左右しかねない発言が飛び出した。

「俺はアマロー男爵の娘を……ミフィシーリア・アマローを正妃に迎えようと考えている」

ジークントの診察が終わり、彼が退室したところでミフィシーリアはふうと疲れを吐き出すように大きく息をした。
診察を受けながら、ミフィシーリアは改めてジークントを観察した。
確かに彼はリーナとは姉弟のようで、面影やちょっとした仕草などが良く似ていた。
特に髪の色はリーナそっくりの亜麻色。年齢はリーナより三つ下でミフィシーリアよりは一つ年下の１５歳だとか。
幼さが残るものの、その面差しは姉同様整っており、後数年もすればきっと周りの女性から注目されるようになるだろう。
彼自身見習いと言っていたように、まだまだ診察にも慣れていないようで、真っ赤になりながらミフィシーリアの身体に触れていた。
特に女性の月のものの周期について聞いた時など、見ているのが気の毒になるほど赤くなっていた。
ミフィシーリアとて子を成すのに月のものが密接に関連してくるのは知っていたので、彼女もまた真っ赤になりながら正直に答えた。
端から見ていたメリアなど、二人のどこか初々しい姿に思わず笑みを浮かべた程だ。
そしてジークントが診察を終えたのは、既に空が茜に染まり始める頃合いだった。

「お嬢様、夕飯はどうしますか？　そろそろ取りに行って来ましょうか？」

リーナにこの第六の間まで案内された時、彼女に夕飯はどうするか尋ねられた。
彼女が言うには、この部屋で食べてもいいし、食堂へ出向いてもいいらしい。
さすがに初日という事もあり、ミフィシーリアはこの部屋で食事をする方を選んだ。

これからどれだけこの部屋で暮らす事になるのかは不明だが、当分はこの部屋で暮らすのは間違いない。早くこの部屋に馴染むためにも、初日である今日はこの部屋で食事がしたかったのだ。

ミフィシーリアがリーナにそう告げると、彼女は微笑んでそれを了承してくれた。但し、食事そのものはメリアが厨房からここまで運ばなければならないと付け加えて。

それゆえのメリアの問いに、ミフィシーリアは少しだけ考えを巡らせる。

「そうね……食事はもう少し後でもいいわ。取り敢えずお茶が飲みたい気分ね」

これに応じたメリアがお茶の準備をしようとした時、誰かが部屋の扉を叩き来客がある事を知らせた。

「本気か、シーク？」

驚いた顔のケイルがそう尋ねるまで、どれだけの時間がかかっただろうか。

それ程、先程ユイシークが口にした言葉は衝撃的だった。

「――あの娘のどこにそんなに惹かれたの？」

震える声でリーナが尋ねる。

彼女も側妃の一人である以上、それは仕方のない事だろう。

彼女とてユイシークの隣に立つ事を夢見ぬわけではない。もちろん、それは正妃として権力を得たいとかではなく、一人の女として愛する男の隣に立ちたいという願望からだ。

だが、その一方で自分が正妃になるのは極めて難しい事も理解し

ていた。
　只でさえ平民出身の彼女である。更には奴隷にまで落ちた経験もある。例えそれがユイシーク本人に落とされたとしても、隣国に対する対外的な面などを考えてまず有り得ないだろう。
　それでもやはり、ユイシーク本人から他の者を正妃に迎えると言われた衝撃は隠しきれなかった。
　そしてそれを理解しているユイシークは、普段からは考えられないような優しげな笑みを浮かべてリーナを見た。

「別にあいつに惹かれたわけでも、惚れたわけでもないさ。確かに興味はあるがな」
「ならば、なぜあの娘なのだ？　こう言ってはなんだが、アマロー家は貴様の後ろ楯とするには明らかに役不足だぞ？」

　正妃に求められるもの。その一つに王権の磐石化が上げられる。力のある家柄の娘を正妃に迎えれば、その家が後ろ楯となり自身の王としての立場を固める事ができる。
　それ故、正妃には家柄が求められるのだ。
　だがアマロー家は下級貴族であり、とてもではないが後ろ楯とは成り得ない。
　だからユイシークがミフィシーリアを選ぶ以上、家柄ではなくミフィシーリア個人を気に入ったからとガーイルドたちは考えたのだ。
　しかし、ユイシークはミフィシーリア個人を気に入ったわけではないと言う。ガーイルドが疑問に思うのも当然と言えるだろう。

「あいつ……ミフィシーリアやアマロー家は権力向上の願望が低い。それがミフィシーリアを正妃に迎える最大の理由だ。おまえたちだって、どうして以前のカノルドス王国が腐り果てたか忘れたわけじゃあるまい？」

この言葉で、ガーイルドはユイシークの考えている事を正確に理解した。

『解放戦争』以前のこの国があそこまで腐り果てたのは、王権の弱まりと貴族の権力の増大だとガーイルドは考えていた。

国の中心たる王の力が弱まったことで、周囲の貴族たちは歯止めが効かなくなった。

本来絶対者であるべき王の言葉を聞こうともせず、自分たちの都合のいい事ばかりを行った。それは自領だけではなく、この王都においてもだ。

そのため貴族たちの横行は増大し、国の屋台骨までをも弱らせてしまった。

その二の舞を踏まないため、ユイシークは敢えて力の弱い家柄から正妃を迎えようとしているのだ。

力のある家柄から正妃を迎えるという事は、王家の力を強めると同時に、正妃を送り出した家の力を強めるという事でもあるのだから。

今のカノルドス王国で最も力の強い家柄は言わずと知れた御三家である。そしてその三家からは、一人ずつ令嬢が側妃として後宮に入っている。

「まあ、そういうわけだから、おっさんトコやカークライト家、それにアミィさんトコから正妃を迎えるつもりはないんだ」

「ならば、リーナを正妃に迎えればいいだろう？　何もアマローの令嬢を正妃に迎える必要もあるまい」

ケイルの言葉にユイシークは苦笑を浮かべる。

確かにリーナを養女として迎え入れたカーリオン伯爵家は、ミナセル公爵家の外戚に当たるものの、さほど権力の強い家柄ではない。

というより、その程度の家柄だったからこそ、一度は奴隷に落とされたリーナを快く養女として迎え入れてくれたのだが。

「おまえだってそれが難しい事は承知しているだろうに。俺個人としてならリィを正妃として迎えても一向に構わないんだが――」

ちらり、とユイシークはリーナを流し見る。途端、リーナの普段は白い美貌が真っ赤に染まる。

「ちぇ、こんな事ならリィを奴隷になんか落とすんじゃなかったぜ」

そうしたらこんなに悩まなくても済んだのに、とユイシークはリーナを見やり、リーナはあまりの気恥ずかしさに更に真っ赤に染まって顔を背けた。

「ならば、アマローの娘を正妃として迎える方向で今後は動くか？」
「できればそうしたいところだが……問題はあの人がどう動くか……だな」

ガーイルドの言葉にそう答えたユイシーク。同時にこの場にいる者たちの脳裏に一人の人物が浮び上がる。

彼らが『後宮管理人』と呼んでいる、後宮の実質的な支配者であるその人物を。

０６－ユイシークの思惑（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

ここにやって来てくださる皆様のお陰をもちまして、この『辺境令嬢』の総合ＰＶが７０，０００を超え、総合ユニークも１２，０００を超えました。

このサイト全体から見れば、まだまだ低い数値ではありますが、自分のような底辺を流離う物書きにとって、この数値は喜び以外のなにものでもありません。

他にもお気に入り登録や、評価ポイントの投下、お気に入りユーザ登録など、様々な形の支援をいただいております。中には貴重な感想を寄せていただいた方もいらっしゃいます。

様々な支援を頂いた方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

今後も同様に見守っていただけると幸いです。

よろしくお願いします。

０７ バッタと料理長

開かれた扉の向こうには一人の少女。そして、その少女の背後には兵士らしき二人の男性が控えていた。

来訪の際に告げられた名前を信じるならば、共の者が兵士二人とは少々少ないと思わないでもないが、側妃の一人であるリーナなどは一人も共の者を連れていなかったのだから、この後宮では側妃といえどもあまり共の者を連れて歩いたりはしないのかもしれない。

後宮に入って一日も経っていないメリアは、そんな事を考えながらその少女一行を部屋に招き入れた。

部屋の主であるミフィシーリアも、様々な噂を持つ少女との急な対面に、戸惑いを覚えながらも笑みを浮かべて挨拶を交わす。

「初めてお目通り致します、アーシア様。本日この後宮に入りましたミフィシーリア・アマローです。本来なら新参者である私の方からご挨拶に伺わねばならないところ、わざわざお越し下さり申し訳ありません」

「う、ううん、こ、こちらこそ！　ボク、アーシア・ミセナルです。は、初めましてっ！！」

低頭しながら口上を述べるミフィシーリアに、少女もまた慌ててぺこりと頭を下げた。

ミフィシーリアは目の前に佇む『癒し姫』アーシア・ミナセルを、無礼にならないように注意しながら見てみる。

国王であるユイシークと同い年と聞いているから、目の前の少女は自分よりも二歳年上の１８歳のはず。だが、小柄で童顔な少女の外見は、良くて自分と同い年か、下手すると自分よりも幼く見える。

だが、飾り気は少ないが上質そうな衣服に包まれた肢体は、自分などよりも余程成熟した大人のそれだった。
美しい明るい茶色の髪を腰ほどまで伸ばし、大きな黒瞳は宝石のように輝いている。
白い、というよりはやや色素の濃い肌は、この少女の健康そうな魅力を一層引き立てていた。
そして桜色の可憐な唇からは、どこかたどたどしい言葉が漏れ響く。

「えっ……と、そ、その……ミフィシーリア……さん……じゃないや、ミフィシーリア様……？」

ふらふらと視線の定まらないアーシア。彼女の瞳はミフィシーリアと背後に控えた兵士が持っている小さな箱との間を行き来する。

「あ、あのね、ぼ、ボク、ミフィシーリア様に贈り物を持って来たんだ……けど……」

意を決したように告げたアーシアが背後の兵士を見る。それに合わせて箱を持った兵士が数歩前に出て、持っていた箱をメリアに手渡した。

「わざわざありがとうございますアーシア様。開けてみてもよろしいですか？」
「え……っ！？　あ、あああああ、開けちゃうのっ！？　い、いいい、いいよっ！！　ど、どうぞ……っ！！」

そう言ったアーシアは、くるりとミフィシーリアたちに背を向けると、ぎゅっと目を瞑り両手で耳を押さえ、その場にしゃがみ込む。
アーシアの態度に思わず顔を見合わせるミフィシーリアとメリア。

アーシアに付き従って来た二人の兵士も互いに顔を見合わせて苦笑している。

開ける事に嫌な予感しかしないミフィシーリアとメリア。それでも開けると言った以上、開けないわけにはいかず、メリアは一息呼吸すると意を決して箱の蓋を開けた。

途端、箱の中から緑色の何かがぴょんと飛び出し、ぴとっとメリアの顔に張り付いた。

「うきゃあああああああああっっっ！！」

堪らず悲鳴を上げ、メリアは慌てて顔を手で払う。

その調子にメリアの顔に張り付いたものは、彼女の顔を足場に更にぴょーんと飛び跳ねてぽとんと着地した。

「へ？」

「あ！」

「え？」

――アーシアの頭の上に。

「にゃ、にゃみゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

アーシアの頭の上に降り立ったそれ――緑色の１５センチ以上はある巨大なバッタ――は、足元から急に発せられた奇声に驚き、更に跳躍する。

「みゃあああああああっ！！　ぼ、ボク、虫大っ嫌いなんだよおおおおおおっ！！　だ、誰か早く捕まえてえええええぇぇぇぇっ！！」

結局、その大騒ぎを納めたのはミフィシーリアだった。
メリアに加えて二人の兵士も右往左往しながらバッタを捕まえようとするも、巨大バッタは持ち前の跳躍力を活かして第六の間の中を逃げ回った。
やがてバッタも疲れたのか、窓のカーテンにしがみついたところをミフィシーリアが捕獲し、そのままバッタを窓の外に逃がしてやった。
バッタがいなくなってようやく落ち着いた一行。そんな中、アーシアがミフィシーリアを見る目が明かに変わっていた。
まるで偉大な人物を見るかのような、尊敬の念が篭もった眼差しに。

「す……凄いね、ミフィシーリアさん！　あんな大きなバッタを手で捕まえて、そのままぽっと外に捨てちゃうなんて！」
「ええ、私、弟がいるものですから。小さな時はよく、弟と一緒に原っぱで虫取りをしてましたもので」

アーシアがミフィシーリアを見る眼に、更にきらきらとした輝きが宿る。

「ところで、アーシア様。一つ伺ってもよろしいでしょうか？」
「あ、ボクの事はアーシィって呼んでよ！　仲のいい人たちはみんなそう呼ぶんだ。だからミフィシーリアさんにもそう呼んで欲しいな」
「い、いいえ、とんでもない！　私ごときがアーシア様をそのように呼ぶなど……」
「えー、ボクは全然気にしないのに……」

不満そうに口を尖らせるアーシアと、そんなアーシアの態度に苦

笑するしかないフィシーリア。
メリアと二人の兵士が散らかった第六の間を何とか片づけ、アーシアとミフィシーリアは改めてソファに腰を下ろす。

「それで、ボクに聞きたい事ってなに？」
「その……ですね？　どうして虫が苦手なのに、わざわざ捕まえてまで私のところに？」

その質問をされた瞬間、それまで笑顔だったアーシアの顔色がさっと青ざめた。
先ほどのバッタを思い出したのか、それともミフィシーリアに対する罪悪感がそうさせるのか。
あーとか、うーとか唸り、きょろきょろと周囲に視線を泳がせつつも、覚悟を決めたのかぽつりぽつりとアーシアは語る。

「あ、あのね……実は……シィくんに言われたんだよ……」
「シィくん……？」
「あ、シィくんっていうのはユイシークくんの事でね……」
「……つまり、これは国王陛下がらみの悪戯だったわけですね……」

疲れたように呟くミフィシーリアをよそに、アーシアの『懺悔』は続く。

「……シィくんがボクに言ったんだよ。後宮に後から入ってくる人に、先輩は意地悪しなきゃいけないって……それが後宮の決まり事だからって……。それでね、ボク、どんな意地悪したらいいのか判らなくって、シィくんに聞いてみたんだ。そしたら、シィくんが『自分がやられたら嫌な事をしてみろ』って……だから……」
「……それでご自分が嫌いな虫を私のところに持って来たというわけですか……」

「うん……ご、ごめんね、ミフィシーリアさん……」

大きな瞳にうっすらと涙を浮かべ、下から見上げるように謝るアーシアに、ミフィシーリアは顔を上げるように告げる。

「気にしないでください、アーシア様。幸い……というと語弊がありますが、この手の悪戯には私、実は慣れっこなんですよ？」

「え？」

「先程、弟がいると申しましたでしょう？　その弟からこういう悪戯はよくされましたから」

朝、目覚めると枕元に大量の団子虫が蠢いていたり、服の仲に黄金虫を入れられたり。やんちゃな弟は、よく自分にそんな悪戯をしでかしたものだった。

その時は悲鳴を上げて泣きながら走り回ったりしたが、今となっては懐かしい思い出に昇華されていた。

「ですから気にしないでくださいね？」

「うん！　ありがとう！」

「それにリーナ様も仰ってましたよ？　陛下の言う事はいちいち真面目に聞く必要はない。適当に聞き流せと」

「うん、ボクもよくリィに言われるよ。でも、シィくんが言うことだと、ついつい信じちゃうんだ」

アーシアは、真っ赤に染まった顔を伏せながら告げた。

そう告げた時のアーシアの顔は、ミフィシーリアから見てもとても幸せそうなもので、アーシアがユイシークに対してどういう気持ちを抱えているのかがとてもよく伝わってきた。

リーナにアーシア。それにまだ見ぬ二人の側妃たちも、きっと心

の底からユイシークに想いを寄せているのだろう。
そして、彼女たちにそんな想いを抱かせるユイシーク。彼とはまだ真面な会話も交わしていないが、それでもユイシークに対する興味が、ミフィシーリアの中でどんどんと大きくなっている事に彼女は気づいていた。

その後、しばらくとりとめのない会話を交わして、アーシアは二人の兵士を従えて第六の間を後にした。
その際、次はボクの第二の間に遊びに来てね、と言い置いて。
そして現在、メリアは後宮の慣れない廊下を歩いているところだった。
アーシアが去った時、外はすっかり暗くなっていた。そこでメリアは慌ててミフィシーリアの夕食を厨房まで取りに行くために第六の間を飛び出したのだ。
メリアは慣れない後宮の廊下を、途中何度も道に迷いながら歩く。
後宮初日のメリアが無事にここまで来れたのは、ひとえに親切な侍女や使用人たちのおかげであった。
中には自分が今日後宮入りしたミフィシーリアの侍女であると知ると、あからさまに顔を顰める侍女たちもいたが、殆どの者がメリアに親切に接してくれた。
新参者はもっと冷たく扱われると思っていたメリアは、アーシアやリーナといった人当りの良い側妃たちといい、親切な使用人たちといい、ちょっと拍子抜けした思いだった

「――それでも、まだ第一仮想敵の側妃様に出会ってないものね。油断大敵、気を抜いちゃだめよ！」

メリアが目下第一の仮想敵として秘かに認定しているのは、第二

側妃であるサリナ・クラークス。
かつてこの後宮にいた多くの側妃を追い出したというサリナ。実際にはどんな人物かは不明だが、その逸話から考えるにミフィシーリアに親しく接してくるとはちょっと考えづらい。
だからメリアは自分に言い聞かせる。弱みを見せて相手につけ込む隙を与えないように、と。
そうやって内心で気合いを入れている間に、メリアは厨房に辿り着く。
扉をノックして来訪の目的を告げると、中から若い女性の声で入室の許可が与えられた。

（今の声……ずいぶん若い女の人の声みたいだったけど……厨房で働く料理人かしら？）

そう考えながら改めてドアを開けると、目の前に若い女性が待っていた。
長く艶やかな明るい茶色の紙を、背中で大きく三つ編みにしたその女性。身につけているものは厨房で働く他の者と一緒の仕事着だ。
そして涼しげな暗青（ダークブルー）の瞳がにこやかな笑みに揺れていた。

「え、えっと、ミフィシーリア様付きの侍女でメリアといいます。ミフィシーリア様のお夕食を取りに伺いました」
「ええ、お話は聞いていますよ。準備してありますから、どうぞお持ちください」

その女性が背後に目配せすると、厨房で働く料理人の一人が料理を載せたワゴンを押してきた。
ワゴンに積まれているものを確認した女性は、改めてメリアに向き直りぺこりと頭を下げる。

「申し後れました。私はここの管理をしておりますアミリシアと申します。これからもよろしくお願いしますね」
「あ、管理ってことは料理長さんって事ですか？　ずいぶんお若いのに料理長を勤めるなんて、アミリシアさんは優秀な料理人なんですね」
「いえ、優秀だなんてとんでもない。私はただ好きでやっているだけですよ」

にっこりと微笑む女性。その女性の年齢は二十代後半程に見える。どう多めに見ても、三十の半ばを越えることはないとメリアには思えた。
あの若さで後宮の料理長なんて、きっとものすごい料理人なんだろうなあ、と思いつつメリアは食事を載せたワゴンを押して厨房を後にする。
そして、第六の間へと帰る途中、ふと彼女はある事に思い至った。

「……さっきの料理長さん……どこかで会ったような気がするなぁ……。どこだっけ？」

メリアが厨房から持ってきた夕食を食べたミフィシーリアは、その料理のあまりの美味さにとても驚いた。
それはメリアも同様で、アミリシアがあの若さで料理長を勤めているのが納得できる美味さだった。

「こんな美味しい料理、食べたことないわ……」
「本当……美味しいですねえ。これだけでも、はるばる王都まで来たかいがあったってものですね」
「もう、メリアったら」

実家では自らも時々料理をしていたミフィシーリアは、とてもではないが自分ではこれだけ美味い料理を作る自信がない。

メリアもあまりの美味しさにひたすら料理を食べている。

本来、側妃と侍女が同じテーブルで食事をする事はない。だが、これまで姉妹同様に育ってきたミフィシーリアは、メリアと一緒のテーブルで食事することに何の抵抗もなかった。

そして、まるでそれを見越したかのように、食事の積まれたワゴンにはミフィシーリアの分だけではなく、メリアの分まで用意されていたのだ。

そして食事が済むと、メリアは使った食器などをワゴンに載せ、再び厨房へ向かう。

残念な事にアミリシアは不在だったが、厨房のいた料理人にとても美味しい夕食だったと彼女への伝言を頼み、先程食事を載せたワゴンに今度は湯の入った桶を幾つも載せて、メリアは来た道を再び戻る。

もちろん、湯は入浴の際に使用するものだ。

第六の間には浴室があったが、それは石張りの部屋にバスタブが置かれただけのもので、昨夜客室で見たようなきちんとした湯船のあるものではなかった。

昼にリーナが側妃専用の大浴場があると言っていたので、きちんとした浴室はそちらなのだろう。

だが、今日は後宮入り初日ということもあって、ミフィシーリアは自室での入浴を望んだ。

そのために、厨房で沸かしてもらった湯をこうしてメリアが運んでいるといるのだった。

メリアが持ち帰った湯をバスタブに張り、さっそくミフィシーリアは入浴する。

本来、貴族の令嬢なら入浴中も侍女に様々な世話をやいてもらうのだろうが、実家では一人で入浴していたミフィシーリアである。

メリアの手を借りることなく入浴を慣れた様子で済ませる。

ミフィシーリアが入浴している間に、メリアも使用人用の浴場へ出向いて入浴を済ませた。
そして、長かった後宮初日が終わる。いや、ミフィシーリアは終わったと思い込んでいた。
だが、彼女の後宮初日はまだ終わらなかったのである。

ベッドに入った途端、ミフィシーリアは眠りに誘われた。
やはり後宮初日とあって、色々と疲れがあったのだろう。そして、後宮初日という事で油断もしていた。
夜中、何やらずしりと身体に重みがかかった事で、ミフィシーリアはぼんやりと目覚めた。
しかし、ぼんやりとした意識はすぐにはっきりと覚醒する。
なぜなら、寝ている自分の上に黒ずくめの人物がのしかかり、首筋に氷の様に冷たい短剣の刃を突きつけていたのだから。

07 ―バッタと料理長（後書き）

『辺境令嬢』更新。

最近、なんとなく不調だけど、なんとかがんばってみた。

ジャンルが「恋愛」としてあるのに、恋愛の「れ」の字も出ていない気がしなくもないけど、気長にお付き合いねがえれば、いずれは恋愛的な要素も出てくると思います。ええ、きっと。

そんなわけで、これからもよろしくお願いします。

08 ― 初めての会話

「――これは……」
「余計は事は喋るな。無駄に苦しみたくはないだろう？」

震える瞳で首筋に当てられた刃を見詰めるミフィシーリアに、覆面の男――声で男だと判明した――は、冷たい声で告げた。
ミフィシーリアの視線が、首筋の刃から男の瞳へと移動する。
そしてミフィシーリアは、男の瞳に愉快そうな笑みが浮かんでいるのを見る。
だが、その事にミフィシーリアは違和感を感じざるを得なかった。

「――何が目的です？」
「喋るなと言ったはずだが？」

男はミフィシーリアの眼を見詰めたまま、いきなり彼女の胸の片方を掴みあげた。

「きゃ――っ！！」
「ふむ……思ったより大きいな。もっと小さいかと思っていたんだが」

男が零した呟きに、ミフィシーリアは頬を赤く染める。
ひょっとして、この男の目的は自分の純潔では――
ミフィシーリアの脳裏をそんな考えが過る。
確かにここで純潔を失えば、彼女は側妃の資格を失うだろう。ミフィシーリアが後宮入りするのを面白く思わない人物が、それが目

的で目の前の男を送り込んで来たと考えれば納得がいく。
だが、それにしては男の目に浮かぶ光がミフィシーリアには気になった。
男の目に浮かぶのは確かに笑み。だが、その笑みは男が女を狙う好色な光ではなく、子供が悪戯をする時のような――
そう考えた時、ミフィシーリアの頭の中を一条の光が走り抜けた。

「――そろそろ悪戯はお終いに致しませんか？　陛下」

途端、それまでミフィシーリアの胸をやわやわと揉みあげていた男の手がぴたりと止まった。
それまで男の瞳に浮かんでいた笑みに代わり、新たに浮かび上がるのは明かに狼狽のそれ。

「やはり陛下でいらしたのですね？」
「ち、違う！　違うぞ！　俺はこの国の王のような究極のナイスガイではない！　俺は単なる通りすがりの暗殺者だ！」
「それで？　こんな時間に何用でしょうか？　へ　い　か？」

男の戯言を彼にスルーし、強調した口調で問いかけるミフィシーリアに、男は観念したかのようにはあと息を吐いた。

「おまえ、思ったより図太いな。もっと取り乱すと思ったんだが……」

男――ユイシークは、観念したのか顔を覆う覆面を外した。
露になった彼の素顔には、再び悪戯小僧のような笑みが浮かんでいた。

「もちろん驚きました。目が覚めればいきなり首筋に刃物があるの

ですから」
「その割には随分冷静のようだったが？」
「あのような場合、下手に取り乱すのは愚作ですから――と、言いたいところですが、実は怖くて動けなかっただけです」
「そうか。だったら俺の勝ちだな」
「勝ちとか負けとか何に対してですか？」

どこまでも掴み所のないユイシークに、ミフィシーリアは苦笑するしかない。
ユイシークは手にしていた短剣と覆面を纏めてベッド脇のテーブルに置くと、ベッドで身体を起こしていたミフィシーリアの隣に無遠慮に腰を下ろした。

「それで、どうして俺だと判った？」
「眼……ですね」
「眼？」
「はい。陛下の眼に浮かんでいた光が、まるで私に悪戯を仕掛ける時の弟の眼にそっくりでしたから。それにリーナ様が仰っていましたし」
「リィが？」
「はい。陛下は永遠の悪戯小僧だと。そして何かしら仕掛けてくるだろうから相手にせずに適当に流せ、と」
「くそ、リィの奴。今度ベッドの中で思いっ切りいじめてやる」

そっぽを向いて呟くユイシークに、ミフィシーリアは堪えきれずに小さな笑い声を上げた。

「お、ようやく笑ったな」
「あ……し、失礼しました」
「構わんさ。やっぱり女は澄ましているより笑っていた方が可愛い

しな」

何気ないユイシークの一言に、ミフィシーリアの心臓はなぜかどきりと一度だけ激しく鼓動した。

「それよりも、本当に暗殺者が来たとは思わなかったのか？　暗殺者とまではいかなくとも、誰かがおまえを汚そうとしたとは考えなかったのか？」

それまでの悪戯小僧のような眼ではなく、ユイシークは真摯な眼でミフィシーリアを見る。

「もちろん、考えました。ですが、それにしては違和感がありましたので」

ほう、と呟き、無言で続きを促すユイシーク。

「仮に部屋に侵入したのが本当に暗殺者だとしたら。わざわざ私が目覚めるまで待たず、そのまま私を殺した方が楽な筈。それに私を汚すのが目的ならば、私の身体を縛るなりなんなり、抵抗しないように自由を奪うのではないですか？　ですが、そのような事は一切されませんでした」

「だから違和感を感じた、と。ふむ、おまえ中々頭の回転が早いな」

「い、いえ、それ程の事では……先程も申し上げた通り、怖くて動けなかっただけですから……」

俯いて照れた笑みを浮かべるミフィシーリアを、ユイシークは面白そうに見詰める。

しばらく無言で見詰めていたユイシークが、ミフィシーリアの顎の下に指を伸ばし、彼女の顔をくいっと自分の方へ向けさせる。

「おまえは中々面白い奴だな。どうだ？　正妃に――王妃にならないか？」
「は……い……？」

始めは何を言われていたのか判らなかったミフィシーリア。だが、その言葉の意味するところが理解できてくると、赤かった顔が一瞬で青に染まった。

「む、無理ですっ！！　わ、私ごときが正妃など勤まる筈がありませんっ！！」
「いや、おまえは聡い。下手をするとリィと同じぐらいに頭が切れる。俺の私見だが、十分に正妃の器だと思うがな。もう一度言おう。正妃になれ」
「お、お断りしますっ！！」

間髪入れずに否定するミフィシーリア。そんな彼女を見るユイシークの眼が、ますます面白そうに歪められる。

「本当におまえは面白いな。普通、側妃として後宮に入った女が正妃になるのを否定するか？　それも即断で。それじゃあ、おまえは何が目的で後宮に入ったんだ？」
「そ、それは……」

ミフィシーリアが後宮に入ったのは、実家であるアマロー男爵家に援助金が入ると聞いたからだ。

今年不作だったアマロー男爵領の領民は、このままでは冬を越せない者たちが大勢出るだろう。そんな彼らを救うために、ミフィシーリアはアルマン子爵との婚姻に同意した。

だがアルマン子爵の悪事が露呈し、アルマン子爵に輿入れする話

がなくなり、代わりに降って湧いたのが後宮入りの話だ。
そしてミフィシーリアが後宮入りすれば、王国からアマロー家に援助金が入るという約束になっている。
だが、果たして正直にその事を国王であるユイシークに告げてもいいものだろうか。
そうやって逡巡しているミフィシーリアを見て、ユイシークは言い辛い理由でもかるのかと一瞬首を傾げるが、ケイルやコトリから聞いたアルマン子爵にまつわる一件とアマロー家の現状を思い出した。

「……そうか。おまえは領民のために後宮に入ったんだな？」
「は、はい……も、申し訳ありません」
「なぜ、謝る？」
「あ、あの……陛下の寵を賜りたくて後宮入りしたのではなく、領民のためだとお知りになられて不快に思われたのでは……？」
「ふん、口先だけで寵を求める馬鹿な女よりも、いっそ清々しくて気持ちいいくらいだ」

と、ユイシークは自分の膝を叩いて笑った。そしてかつて後宮にいた彼の言う馬鹿な女たちを思い出したのか、眉を寄せて不快そうな表情になる。

「はっきり言って、俺は貴族の礼儀だとか教養とかとは無関係に育った。生まれこそ伯爵家だったが貧乏でな。贅沢とかとは無縁だったよ」
「そうなのですか？」
「――おまえ、俺の経歴も知らずに後宮に来たのか？」
「も、申し訳ありません！　ふ、不勉強な身で……」

本当に面白い奴だな、とユイシークはその大きな掌をぽんとミフ

ィシーリアの頭に載せた。
そしてそのまましばらく、彼女の柔らかな髪の感触を楽しむ。

「まあ、貧乏だからこそ、領民たちとは上手く行っていたよ。おそらくおまえの家のようにな。俺も子供のころは平民の子供たちと混じって遊び回っていたものさ」

自分の髪をゆっくりと撫でるユイシークの手。その手の感触がミフィシーリアには気恥ずかしくもどこか心地よく感じられる。

「ま、その後は馬鹿な貴族連中の権力争いに俺の家も巻き込まれて、結局我が家はお取り潰し。両親は首を斬られたけど、まだ幼かった俺は特別な計らいとやらで命だけは許された。家も財産も家族も勝手に奪っておいて、何が特別な計らいだってんだ」

顔を向けることなく吐き捨てるユイシークの言葉を、ミフィシーリアはただ黙って聞くしかなかった。

「で、その後はお袋の妹さんの嫁ぎ先だったミナセル公爵家――当時は男爵だったけどな――に引き取られて、そこで新しい家族に出会った。ま、それ以外にもジェイクやケイルといったおまけとも出会ったがな」

改めてミフィシーリアへと顔を向けたユイシークは、おどけたように固めを瞑ってみせた。

「ミナセル家も自由な家風でな。貴族なのに市井に混じって一緒に生活していた。どちらかっていうと貴族というより、ちょっと金持ちの庶民って感じの家だったんだ。だから俺には貴族の教養とかは無縁ってわけだ」

「――なんとなくですけど、想像できます」

目の前の一国の王とは思えないような自由奔放な青年。そして今日出会った彼の従兄妹にあたる少女。

彼らの気風は貴族というより庶民のそれに近い。だからだろうか。今目の前にいる青年やその従兄妹の少女に親近感ともいうべきものを感じるのは。

きっと彼らの生活は、自分がアマロー家での送った生活と似ている部分があるのだろう。

「だと言うのにだな、部屋をごてごてと家具や美術品で飾ったり、自分自身を高価な衣服や装飾品で着飾ったり、身綺麗な侍女を何人もこれみよがしに侍らせたり。そんな金と権力にしか目がない連中の口から愛していますだの、寵を受けられて光栄ですとか言われてもちっとも嬉しく思えないね。どうせなら本人と侍女全員が素っ裸になって俺を出迎えてみろってんだ。その方が余程俺は嬉しく思うね」

「それは言外に次に陛下がこの部屋におみえになる時は、私と侍女が裸で待っていろと仰ってます？」

「おう。やってもらえるなら、是非お願いしたいね。そうすればこの部屋に絶体に来たくなるってもんだろ？」

「ふふふ。ですが、お断り致します。リーナ様から陛下の言うことを真面目に聞き受けるなと言われていますので」

「ちくしょう、リィの奴。ことごとく俺の野望の邪魔をしやがって。仕返しに今度あいつを全裸にひん剥いて王城中を引き連れて回ってやる」

「おやめになられた方が賢明かと。リーナ様はあれで陛下のお言葉には絶体に従うでしょう。本当に裸で王城の中を歩いてしまわれますよ？」

「ちっ、仕方ない、おまえに免じて許してやるか。あいつの裸を見

ていいのは俺だけだしな」

自然に互いの視線を絡ませる二人。そして同時に声に出して笑い合う。

ひとしきり笑い合うと、ユイシークは自分の頭をぽてんとミフィシーリアの膝の上に落とした。

「きゃっ」

「お、中々気持ちいいな。さっきの胸の感触といい、小柄で痩せぎすかと思ったら結構着痩せする方か？」

「し、知りません！」

ミフィシーリアは真っ赤になってぷいと顔を背けた。

そんなミフィシーリアの態度が面白かったのか、ユイシークは彼女を見上げながら再び笑う。

「やっぱりおまえは面白い奴だ。こうして話をするのは初めてだというのに、何か以前から知り合っていた気がするな」

ユイシークに言われてミフィシーリアも思い出した。

彼の言う通り、こうしてまともに会話するのはこれが初めてなのである。なんせ謁見の時があれだったのだから。

「なあ、改めて聞くぞ。正妃になれ」

「お断りします」

ユイシークの視線がミフィシーリアを見据える。その眼はなぜ正妃になるのを拒むのかと問いかけていた。

「私が正妃なれば……おそらく実家も只では済ません。我が家は

辺境の小貴族でしかないのですから」
「確かにおまえが正妃なれば、権力の亡者どもがアマロー家にも色々と手を伸ばそうとするだろうな」

そしてそれらの手を撥ね除けきるだけの力は、今のアマロー家にはないとミフィシーリアは考えている。

「それにアーシア様やリーナ様といった、本当に陛下を愛しておられる方々がいらっしゃいます。正妃にするなら、彼女たちの中から選ばれるのが本筋だと思いますが」

だが、ユイシークはその言葉に顔を顰めるだけだった。

「――こちらにも色々と事情があってな。アーシィやサリィといった御三家の血筋の側妃を正妃にするわけにはいかないんだ」
「でしたらリーナ様では？」
「あいつの元奴隷という部分が引っかかる」
「つまり、残されたのは私だけ、という事ですか……」
「まあ、そう言えばそうなんだが……怒ったか？」
「いいえ……私にも事情がるように、陛下にも事情がおありなのでしょう？　その程度で怒ったり致しません」

そうならいい、とユイシークは呟き、そのまま眼を閉じた。

「――陛下？　お眠りになるのですか？」

ミフィシーリアの問いかけに、ユイシークは再び眼を開けた。だが、その顔には明かに不機嫌なものが浮かんでいる。

「陛下？」

「それ、やめろ」
「は？」
「私的な時間で俺を陛下と呼ぶな。俺の事はシークと呼べ」
「は……はあ……」
「アーシィやリィ、ジェイクやケイルも公式な場以外では皆そう呼んでいるんだ。だからおまえもそう呼べ。そうしたら俺もおまえのことをミッフィ……」
「私の愛称はミフィです」
「お、おう……そうか」

きっぱりとそう言いきるミフィシーリアに、ユイシークは僅かにたじろぎながら肯いた。

「今、陛下――し、シーク様が呼ぼうとした名前は、どこか危険な香りがします。どこが危険なのか自分でもよく判りませんが」
「そりゃ奇遇だな。実は自分で言っておいてなんだが、俺もそう思ったんだ」

そして二人は、もう一度見詰め合うとくすくすと静かに笑い合った。

０８ー初めての会話（後書き）

本日はもう一本、『辺境令嬢』も更新します。

ようやくミフィシーリアとユイシークがまともな出会いをしました。

ここまで本当に長かった。

お待たせしてしまった方々（↑いるのか？）、本当に申し訳ありません。

これからは二人の絡みも増えてくると思います。そしてミフィシーリア以外の側妃で、未登場の人たちも本格的に出てくるでしょう。

今後もよろしくお願いします。

09 一夜明けて

メリアの一日はミフィシーリアを起こす事から始まる。
何かにつけてしっかりしているように見えるミフィシーリアだが、朝だけは弱いのだ。
そんなミフィシーリアを起こす事が、幼い頃からのメリアの日課になっていた。
だから今日も、彼女は朝一番にミフィシーリアの寝室の扉を開ける。
ノックしたところでミフィシーリアが起きるとは思えない。また、自分より早くミフィシーリアが起きている事などあり得ない。
長年の習慣から、メリアはいつも寝室の扉をノックすることなく開ける。しかし、今日ばかりはこの長年の習慣を恨みたく思った。
なぜなら、彼女の敬愛してやまないミフィシーリアが、見知らぬ男性と同衾しているのを目の当たりにしてしまったのだから。

「おはようございます、お嬢さ……ま？」

扉を開けたところで、いつものように朝の挨拶。普段ならこの挨拶に返事は返ってこない。
だが、今日は違った。かすかな声であったが、返答があったのだ。

「――むぅ……だ……れ、だ？　おま……え……」

まだまだ眠そうな声。しかし、その声は確かに男性のものだった。
呆然とメリアが見詰める中、声の主と覚しき男性がベッドで上半身を起こした。

そして身を起こした男性の向こうに、安らかな寝顔のミフィシーリア。

幸いというかなんというか、二人は裸ではなく着衣のまま寝ていたようで、メリアが二人のあられもない姿を目にする事はなかった。

「えっ……と？　そういうあなたこそ……誰？」

男は大きな欠伸をしながらちらりとメリアへ視線を向けると、その顔に何やら面白そうな玩具を見つけた子供のような笑みを浮かべた。

「俺か？　俺は……まあ、一言で言ってしまうと……不法侵入者って奴？」

確かに嘘は言っていない。彼は夕べ、この部屋の主であるミフィシーリアの許可を得ることなく部屋に侵入したのだから、不法侵入者と呼べなくもない。

だが、メリアは不法侵入者という言葉を聞くと同時に、寝室の扉のところで素早く身を翻し、自分の部屋として割り当てられた侍女の控え室に駆け込む。

そして次に彼女が寝室に姿を現した時、その手には小さいながらも剣呑そうなメイスが握られていた。

このメイスは王都へと出立する際、メリアの母のシリアが彼女にミフィシーリアを守るために使えと渡したものだ。これなら剣や短剣と違い、特別な技量も必要なく振り回すだけで相手に大きなダメージを与えられるから、と。

そして今、このメイスをふるうはまさに今、とばかりにメリアは母から託された獲物を振りかざす。

「この不埒者っ！！　うちのお嬢様に何をしたっ！？」

メリアは叫びながらメイスを両手で持って振り上げ、いまだにベッドで上半身を起こした状態の男に殴りかかる。
だが、男はベッドに腰を下ろしたまま、片手でメリアのメイスを易々と受け止めた。

「おいおい、こんなもの振り回しちゃ危ないぞ？　下手するとこいつがミフィの頭に当たっちまうだろう」
「黙れっ！！　不法侵入者の分際でっ！！　気安くお嬢様を愛称で呼ぶなっ！！」
「でも、本人に呼んでいいって言われたぞ？」
「えっ！？」

メリアは間近に迫った男の顔をまじまじと見る。
明るい茶髪に黒い瞳。その面立ちは昨日この部屋を訪れて思わぬ大騒ぎをしたアーシア姫と似通った部分が多々見受けられる。
ここに至り、メリアの脳裏に目の前の男の正体が閃いた。

「あ、あのー、もしかしてもしかすると……国王陛下であらせられたり……します？」
「おう。あらせられたりするぞ」

してやったりとばかりににやりと笑う男。いや、国王陛下。
メリアは手にしていたメイスを放り投げ、その場で平伏する。
放り出されたメイスがベッド脇のテーブルに当たり嫌な音を立てたが、メリアはそれどころではなかった。

「も、申し訳ありません！　へ、陛下とは知らずご無礼な振る舞いを――っ！！」
「あー、気にすんな。わざと誤解されるような言い方をしたのは俺

だしな。それより――」

ユイシークはちらりと後ろを振り返る。

「これだけ騒いでもまだ起きないのか、こいつは……」

「は、はあ……お嬢様は朝が弱いので……」

呆れた視線を二つ受けながら。

ミフィシーリアは実に幸せそうに眠りこけていた。

「本当に申し訳ございませんでした！」

目覚めたミフィシーリアはメリアから事の顛末を聞き、真っ青になってユイシークに謝罪した。

メリアの仕出かした事は斬首ものの不敬罪にあたる。いくらメリアがユイシークの事を知らなかったとはいえ、それは理由にならない。

そして使用人の罪は主の罪。だからミフィシーリアは目覚めてすぐに彼に謝罪したのだ。

「だから気にしなくていいって。口うるさい貴族どもに知られたならともかく、ここには俺たちしかいなかったわけだしな。そもそも、おまえの侍女をからかった俺が悪いんだし」

そう言ってからからと笑い飛ばすユイシーク。だが、ミフィシーリアの顔から申し訳なさそうな表情が消える事はなかった。

それを見たユイシークは、若干眉を寄せるとテーブルの上の籠に盛られていたパンを一つ手にとり、そのままぱくりと齧り付いた。

「もういいって言ってるだろ？　そんな顔されたままだと、朝メシが不味くなっちまう。だからやめろ」

ユイシークはミフィシーリアの部屋である第六の間で、彼女たちと一緒に朝食を摂っていた。

ミフィシーリアが目覚め、着替えなどの身支度を済ませた後、ユイシークはなぜかここで一緒に朝食を摂ろうと言い出した。

もちろん、ミフィシーリアにそれを拒む事ができるわけもなく、そのまま彼と一緒に朝食を摂る事になった。

第六の間のテーブルに差し向かいで座り、指でパンを小さく千切っては口に運ぶミフィシーリア。

彼女の目の前では今、この国の最高権力者がパンやサラダ、スープなどを実に美味しそうに食べている。

その食べ方は作法といったものに捕らわれない自由なもの。それを見たミフィシーリアは、彼が夕べ自身が言っていた通り、貴族の作法や礼儀といったものとは無縁だという事を改めて実感した。

だが、そんな自由な食べ方が目の前の青年には実に似合っていた。

そしてそんな青年とこうして差し向かいで食事をしている事に、彼女はくすぐったいような妙な感覚を自覚していた。

ユイシークを見詰めるミフィシーリアの顔に、いつしか微笑みが浮かぶ。それを知ってか知らずか、ユイシークは空になった紅茶のカップを無言でメリアに向かって差し出す。

そして壁際で控えていたメリアがそれに応じ、彼のカップを満たすために動き出す。いつもならミフィシーリアと一緒のテーブルで食事をするメリアだが、さすがに国王の前でそうする事はできなくて給仕に専念していた。

やがて食事を終えた二人は立ち上がる。ユイシークは政務のために。そしてミフィシーリアは政務に赴くユイシークを見送るために。

「じゃあな。夕べは変な訪問の仕方をして悪かったな」
「本当です。今度からは忍び込んだりせずに、堂々といらしてください」
「ああ、そうするよ」

そしてユイシークが第六の間を後にし、残ったミフィシーリアが部屋の奥へと振り向いた時、それはそこにいた。
瞳にきらきらとした輝きを浮かべ、口角をキュッと釣り上げて。
それを見たミフィシーリアは思わずどきりとし、次いで覚悟を決めた。
それはある意味、夕べのユイシークよりも手強い存在といえるのだから。

第六の間を後にしたユイシークは、一旦自室へと戻るべく廊下を歩いていた。
今、彼が身に纏っているのは昨夜第六の間を訪れた時の暗殺者もどきの黒装束。いくらユイシークでもこのまま政務を執るわけにはいかず、一度自室に戻って着替えるつもりなのだ。
そして自室に到着し、扉を開けようとした時。部屋の中にある気配に気づいた。
だが、ユイシークは何事もなかったかのように扉を開く。なぜなら。

「こんな時間にどこへ行っていたの？　それにその格好はなに？」

中から漂う気配は彼がよく知っているものだったから。
ユイシークの部屋の中央で、リーナが黒装束の彼を面白そうに見詰めながら腕を組んで立っていた。

「さては夕べ、あの娘のところに行ったのね？」
「ご明察。よく判ったな、リィ」
「そりゃあね。あなたの考えている事が判らなくちゃ、『国王の外付良心』なんて呼ばれないでしょう？　それで、早速抱いたの？」
「いいや、夕べはそのつもりじゃなかったからな。ちょっとからかいに行ったのさ」

ユイシークは夕べのあらましと、正妃になれと言ったが断られた事をリーナに告げた。

「本当にあの娘、正妃になるのを断ったの？」
「ああ。きれいにすっぱり、即断で断られた」
「信じられないわね」
「だろ？　面白い奴だと思わないか？」

くくく、とどこか邪悪そうに笑うユイシークを、リーナは呆れたように見詰める。
きっとユイシークは、今後もしつこく彼女に正妃になれと迫り続けるつもりなのだろう。
だめだと言われると、余計にその事に傾注する性なのだ。この男は。
その事をよく知っているリーナは、ちょっとだけミフィシーリアに同情した。

「そういや、聞いたぞ」
「何を？」
「おまえ、あいつに色々な事を吹き込んだだろう」
「え……そ、それは……」

思わず数歩後ずさるリーナを、ユイシークはいつもの悪戯小僧のような笑顔を浮かべて追い詰める。

「おまえにはお仕置きが必要そうだな」

と、ユイシークはリーナを身体を軽く尽き倒す。

軽くとはいえ、人体の倒れやすい箇所を的確に押されたリーナは、そのまま背後に倒れ込む。

この部屋にある大きなベッドの上に。

彼の言う「お仕置き」が何なのか悟ったリーナは、慌てて身を起こそうとするが、既にユイシークは彼女にのしかかっていた。

「ちょ、ちょっと、こんな朝っぱらからなにするつもり？　政務はどうするの？」

「なに、少しぐらい政務が始まるのが遅くなっても困るのはケイルぐらいだ。だから問題なし！」

「も、問題あるわよ！」

必死に抗うリーナだったが、その抵抗は虚しくユイシークは彼女の衣服をはぎ取り始めた。

「では、夕べは本当に何もなかったのですか？」

ユイシークとミフィシーリアの間に夕べ何があったのか。

メリアは期待に胸を膨らませてミフィシーリアを問い詰めた。

しかし、メリアが期待するような事は一切なかったと知り、彼女の眼から先程のようなきらきらした輝きは失せ、かわりに明かな失望が浮かんでいた。

「え、ええ。夕べは二人で色々とお互いの事を話していて……そのままいつの間にか眠ってしまったの」
「そうですか……残念だなぁ。ようやくお嬢様が大人の階段を登ったと思ったのに……」
「お、大人の階段……」
「そうですよ。もしそうなら昨日の料理長さんにお願いして、今日は御馳走を作ってもらうところだったのになー」
「や、やめてメリア！　も、もしシーク様とそうなったとしても、そんな事他の人に話さないでっ！！」
「あれー？　もう陛下の事、愛称で呼んでいるんですねぇ？」
「だ、だって……し、シーク様がそう呼べと……」

結局昨夜は二人の間に何もなかったと知っても、メリアの追求はなかなか緩む事はなかった。

今、ユイシークの執務室には重い沈黙が降りていた。

「なあ……やっぱりおまえ、馬鹿だろう」
「ああ。馬鹿だな。間違いない」

ジェイクやケイルからそう言われても、何も言い返せないユイシークは不機嫌な顔で執務机の椅子に腰を下ろしていた。

「リーナの足腰立たなくさせてどうすンだよ？　もう少し後先考えたらどうだ？」
「リーナが使い物にならなくなって、一番困るのはおまえだろう？　どうしてそれが判らない？」

ユイシークがリーナに施した『お仕置き』が少々激しすぎたらし

く、現在リーナはベッドから起き上がれないでいた。
ユイシークの執務の補佐をするリーナがそんな状態では、彼の執務に滞りが発生しかねない。
その事をジェイクとケイルはユイシークを窘めていたのだ。

「あー、それなんだけどな、俺の補佐はケイルが……」
「断わる。私には宰相閣下の補佐がある。おまえの手伝いまで手は回らん」
「じゃー、ジェイク……」
「馬鹿言うな。俺にも近衛たちや一般兵に稽古つけにゃならンのだ。そもそも、俺にデスクワークを求めるなっつーの」
「ぐぅ……」

二人から執務の手伝いをすっぱりと断られ、ずるずると椅子の上で姿勢を崩すユイシーク。
彼の裁可を必要とする書類が何枚も彼の執務机の上に積み上げられているが、量自体はほぼいつも通り。
だが、いつもならこの書類を事前にリーナが目を通し、急を要するものとそうでないものを振り分けるのだが、そのリーナがいないのでは、ユイシーク自身が書類の分別から行わなければならなくなる。
これでは仕事量はいつもと一緒でも、かかる時間は倍以上になる。
無くして判るありがたさ。というわけでもないが、リーナの存在の重要性とその能力の高さを改めて認識するユイシーク。
さて、どうしたものか、とユイシークは天井を見上げながら考える。
そんな彼の頭の中で一つの記憶が甦り、ユイシークは勢いよく立ち上がった。
何事かとジェイクとケイルが見詰める中、ユイシークはにやりと笑う。

「いるぜ。リーナの穴を埋められそうな奴に心当たりがある」

それを耳にしたジェイクとケイルは、互いに顔を見合わせて首を傾げるばかりだった。

０９－一夜明けて（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

今回は一夜明けた朝の、二人のほのぼのとしたものが書きたかったわけですが……果たして上手く書けたでしょうか。

後半は何というか、リーナの受難？

さて、次回の話ではまたちょこっと『魔獣使い』とクロスオーバーしようかと考えています。

では、今後もよろしくお願いします。

１０ 胸を切り刻む言葉と来訪者

それはいきなり第六の間の扉を開くと、そのままの勢いで室内に飛び込んで来た。

部屋の掃除をしていたメリアは、いきなり飛び込んで来たそれを見て驚きに目を見開く。

「ミフィーっ！！　遊びに来たわよぉっ！！」

「こ、コトリ様っ！？」

いきなり室内に飛び込んできたもの――コトリは、きょろきょろと室内を見回し、求めていた姿がない事にようやく気づいた。

「あれ？　ミフィは？　いないの？」

室内を彷徨っていたコトリの視線が、掃除用のモップを持ったまま硬直しているメリアの所で停止した。

「あ、あの、お嬢様なら陛下からの使いの方がみえて、一緒に行かれましたが？」

「え？　パパの使いが？」

何だろうと首を傾げるコトリ。そいてメリアは、たった今コトリの口から飛び出した爆弾発言に再び目を丸くする。

へ、陛下をパパって呼ぶって事は、コトリ様って一体何者っ！？

コトリとユイシークの関係を詳しく知らないメリアは、首を傾げたコトリを前にしばらく動く事もできなかった。

「わ、私がシーク様の政務の補佐をですかっ！？」

ユイシークの使いの者に連れられて彼の執務室まで連れてこられたミフィシーリア。

そこにはユイシークだけではなくジェイクとケイルまで待っていて、ケイルよりここに呼ばれた理由を聞かされた。

それがユイシークの執務の補佐だったのだ。

「何も難しく考えなくても大丈夫ですミフィシーリア様。例えば……」

ケイルはユイシークの執務机に載っていた書類の束から、適当なものを一枚抜き出して、その書類を確認してからミフィシーリアに提示した。

「……奴隷解放の嘆願書……？」

「その通りです」

ミフィシーリアがざっとその書類に目を通したところ、王都に住むある人物が自分の所有する二人の奴隷を解放したい旨を記した嘆願書だった。

「このような書類は危急性が低いものです。奴隷の解放など少々遅れても誰も困りません。困るとすれば解放される奴隷本人ぐらいですから」

「んー、だけどよ？　解放が遅れた事によって、その奴隷が虐待されたりしないか？」

途中から口を挟んだジェイクを、ケイルがじろりと睨みつける。

一方ミフィシーリアはそんな彼らを無視して、しばらく考えた後

にその考えを口にした。

「その心配はないのではないでしょうか？」

「ほう。なぜそう思う？」

そう尋ねたのは執務机の椅子に座り、面白そうにミフィシーリアたちを眺めていたユイシークだ。

「もし、奴隷を虐待するような者であれば、そもそも解放しようと嘆願書を出すとは思えません。わざわざ財産である奴隷を手放すという意思を表している以上、この者は奴隷を酷く扱うような者ではないと考えます」

彼女の考えを聞いたユイシークは面白そうに口角を釣り上げ、ジェイクとケイルは感心したような光を眼に浮かべた。

「ミフィシーリア様のご慧眼通りです。そのため、このような書類は後回しにしてもさほど問題にはなりません。逆に――」

ケイルは今度は書類を二枚選び取りミフィシーリアに手渡す。

「こちらの書類は王都の西の街道に出没する盗賊の討伐依頼。もう一つはゼンガーの町の南に出没する魔獣の討伐依頼です」

手渡された書類に目を通し、ケイルの言っている事に間違いがない事をミフィシーリアは確認した。

「これらの書類は危急性の高いものと判断されます。ただちに王であるシークの裁可を得て、騎士なり兵なりを派遣しなければなりません」

「つまり、個人の視点ではなく国としての視点で判断しろ、という事ですか？」
「左様です」

冷静に返事をしながら、ケイルはミフィシーリアの頭の回転の良さに内心で驚いていた。
ユイシークから彼女は使い物になるとは聞かされたが、正直ケイルは半信半疑だった。リーナほどに様々な局面で有能な人物は貴族の間を探してもそうはいないのだから。
だが、彼女なら少なくともユイシークの政務の補佐なら問題ないだろうとケイルは判断した。彼女ならリーナの代役を十分に務められるだろう。

「つまり、この書類の中からケイル様の仰る危急性の高いものを選び出し、順次シーク様に回せばよろしいのですね？」
「その通です。お願いできますか？」
「判りました。やってみます」

肯いたミフィシーリアは普段リーナが使っている机の椅子に腰を下ろすと、山と積まれた書類を崩しにかかった。

「無理だな。両方は手が回らねぇ」
「やっぱ、そうだよなぁ」
「街道沿いの盗賊は虎の子の精鋭を派遣すれば何とかなるが、魔獣――岩魚竜（いわぎょりゅう）は軍じゃ討伐は難しいぜ？　数頼みで攻めても無駄に消耗するだけだ」
「となると、城下の魔獣狩り（ハンター）に依頼を回すか……あ、それより俺が直接出向くってのはどうだ？」
「アホ抜かせ。おまえがわざわざ出向かなくても、『轟く雷鳴』亭

のリントーの親父に頼んだらどうよ？　あの親父なら悪くは扱わねぇだろ？　特におまえが指名すればよ？」

「ちぇ、仕様がねえな。まあ、あの親父には昔世話になったし、報酬もちょっと色付けてやるか」

先程ケイルが提示した二枚の書類を眺めながら、ユイシークとジェイクが意見を交わすのをミフィシーリアは手元の書類に目を通しながら何気なく聞いていた。

ケイルは自身の仕事のため、ミフィシーリアに仕事の手順を説明した後、早々にこの執務室を後にしている。

ジェイクが残っているのは、派遣できそうな軍についてユイシークから意見を求められたからだ。

ぼんやりと二人のやり取りを聞きながらも、ミフィシーリアは必死に書類に目を通す。

言われた通りに書類を急を要するものとそうでないものに振り分ける。そして振り分けられた書類の内、急を要するものをある程度溜めると、それを今度はユイシークの執務机へと運ぶ。

そして自分が使用している机に戻り、その上の書類の山を見たミフィシーリアは少しうんざりした。

いくら書類を仕分けても、全然量が減ったようには見えないのだ。聞けばこの仕事をリーナは毎日行っているという。それだけで彼女の凄さが実感できるミフィシーリアだった。

そしてこの時になって、彼女はようやく一つの疑問を感じた。

「そういえばリーナ様はどうされたのですか？　本日は急に政務のお手伝いができなくなったと聞かされましたが……」

ミフィシーリアが聞かされたのは、いつもユイシークの補佐をしているリーナがとある理由でそれができなくなり、その代役をお願いできないかというだけであった。当のリーナがどうしたのかまで

は聞いていなかったのだ。

「ああ、リィなら――」

「げ！　この馬鹿！」

ユイシークの言葉を遮ろうとジェイクが慌てて割り込むがその努力も虚しく。ユイシークは平然と今朝の事をミフィシーリアに語って聞かせた。語ってしまった。

「あの後、着替えのために自室に戻ったんだが、そこにリィがいてな」

「リーナ様がシーク様の自室に？　リーナ様は無断でシーク様の部屋に立ち入ったのですか？」

「ん？　ああ、あいつは毎朝政務の前に俺を自室まで呼びに来るからな。いつもの事だし、部屋には自由に立ち入っていいとも言ってある」

「……そ、そうなのですか……」

どこか暗そうなミフィシーリアの声を不審に思いつつも、ユイシークは続ける。

「あいつに限らず、側妃は全員俺の部屋に自由に入る許可を与えてある。あ、もちろんおまえも構わないからな？」

「あ、ありがとうございます……」

「で、夕べもちらっと言っただろ？　あいつにはおまえに色々と吹き込んだ罰を与えると。で、ちょっとお仕置きをしたんだが……やりすぎちまってな。起き上がれなくなっちまったんだよ」

「――――え？」

ミフィシーリアの顔が驚愕に引き攣る。それをちらりと見たジェ

イクがあちゃーと手で顔を覆いながら天井を仰ぐ。
だが、当のユイシークは二人の様子に気づく事もなかった。

「これも夕べ言ったが、やっぱりおまえは頭が切れる。だからリィの代役に呼んだんだ。実際、今日のおまえを見てケイルの奴も認めたようだしな……って、どうした、ミフィ？」

ユイシークは黙って俯いてしまっているミフィシーリアに、この時になってようやく気づいた。
ミフィシーリアの様子がおかしいと感じたユイシークが彼女へと歩み寄る。だが、ミフィシーリアはそれを拒絶するかのように数歩後ずさると無言のまま執務室を飛び出した。
後に残されたのは呆然としたユイシークと、忌々しそうに顔を歪めるジェイク。そしてジェイクは歪めた顔のままユイシークの背後からぽんと肩に手を置く。
振り返ったユイシークの頬を、ジェイクの拳が打ち貫いた。

「ぐぅ――っ！！」

倒れたユイシークは殴られた頬を押さえながら、冷たく自分を見下ろす親友ともいうべき男を見上げる。

「何しやがるっ！？」
「前からおまえは馬鹿だ、馬鹿だと思っていたが……今日ほどおまえを馬鹿だと思った事はねぇぜ？」

ジェイクはユイシークの胸ぐらを掴むと、そのまま強引に彼を立ち上がらせる。

「あの嬢ちゃんに言わねぇでもいい事を平気でべらべらと喋くりや

がって。本当、馬鹿だよおまえは！」
「言わなくてもいい事だと？　一体何の事だよっ！？」
「まだ気づかねぇのか？　だからおまえは馬鹿だっつぅんだ！　夕べ、おまえはあの嬢ちゃんの部屋に泊まっただろう？」
「あ、ああ……。どうして判った？」
「判らいでか。伊達にガキの頃からの付き合いじゃねぇよ。もっとも、さっきのおまえたちの会話を聞いてりゃ誰だった判るだろうがな」

間近で真っ直ぐに自分を射抜くジェイクの瞳。その瞳に浮かぶ怒りと苛立ちが、ユイシークに反論を躊躇わせた。

「で？　おまえは今朝、嬢ちゃんの部屋から自室に戻り、そこでリーナに何をした？」
「――あ……」

ここに至り、ようやくユイシークはジェイクの言いたいことを理解した。

「おまえがおまえの女たちに何しようが勝手だ。それに俺同様付き合いの長いアーシアやサリナたちはいいさ。子供の頃からの付き合いだ、おまえの事は色々と理解しているし、互いに割り切ってもいる。だが、あの嬢ちゃんはまだそこに至ってねぇ。それなのにおまえは！　嬢ちゃんと別れた後、すぐに他の女を抱いただと？　さっきも言ったがリーナはおまえの女だ。どう扱おうが好きにしやがれ。だが、それをわざわざ自慢げにあの嬢ちゃんに言う必要があるのか？」

自分と別れた直後に他の女性を抱く。それを知ったその女性がどんな感情にとらわれるか。

少し考えれば容易に理解できる。もちろんそれはユイシークにも。

ユイシークはいまだに自分の胸ぐらを捕まえているジェイクの手を強引に振り払うと、服の乱れを直す事さえせずにそのまま執務室を飛び出した。

遠ざかって行く足音を聞きながら、ジェイクは主人のいなくなった執務机の椅子に無遠慮に腰を下ろして一人ごちる。

「ったく世話のやける親友だぜ。こんな事ならあの嬢ちゃんはやっぱり俺の嫁にしておけば良かったかねぇ……」

溜め息と共に誰に聞かせる事もなく吐き出された呟きは、高い天井に吸い込まれるように消えていく。

そしてジェイクは今自分が口にした内容に、今度は別の意味で深々と溜め息を吐く。

「……やべぇ……ひょっとしてまじに惚れたか？　あの嬢ちゃんに？」

今度の呟きも、誰に聞かれる事もなく消え失せていった。

自室である第六の間に一人戻ったミフィシーリア。

彼女は突然戻って驚いているメリアをも無視して、寝室に駆け込むと扉を閉じて鍵をかけた。

一人ベッドに倒れ込むミフィシーリア。自分でも気づかないうちに、彼女を頬を涙が濡らしていた。

どれくらいそうしていたのか。気づけば寝室の扉を誰か――おそらくメリアだろう――が、遠慮がちにノックしていた。

「――どうしたの？」

涙を拭い、何とか震えない声で問いただす。
その問いに応えたのはやはりメリアだった。
「あ、あのお嬢様……お客様がおみえなのですが……」
「お客様……？」
もしかしてユイシークだろうか。だとしたら今は、今だけは会いたくない。
だが、扉の向こうから聞こえてきた名前は、ミフィシーリアが予想もしていない人物のものだった。
「そ、それが……第二側妃のサリナ・クラークス様がおみえなのです……」
「サリナ様が……？」
第二側妃にしてこの国の宰相であるガーイルド・クラークスの一人娘。
いくら今、自分の気持ちが落ち込んでいようとも、無下に帰って貰っていい相手ではないとミフィシーリアは判断した。
「会います。ですが、しばらく準備の時間をいただいて貰えるかしら？」
寝室を出たミフィシーリアは何度も顔を洗い、メリアに手伝ってもらって軽く化粧を施す。
そして準備が整ったところで、改めてサリナを迎え入れる。
「お初にお目通り致します、ミフィシーリア・アマロー様。わたくし、サリナ・カークライトと申します。以後、よしなに」

扉を開けた向こうで、彼女は数人の侍女を引き攣れて優雅に頭を垂れた。

「こ、こちらこそ、サリナ・カークライト様。ミフィシーリア・アマローです。本来なら私の方からご挨拶に向かわねばならないのに……」

「お気になさらずに。わたくしの方こそいきなりのご訪問、申し訳ありませんわ」

悠然と微笑むサリナ。それに会わせて彼女の豪奢な金髪がさらりと揺れた。

ミフィシーリアはサリナを部屋に招き入れ、互いに椅子へと腰を下ろす。

サリナの身長はミフィシーリアよりも僅かに高い。

長く豊かな黄金の髪。蒼玉（サファイア）の如き双眸は優しげに揺れ。ほっそりとした頬のラインはシャープな顎に繋がり、薔薇色の唇は花弁の如き。

身につけているものも黄色を基調にした手の込んだ豪華なドレス。その大きく開いたドレスの胸元からは豊かな谷間が覗いている。

細い腰に豊かな腰廻り。その白魚のような手には一振りの高価そうな扇が握られている。

そして背後に無言で控える数名の侍女たち。

まるで絵に描いたような貴族の令嬢。それがサリナ・カークライトだった。

メリアはサリナの姿を見た時、彼女がいつか想像した通りに金髪の縦ロールだった事に内心でやっぱりと唸った程だった。

「それで本日はどのようなご用件で？」

にこにこと微笑みを絶やさないサリナに、ミフィシーリアは来訪の理由を問う。

「失礼ですが、単刀直入にいきますわね？」

にこにこ。にこにこ。微笑んだままサリナは手にした扇を一度だけぱちりと打ち鳴らした。

「ミフィシーリア・アマロー様。あなたは陛下を愛していますか？」

１０ー胸を切り刻む言葉と来訪者（後書き）

『辺境令嬢』更新。

前回に引き続き、最低野郎のユイシーク。それに対して何か無駄に格好良いジェイク。

このままジェイクにミフィシーリアをかっさらわれなほどの勢い。もっとユイシークの見せ場もつくらないといけないなと思う今日この頃。

近づいたようで実は全然近づいていないミフィシーリアとユイシークですが、これからなんとか……うん、なんとか……なるかなぁ……。

なんとかなるようにがんばります。今後ともよろしくお願いします。

11 ― 謝罪

「あなたは陛下を愛していますか？」

サリナのその問いに、ミフィシーリアは「愛していない」とはっきりと答えようとした。

昨夜の突然の訪問から今朝の朝食までの時間。その時間はミフィシーリアにとって決して不快なものではなかった。それどころか、今思えばとても楽しい時間だった。

そんな時間を交わした直後に、他の女性を抱くような不節操な男性など、愛していないとはっきりと答えようとしたのだ。

だが、実際は口がまるで凍りついたかのようにその言葉が出る事はなかった。

ミフィシーリアはサリナから視線を逸らし、俯いて何かを堪えるように震える。

そんなミフィシーリアを、サリナは微笑ましそうに見詰めている。まるで今のミフィシーリアの心の中の葛藤を見抜いているかのように。

「……そうですか。もうあの方に惹かれ始めているのですね」

サリナのその呟きが、ミフィシーリアの心のどこかにすとんと填まり込む。

そして脳裏を横切るのは、ほんの数回しか会った事のない人物。

初めて会った謁見の間。

唐突に現れた昨夜。

そのどちらもが悪戯だった。アーシアを焚き付けた件も会わせれば都合三回。それだけの数の悪戯をされたというのに、なぜか彼に

対して腹立たしい気持ちにはならなかった。
もしも、同じ悪戯を弟あたりがやろうものなら、腹立たしさのあまり一、二時間はお説教を喰らわせるだろう。
だが、なぜか彼にはそんな気持ちは沸いてこない。
昨夜の彼との会話を思い出してもそうだ。
どちらかというと見知らぬ他人と接するのが苦手のミフィシーリアだが、彼とはまるで昔からの知人のように自然に振る舞えた。
そして今のサリナの言葉を聞いて、ミフィシーリアは自分の気持ちに気がついた。
出会ってまだ二日目。だけど間違いなく自分は彼――ユイシークに惹かれ始めている、と。

「どうやら自分の気持ちに気がつかれたようですわね？」

その言葉に我に返ったミフィシーリアは、弾かれたようにサリナへと視線を移す。
相変わらず彼女は微笑んでいる。まるで悩む妹を優しく見守る姉のように。

「いいでしょう。わたくしはあなたを側妃として認めます」
「は……はあ……あ、ありがとうございます……？」

相変わらずにこにこと微笑むサリナ。
他の側妃を追い出したという以前に聞いた話から想像していた彼女と、今目の前で穏やかに微笑む彼女との差にミフィシーリアは戸惑いを隠せない。

「あなたは虚栄心や見栄などでシークさんに近づいたわけではなさそうですもの。もし、そのような理由で後宮に来たのでしたら、さ

っさと追い出して差し上げるところですけど……」

サリナの浮かべる微笑みに、若干だけ今までとは違う色が浮かぶ。

浮かぶその色は好奇心。

「わたくしもあなたの事が気に入りましたわ」

と、サリナは手にした扇を弄びながら、爽やかな笑顔でそう告げた。

一体自分のどこがどう気に入られたのか。

あまりにも掴み所のないサリナに、ミフィシーリアは首を傾げるしかない。

とはいえ、それを面と向かって問いかけるのもなんだかで。

何と言ったものか、とミフィシーリアが困っていた時。

第六の間の扉がどんどんと乱暴に叩かれた。

ミフィシーリアは戸惑いつつも、背後に控えていたメリアに視線を送る。

それに応えたメリアが一つ頷いて扉へと向かう。

この時、ミフィシーリアの対面に座っていたサリナが「来ましたわね」と小さく呟いたが、それは誰の耳にも入る事はなかった。

扉のところで誰何の声をかけるメリア。その声に応えたのは、ミフィシーリアが先程考えていた男性のもの。

びくん、と身体を震わせるミフィシーリアを優しげに見詰めたサリナが、ふと席を立ってそのまま扉へと向かう。

微笑みを浮かべたまま自分の方へとやってくるサリナに戸惑うメリア。

「わたくしに任せなさいな」

と耳元で囁かれ、戸惑いながらもメリアはサリナに場所を譲る。
そしてサリナは自ら扉を開いた。
開かれた扉の向こうで、思いもしなかった人物が佇んでいる事に、ユイシークは驚きに目を見開いた。

「サ、サリィ……？　ど、どうしておまえがここ――」

ユイシークの言葉をそこで遮ったのは乾いた破裂音。
部屋の中にいたミフィシーリアとメリアを始め、サリナの侍女たちまでもが驚きで固まったままそこを見詰めていた。
サリナに突如平手打ちにされたユイシークの頬を。

「だめですよ、シークさん。こんな可愛らしい娘を悲しませては。それで、目は醒めましたか？　まだのようでしたらもう一発行きますよ？」

にこにこと微笑みながら物騒な事を口にするサリナ。対するユイシークは、突然の不意打ちに最初こそ呆然としていたが、すぐに我に返るとにやりとした笑みを浮かべた。

「ああ。目が醒めたよ。サリィと……ジェイクのお陰でな」
「そうですか。では、わたくしはこれで退散いたしますわ。ミフィシーリアさん、突然の来訪ご免なさいね。それから悪いシークさんは懲らしめておきましたから。では、ごきげんよう」

スカートの裾を持ち上げて、優雅に頭をさげると、サリナはそのまま一人ですたすたと第六の間を出て行ってしまった。
後に残された侍女たちも慌ててミフィシーリアに一礼し、先に行ってしまった主人の後を追う。

部屋に残されたのはミフィシーリアとメリア、そしてユイシーク。
三人は誰からも口を開くことはせず、部屋の中は重苦しい沈黙に包まれた。

第六の間を後にしたサリナは、一人つかつかと後宮の廊下を歩く。
やがて彼女の前方に、一人の人物が姿を見せた。その人物は騎士の制服を着込み、腰に剣を佩いている。

「どうでしたか、サリィ？　ミフィシーリア嬢の様子は？」
「ええ。どうやらリィさんの心配通り、シークさんが余計な事を口走っていましたわ」
「それじゃあ、やっぱり……」
「ええ、悲しんでいました」

サリナの顔から微笑みが消え、代わりに浮かんだのは心を痛めていた少女に対する心配。

「では、彼女もまた……」
「ええ。相変わらず同性異性を問わず、誰彼構わず惹きつけて止まないのですね、あの人は。ですが、今はまだ惹かれているだけ。それがどう変化するかは――」
「君の異能を以てしても判りませんか？」
「ええ。わたくしの異能はそれ程強力なものではありませんもの。あなたとは違いましてよ、マリィ」

再び微笑みを浮かべたサリナに、マリィ――マイリー・カークライトはぽんと彼女の肩に手を置いた。

「さっき、凄い勢いで走って行くシークを見ました。あの様子なら

リィが心配するまでもなかったのではないですか？」
「どうでしょう？　あれでなかなか鈍いところがありますからね、シークさんは」

サリナがミフィシーリアの部屋を訪れたのは、彼女の事を気にかけたリーナからの要請だった。
本来なら自分で様子を見に行くのだが、生憎と今彼女は疲労が激しくて動きたくても動けない。
最初はリーナの事を聞きつけて見舞いに来てくれたアーシア――彼女の『治癒』の異能では、疲労を回復する事ができない――が、自分が様子を見に行くと言っていたのだが彼女に「さりげなく」という腹芸ができる筈もなく。
自然、この役目は他者の気持ちを正確に感じ取る事のできるサリナに回ってきた。
結果は案の定、リーナの心配した通りユイシークは言わなくてもいいことを言ってしまい、ミフィシーリアを傷つけてしまった。

「……悲しみを感じるのは惹かれているからこそ。何とも思っていない相手なら、何も感じはしませんからね」
「ええ。しかも彼女が感じたのは嫉妬ではなく悲しみ。あのようなめに合いながらも、リィさんを憎むこともなく、純粋に悲しみのみを感じていました。心根の優しいいい娘ですわね、彼女。わたくし、あの娘の事が気に入りましたわ」
「うん。私も彼女は優しいいい娘だと思いますよ。でなければコトリがあそこまで懐いたりしないでしょう」

二人が微笑み合っていると、背後から人の気配がした。どうやらサリナの侍女たちが追ってきたようだ。

「わたくしの侍女たちも来たようですし、わたくしも一度部屋に…

…第三の間に戻りますわ。あなたは？」
「私はまだ勤務中です。後宮騎士隊の詰所に戻ります」
「マリィにも心配かけたみたいですわね」
「何を言っているんですか？　私たちは昔からの親友でしょう？　気にしないでください」

背中越しに手を振り、その場を立ち去るマイリー。サリナはそこに留まり、背後から侍女たちが追いつくのを待っていた。
その顔に浮かぶのはいつもの微笑み。その微笑みは、今きっと悩み戸惑っているであろう一人の少女と一人の青年に向けられたものだった。

重く立ち籠める沈黙と緊張感。
ミフィシーリアとユイシークは立ったまま、気不味そうに何度も互いの顔を見やるものの、張り詰めた緊張感に気圧されて何も言えずに再び視線を逸らす。
そんな事を何度か繰り返しているうち、ミフィシーリアはユイシークの片頬の変化に気づいた。

「し、シーク様っ！？　どうなされたのですか、その顔は……っ！？」
「あ、これか？　これならさっき、サリィに引っ叩かれ……」
「そちらではありません！　反対側です！」

はっとして腫れた頬を手で隠すユイシーク。確かに彼の左頬には先程サリナに平手打ちされた椛模様が張り付いているが、その反対側の右頬は赤く腫れている。先程ジェイクに殴られた箇所が、今頃になって腫れてきたようだった。

「メリア！　何か冷やすものを！」
「は、はい！　承知しました！」

ばたばたと侍女の控え室へと駆け込むメリアをよそに、ミフィシーリアは小走りでユイシークに近寄ると、間近でその頬を見定める。

「これは……もしかして、殴られたのですか？」
「ああ……まあ、な」

気不味そうに視線をそらすユイシークの手を引き、椅子に座らせる。

そこへメリアが桶に水を汲んできたので、持っていたハンカチをその水に浸し、軽く絞って彼の腫れた頬へと当てた。

「一体誰に……」

そこまで考えてミフィシーリアはふと閃く。あの時、執務室にいたのは自分とユイシーク、そしてジェイクだ。

自分が執務室を飛び出した以上、彼を殴ったのはジェイク以外にあり得ないだろう。

「ジェイク様……ですか……？」
「ああ。……でも、悪いのは俺だ。あいつは俺の目を醒まさせてくれたんだ」

昔からお節介な奴なんだよ、と呟くユイシークを見て、ミフィシーリアの顔に微笑が浮かんだ。

「済まなかった」

照れているのか、ユイシークはそっぽを向いたままぽつりと零し

た。

「ジェイクに言われた……おまえは他の……アーシィやサリィたちとは違うのだと」

彼の頬に濡れたハンカチを押し当てながら、ミフィシーリアはその言葉に耳を傾けた。

「――正直、俺は慣れてしまっていたんだな。アーシィやサリィ、リィたちが傍にいる事が当たり前の事になっていたんだ。自惚れに聞こえるだろうが、あいつらが俺に想いを寄せてくれている事に慣れてしまっていたんだ」

決して視線を合わせる事はなく。だけど途切れる事もなく。

独白に近い彼の言葉を、彼女はただただ黙って聞くばかり。

「だけど、あいつらが俺にとって大切な存在であるのも確かなんだ。幸い――というか何というか、俺は王になった。あいつらを全員傍に置いても誰も文句は言わない。あいつら自身も、互いに互いを認め合った上で納得して俺の傍にいてくれる。だけど、おまえは違うんだよな」

この時、初めてユイシークはミフィシーリアへと振り向いた。

「――つい、おまえをあいつらと同じように扱ってしまった。済まなかった」

ユイシークは居住まいを正すと、ミフィシーリアに向かって深々と頭を下げた。

一国の頂点に君臨する存在に、面と向かって頭を下げられたミフ

ィシーリアは、逆に混乱してしまってあたふたと狼狽える。

「あ、い、いえ、お構いなく――じゃなくて！　え、えっと、その……と、取りあえず頭をお上げください！」

頭を下げたまま、ちらっと上目使いでミフィシーリアの様子を伺うユイシーク。あたふたと慌てふためく彼女の姿に、思わず吹き出してしまった。

「し、シーク様っ！？　もしかして、また私をからかわれたのですかっ！？」

「違う、違う。本気でおまえに謝罪したんだよ。今のは慌てるおまえが可愛かったからつい――な？」

ぱちりと片目を閉じて見せるユイシーク。

そして面と向かって可愛いと言われたミフィシーリアは、先程のユイシークの片頬以上に真っ赤になった自分の頬を、思わず両手で押さえたまま黙り込んでしまった。

11 ― 謝罪（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

少々時間が空いてしまいまして、申しわけありません。

実はここのところ、この『辺境令嬢』を書くテンションが少々下がり気味だったので……

別に何か身辺であったというわけではなく――

皆さんに読んでいただいているこの『辺境令嬢』。お陰様を持ちまして、お気に入り登録が２００を超えて間もなく２５０に至ろうかとしています。

反面、お気に入り登録から外される方もみえるわけで。

しかも、更新した時にだだーっと登録数が減ったりすると、自信がなくなるというか、凹むというか……

そのため、少々書く意欲が下がっていました。

お気に入り登録などが減るのは仕方ないと思います。期待されていたような話の展開と違ったりもするでしょう。純粋にこの『辺境令嬢』に飽きたという方もみえるでしょう。

その事は理解しているつもりなのですが、それでも更新した途端に減るというのは少々……

もちろん、偶然の一致という可能性もあるわけですが。

それでも、「次の更新はいつですか」とか「楽しみにしています」と言ってくださる方もみえます。

そんな方たちの声を糧に、何とか今回の話を書きました。

愚痴じみた事を零してしまって申し訳ありません。

ただ、途中で投げ出すような事だけはしたくないので、完結だけはさせるつもりです。

いつ頃の完結になるのかなどは全くの未定ですが、気長にお付き合いいただければ幸いです。

今後ともよろしくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8516v/

辺境令嬢輿入物語

2011年10月12日10時58分発行